

宮城県多賀城跡調査研究所年報2002

多賀城跡

宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

当研究所は特別史跡多賀城跡の発掘調査に加え、昭和45年から調査成果に基づいた環境整備を継続的に実施してきた。これにより多賀城跡は歴史公園としての体裁を整えつつある。特に平成7年度には南門一政庁間を重点整備地区と位置付けている。これは多賀城市が実現を目指している多賀城南門の立体復原計画と一体となった整備の計画である。今後、これらの整備が進み、多賀城跡が野外博物館としての機能を果たすことを願っている。

2001年と2002年の2ヶ年は、多賀城跡南門地区を対象とした調査を実施した。その結果、築地塀の変遷や南門一政庁間を結ぶ道路、南門周辺での広場の発見など、いくつかの新たな知見を得ることができた。本年度の第73次調査結果も多賀城跡の整備構想の基礎となるものである。本書はこの第73次調査結果と平成11年度から14年度にかけて実施した現状変更に伴う8件の調査結果を報告する。

本書の刊行にあたり、日頃から御指導をいただいている多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会の関係者、調査を支援して下さった他の多くの皆様方に所員一同心から感謝申し上げます。

平成15年3月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長 加藤道男

目 次

I. 調査研究事業の計画	1
II. 第73次調査	
1. 調査の目的と経過	2
2. 地形と層序	2
3. 発見した遺構と遺物	6
4. 考察	35
III. 現状変更に伴う調査（平成11年度から平成14年度まで）	40
IV. 付章	58
写真図版	69

例 言

1. 本書は平成14年度に実施した多賀城跡第73次調査、平成11年度から平成14年度までに実施した8件の現状変更に関する調査成果と、多賀城跡の環境整備、関連研究事業、普及活動の概要を収録したものである。
2. 当研究所のおこなう発掘調査と環境整備等の事業は多賀城跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに行っている。
3. 多賀城跡第73次調査の発掘調査体制、調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調査主体 宮城県教育委員会
調査担当 宮城県多賀城跡調査研究所長
調査員 阿部 恵・佐藤則之・古川一明・吾妻俊典
調査期間 平成14年5月13日～平成14年10月31日
調査面積 約1,800 m²
調査参加者 三嶋 滋・高橋 磨・黒井富士夫・猪俣信義・菊池輝夫・石川豊輔・後藤節子・鶴巻まき子・中村みつ江・千葉菊枝・佐藤寿子・伊藤とし子・山家由子・千葉さおり・堺沢亜紀・若松かおり・斉藤慶吏・相原智康・前田尚志・門脇隆志(臨時職員)・萬 景準・村上裕次・佐々木智徳(東北大学大学院)
3. 測量原点は政庁正殿跡（SB150B）の身舎南側柱列中央に埋設してある。この原点と政庁南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線に定めた。南北の基準線は真北に対して1° 04' 00" 東に偏している。
4. 瓦の分類基準は多賀城跡調査研究所『多賀城跡政庁跡図録編』（1980年）、『多賀城跡政庁跡本文編』（1982年）による。
5. 土色については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖11版』日本色研事業株式会社(1996年)にもとづいた。
6. 鉄製品の保存処理については、東北歴史博物館及川規氏の協力を得た。
7. 本調査で得られた資料は、宮城県教育委員会にて保管している。
8. 本調査の成果の一部は、『現地説明会資料』、『宮城県遺跡調査成果発表会資料』、『古代城柵官衙遺跡検討会資料』で紹介しているが、本書の内容が全てに優先する。
9. 本書は、調査員で討議と検討をし、I、II、IVを古川が、IIIを吾妻、白崎恵介(旧職員)、山家由子(臨時職員)が執筆し、古川と吾妻が編集した。

表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。

表紙写真 第73次調査築地塀跡横断面(E45ライン)

I. 調査研究事業の計画

当研究所では、多賀城跡の発掘調査、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査を計画的・継続的に実施している。ここでは、多賀城跡の発掘調査計画について述べ、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査については、付章にその概要を収録した。

多賀城跡の発掘調査は、昭和44年の研究所設立以来、多賀城跡調査研究指導委員会の指導のもとに、5カ年ごとの計画を立案し、実施している。本年度は、平成10年11月の第9回多賀城跡調査研究現地指導委員会で承認された多賀城跡発掘調査第7次5カ年計画（表1）の4年度に当たり、外郭南門地区を対象に第73次調査を実施し、南門東側築地塀と政庁—南門間道路跡の様相を明らかにした。

年次	発掘調査回数（対象地区）	調査面積	予算
平成11年度	第70次調査（城前地区南部）	2,000 m ²	37,700 千円
平成12年度	第71次調査（城前地区南部）	2,000 m ²	32,300 千円
平成13年度	第72次調査（南辺築地塀跡・政庁—南門間道路跡）	1,000 m ²	28,900 千円
平成14年度	第73・74次調査 （南辺築地塀跡・政庁—南門間道路跡）	1,800 m ²	26,000 千円
平成15年度	第74・75次調査（外郭北門跡の状況）	1,800 m ²	25,220 千円
合計	5地区	8,600 m ²	150,120 千円

表1 多賀城跡発掘調査第7次5カ年計画

（平成14年度までは実績、平成15年度は計画）

	氏名	現職	専門分野
委員長	須藤 隆	東北大学教授	考古学
副委員長	今泉 隆雄	東北大学教授	古代史学
委員	飯淵 康一	東北大学教授	建築史学
委員	井手 久登	東京大学名誉教授	緑地学
委員	岡田 茂弘	東北歴史博物館館長	考古学
委員	笹山 晴生	学習院大学教授	古代史学
委員	佐藤 信	東京大学教授	古代史学
委員	町田 章	独立行政法人文化財研究所理事 奈良文化財研究所長	考古学
委員	渡辺 定夫	工学院大学教授	都市工学
委員	平川 南	国立歴史民俗博物館副館長	古代史学
委員	進士五十八	東京農業大学学長	造園学

表2 多賀城調査研究指導委員会委員名簿

Ⅱ. 第73次調査

1. 調査の目的と経過

(1) 調査の目的

第73次調査は、外郭南門の東方と北方に2つの調査区を設定した。東方の調査区は、南門東側の築地塀の構造と変遷をとらえることを目的として設定した。一方、北方の調査区は通称「鴻の池」の低湿地部分の南東岸を検出する目的で県道玉川一岩切線の北側に設定したものである。以後の記述では前者を「南門跡東調査区」、後者を「鴻の池南東調査区」とする。

(2) 調査の経過

第73次調査の2地区の調査経過について記述する。

まず、南門跡東調査区には、サクラ、モミジ、カエデ、マツ、スギ、サワラなどの樹木が計57本あった(内藤:1997)が、今回の発掘調査区の設定に先だってスギ5本(个体番号14・15・16・20・21)を伐採した。5月13日から調査区のグリット設定と、器材搬入をおこなった。調査区の設定に際しては、調査対象地が多賀城碑覆屋に近接し、年間を通じて見学者が多く訪れる史跡公園内であるため、園路や石碑、説明板などの公園施設や樹木を避けて設定した。

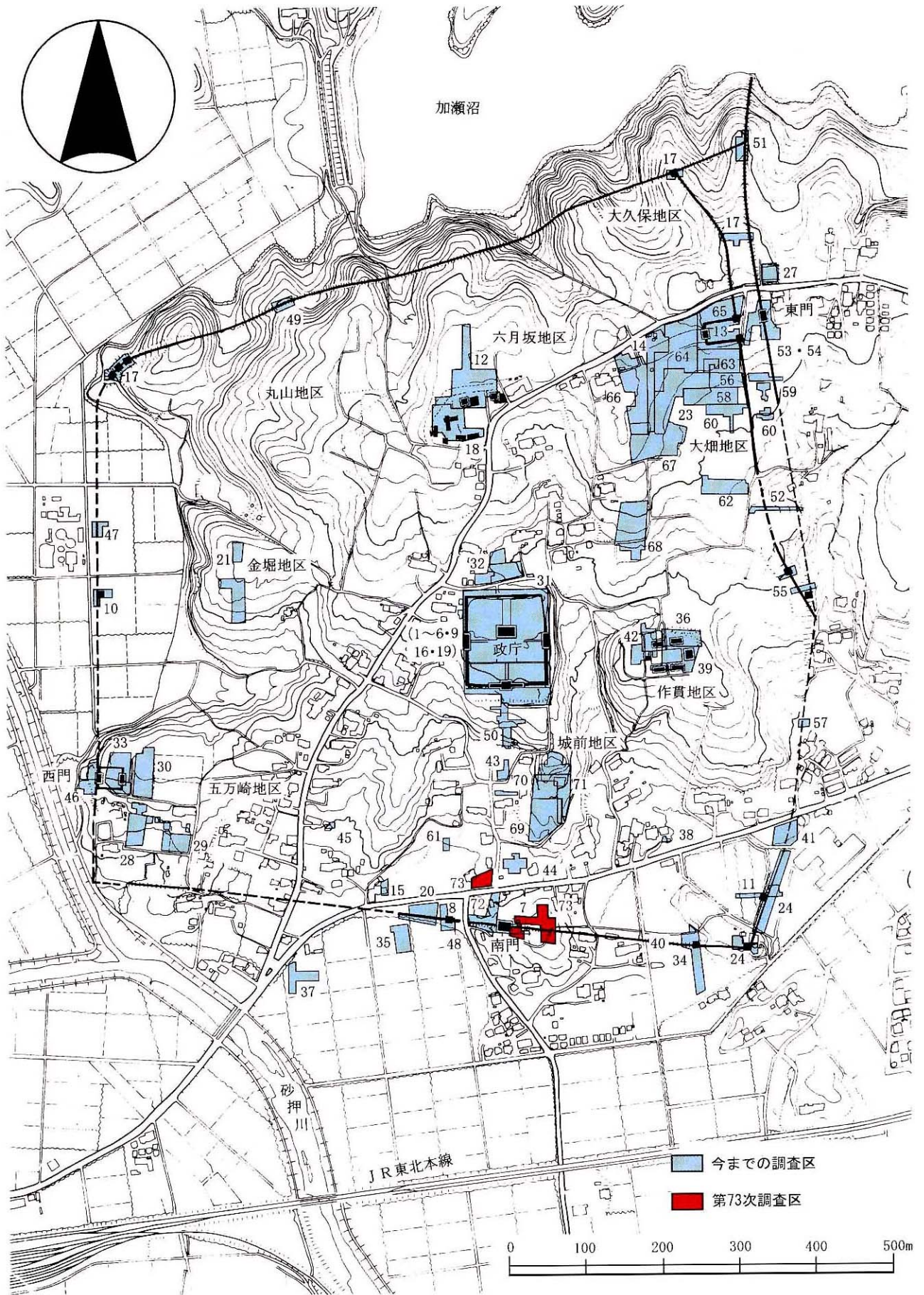
表土除去作業にあたっては、調査区周囲に保護柵を設置し、5月27日から30日までの4日間、バックホウによる排土の除去作業をおこなった。その結果、調査対象地の南辺築地塀の南北両側は、表土直下が基盤の岩盤であることが確認され、古代の堆積層は残っていなかった。検出された遺構として、北東部の掘立式建物跡と南門周辺の溝などがある。

次に、鴻の池南東調査区については民家移転前の敷地境に残されていた立木(サワラ3本)を伐採した後、表土除去作業を5月31日から6月7日までおこなった。調査の結果、調査区内の南東部では表土直下が基盤の岩盤であることが確認され、通称「鴻の池」の低湿地部分の南東辺が明らかになった。しかし、岩盤上は宅地造成の際に大規模な削平を受けていて古代の遺構は検出されなかった。なお、低湿地部分は掘り下げなかった。

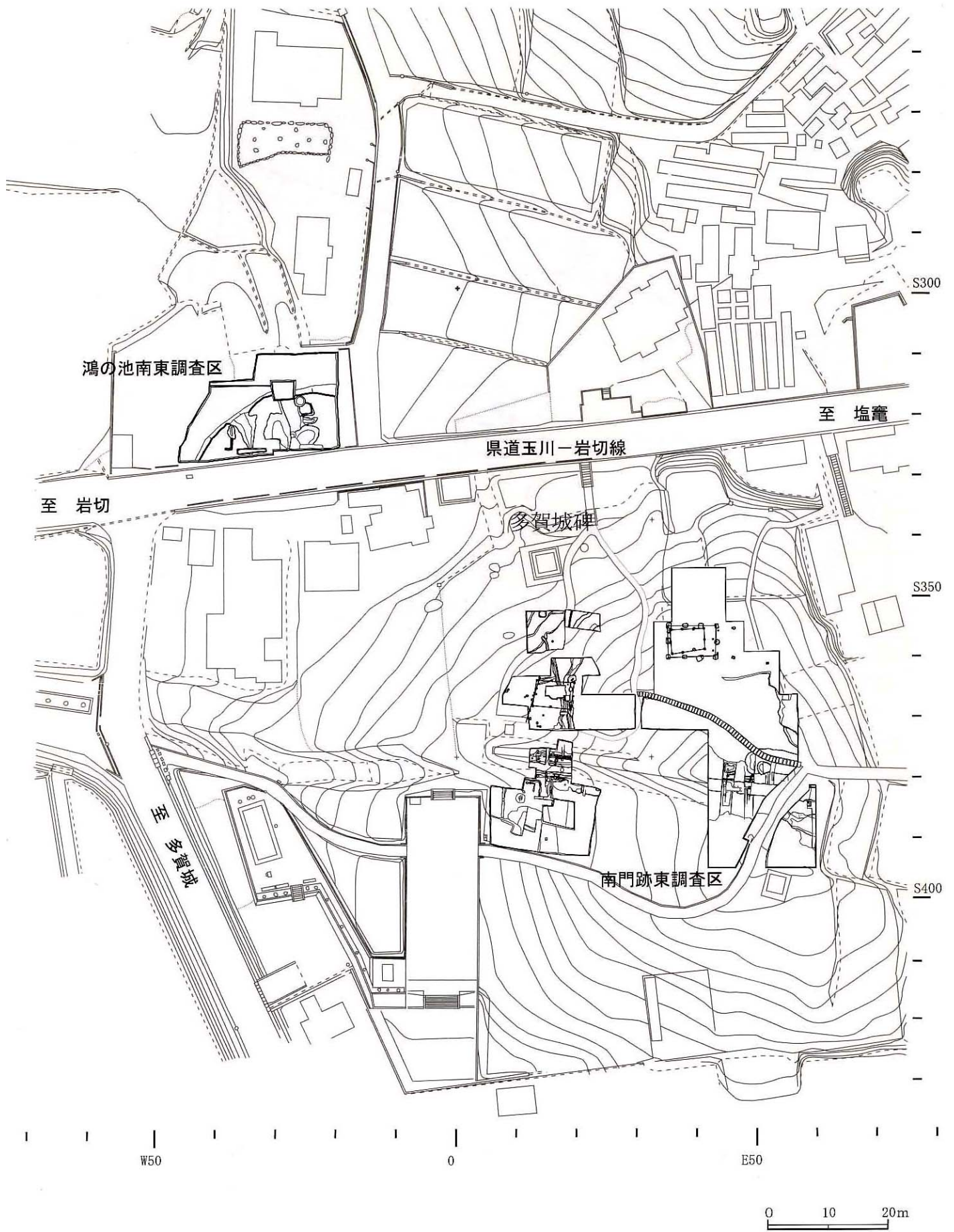
両地区の表土除去終了後、6月17日から遺構精査と並行しながら測量用の基準点を設置し、1/20の遺構平面図、断面図の作成、写真撮影を行った。9月10日には多賀城跡調査研究現地指導委員会による現地指導を受けた。また、9月12日に報道機関に対して調査成果を公表し、9月14日に一般の人々を対象に現地説明会を行い、約320名の参加があった。12月21日の平成14年度宮城県遺跡調査成果発表会と、2月8日の第29回古代城柵官衙遺跡検討会で概要を報告した。

2. 地形と層序

外郭南門跡は政庁南門跡の310m(約3町)南に位置し、政庁南門と外郭南門の標高差は約20mである。外郭南門跡は、東から西になだらかに下る標高10m前後の丘陵斜面に立地する。北側には政庁南門と外郭南門間を分断するように西から東に沢地が入り込み、そこを現在の県道玉川一岩切線が通っている。地籍上では、外郭南門跡の東側が「田屋場」で、外郭南門跡の西側は南辺築地塀の南側が



第1図 第73次調査区の位置



第2図 調査区位置図

「田屋場」、北側が「坂下」である。今回の調査区のうち南門跡東調査区は「田屋場」に、鴻の池南東調査区は「坂下」に含まれている。

調査対象地内での堆積層の分布は、南門跡東調査区の南辺築地塀跡周辺と鴻の池南東調査区の低湿地部分に限られ、その他の地域では基本的に表土直下が岩盤となっている。岩盤上面は南西に緩傾斜していて、表層は浸食による土砂の流出が著しく、大半は基盤の凝灰岩およびアルコース砂岩の残留巨礫が現表土により直接覆われている状況である。したがって、基本層序については、南辺築地塀跡周辺についてのみ記述する。

今回の東側調査区内では南辺築地塀跡は尾根状の高まりとなって残り、築地塀跡の南北両側に、築地塀にともなう整地層・崩壊土層を含めた以下の各層が堆積している（第3図）。

【第1層】表土。層の厚さ 20～30cm。

【第2層】築地塀南北両側に分布する。厚さ 20～40cm。c 築地塀の崩壊土層で瓦破片を少量含む。

【第3層】築地塀南北両側に分布する。厚さ 10～30cm。c 築地塀にともなう嵩上げ整地層。

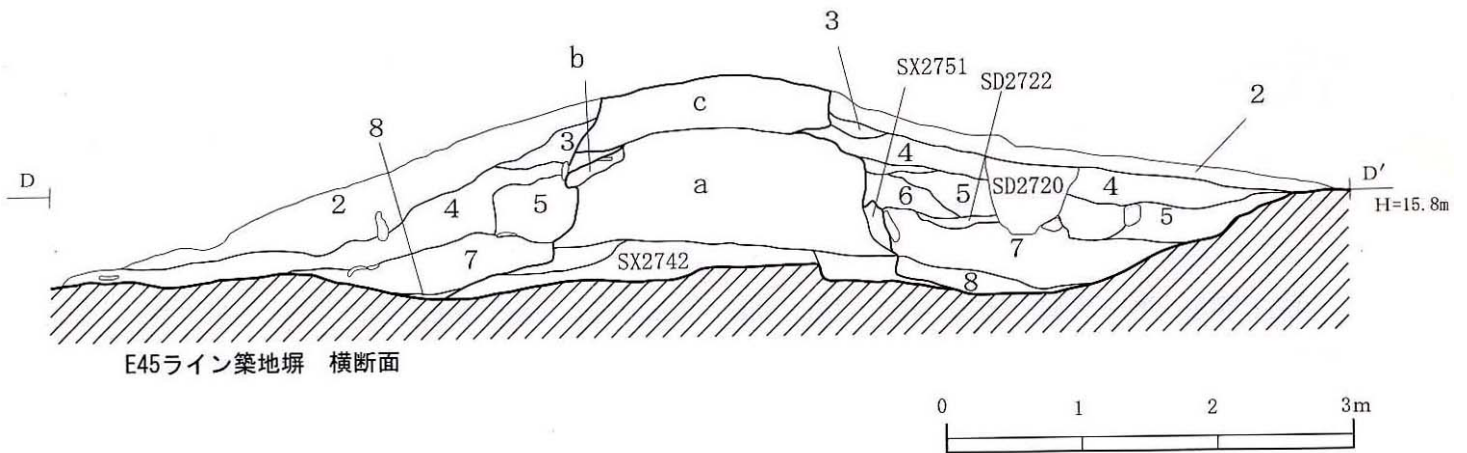
【第4層】築地塀南北両側に分布する。厚さ 10～20cm。b 築地塀崩壊土層で、上層にブロック状の灰白色火山灰を含む。瓦破片が大量に含まれる。

【第5層】築地塀南北両側に分布する。厚さ 50cm。b 築地塀の補修にともなう嵩上げ整地層。

【第6層】築地塀北側にのみ分布する。厚さ 30cm。b 以前の築地塀崩壊土層で瓦破片を少量含む。

【第7層】築地塀南北両側に分布する。厚さは南側で 20cm、北側で 50cm。b 以前の嵩上げ整地層。

【第8層】築地塀南北両側に分布する。厚さ 20cm 前後。a 築地塀崩壊土層で瓦破片を少量含む。



第3図 基本層序

3. 発見した遺構と遺物

南門跡東調査区では南辺築地塀跡に関係する遺構、掘立柱建物跡、南門跡周辺の遺構を発見した。鴻の池南東調査区では「鴻の池」の低湿地部の南東辺を検出したが遺構は検出されなかった。

出土遺物は、東側調査区では整理用平箱で合計 380 箱におよぶ大量の遺物が出土した。内訳は築地塀崩壊土出土遺物が 90 箱、その他の遺構に伴う遺物が約 60 箱、表土出土遺物が 230 箱である。遺物の種類別にみると瓦類が 372 箱、土師器・須恵器・陶磁器（近世）類は 6 箱、金属製品は 2 箱で、築地塀跡周辺出土の瓦類が出土遺物の大半を占めている。鴻の池南東調査区の出土遺物は表土出土の瓦類が整理箱で 2 箱である。低湿地からの出土遺物はない。

以下、南門跡東調査区で発見された遺構、鴻の池南東調査区で発見された遺構、出土遺物の順に記述する。

(1) 南門跡東調査区の遺構

南門跡東の調査区では、南辺築地塀跡に関係する遺構、掘立柱建物跡、南門跡周辺の遺構などを発見した（第 2 図）。

遺構番号のうち、第 7・48 次調査で発見された遺構については既往の番号で記述する。築地塀の変遷・補修については、新たにアルファベット小文字 a～e で表記する。また、S F 202 築地塀跡の両側で検出された小穴については個別にピット番号を付し、遺構等の平面的位置は、政庁原点からの距離で示す。（例：E10=東 10m）

①南辺築地塀跡と出土遺物

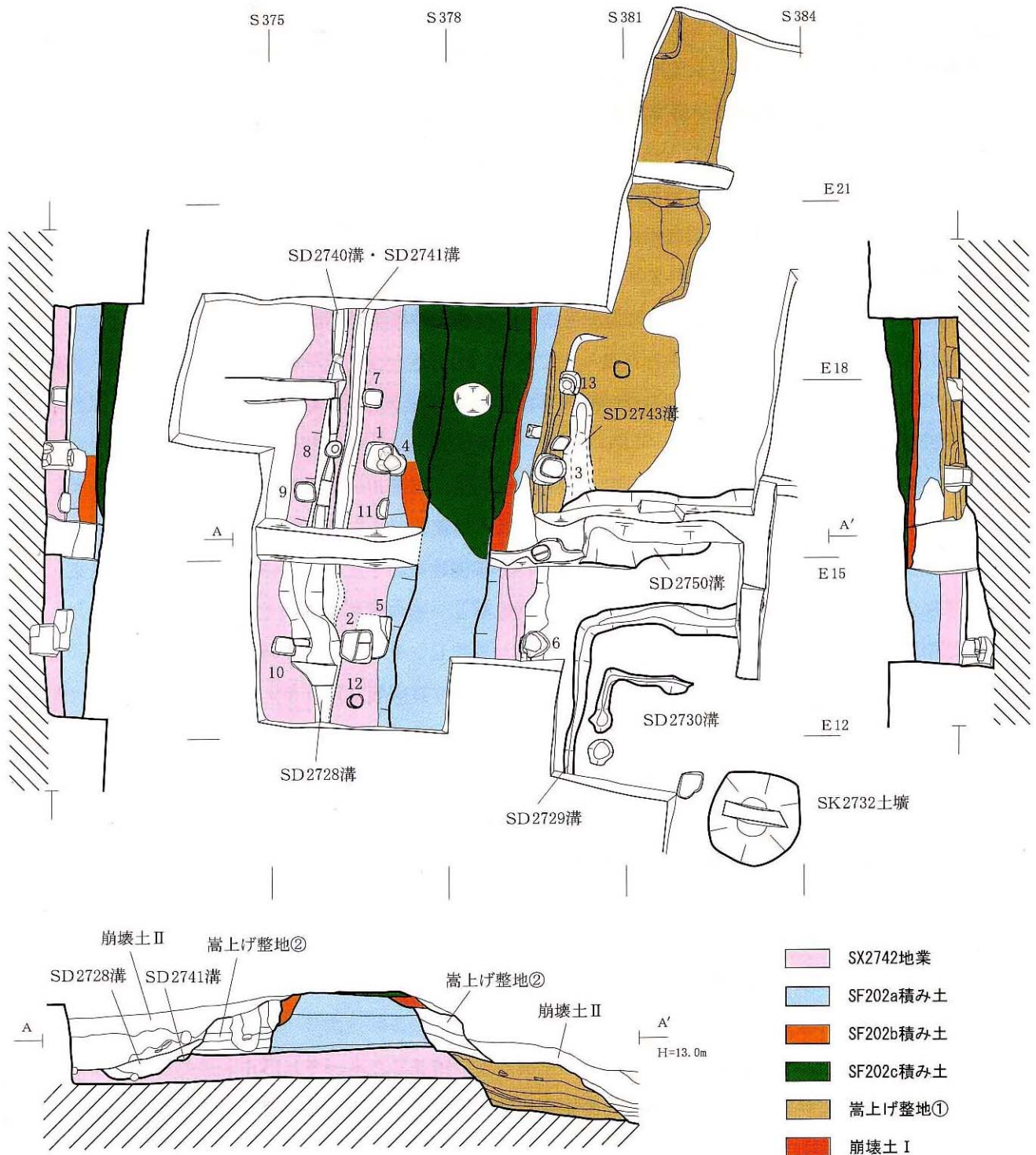
S F 202 築地塀跡は多賀城跡外郭南辺を画する築地塀跡である。調査対象地内では、東から西になだらかに下る丘陵斜面に立地し、南門跡東側の E 6～E 51 の約 45m にわたって高さ 1.5m、幅 6 m 前後の土塁状の高まりとなって残っている。南辺築地塀跡ではもっとも残りのよい場所である。

調査の結果、南辺築地塀跡の立地する丘陵斜面は、表土直下が基盤の岩盤となっていて、築地塀の構築に際しては、この岩盤を築地塀の長軸方向に幅 6～7 m の幅で削り出し、その上面を整地で平坦にするための基礎地業をおこなって築地塀本体を積んでいることが確認された。また、築地塀の側面からの観察や横断方向に断ち割った断面を検討した結果、本体積み土に 5 時期の変遷がみとめられ、それにとまなう犬走りの嵩上げも確認した。なお、嵩上げにとまなない築地塀の基底幅は多少変化しているが、塀本体の位置や方向は、構築当初から廃絶まで変化しないことが確認された。

今回の築地塀跡の調査は、E 0～E 12 と E 19～E 42 の間がサクラの木や公園施設があって調査できなかったため、E 12～E 19 と、E 42～E 60 の 2 区に分けて調査をおこなった。したがって以下では、E 12～E 19 と、E 42～E 60 の 2 地区に分けて築地塀とそれに関係する遺構の状況を記述する。

E 12～E 19 (第 4 図)

E 12～E 19 区間では、S F 202 築地塀跡の両側に堆積していた崩壊土と嵩上げ整地を第 7 次調査の際に除去している。今回は南北両側の調査範囲を拡張し、築地塀横断方向での断ち割りはおこなわずに、積み土の状態を上面と側面から観察した。



第 4 図 南辺築地塀 (E12～E19)

【S X2742 基礎地業】

S F 202 築地塀の基礎地業で基盤の岩盤を約 6 m幅で削り出し、風化礫片を多く含む黄褐色砂質土で整地したものである。層の厚さは 30～40 cmで E 11 以東の築地塀下部か北側に分布する。

層のレベルと土色・土性を検討した結果、第 48 次調査において「S X1539 基礎地業」とした層のうち、E 11 以東の層は今回の S X2742 基礎地業に相当し、E 11 以西で E 6 までの間の層については、築地塀積み土の一部と認識した。

【S F 202 築地塀】

【積み土】S X2742 基礎整地上に版築された築地塀積み土である。残存する基底幅は 2.5m 前後で、残存する積み土の高さは 1～1.5m である。築地塀の方向は東から約 6 度南に偏る。築地塀の積み土を観察した結果、積み直しや補修の痕跡が認められ、築地塀本体に三時期の変遷を確認した。

- a : S X2742 基礎整地上に築かれた築地塀で、積み土は風化岩片を含む黄褐色系の土をほぼ水平に版築したもので、残存する基底幅は約 2.5m、高さ約 1 m である。
- b : a 築地塀の北側上部で、E 15～E 17 の範囲にみられる積み土である。奥行き 20 cmほどまで削り込んで積み直している。積み土は、風化岩片を含む黄色土で版築は明瞭でない。
- c : E 15 以東の a 築地塀上に築成された積み土である。灰白色火山灰粒を含む崩壊土の堆積後、a 築地塀上部を削平して褐色系の積み土を版築したものである。東にゆくにつれ厚さを増し、E19 での残存高は 0.5m 前後である。

今回の観察により、第 48 次調査で「S F 202 B 2」と一括した基礎地業上の築地塀積み土は、a～c の三時期に分かれること、さらに a・c の積み土の間に崩壊土が介在することを新たに確認した。また、第 48 次調査で E 11 から西側で南門寄りの S X1539 基礎地業とした層についても、再検討の結果、その下層の「S F 202 B 1」積み土とともに上記 a 築地塀と一連の築地塀積み土であると認識した。さらにこの層について、第 48 次調査では S A1538 柱列と重複し、その抜取穴を覆っているとみたが、再検討の結果、逆に抜取穴に切られているものと判断した（写真図版 6）。

【嵩上げ整地】S F 202 築地塀の南北両側に嵩上げ整地層があり、北側で一時期、南側で二時期の嵩上げ整地層が確認された。築地塀本体積み土との関係から、南側下層の整地①が古く、北側の整地と南側上層の整地は層のレベルや土質から同一時期の整地②とみられる。

- ① : 地塀跡南側の S X2742 基礎地業を削って造成された平坦面上に嵩上げた整地層で、幅は約 2 m ある。黄褐色土を版築状に積み重ねて整地したもので、厚さ 70 cm前後である。
- ② : a 築地塀南北両側を基礎整地まで削平してから嵩上げた整地層で、幅は北側が約 1.5m、南側が約 1m ある。黄褐色砂質土を版築状に積み重ねて整地したもので、厚さ 50cm 前後である。重圏文軒丸瓦・単弧文軒平瓦が含まれている。

これらの整地層は E 45 に設定されたベルトの土層断面で確認したもので、ベルト以外の部分は第 7 次調査で除去されているため、他の遺構との重複や嵩上げ整地の東西方向の広がりは不明である。

【柱穴】築地塀両側の整地層上面で柱穴を 13 個検出した。

(P 1～3) S X2742 基礎整地上面で検出した。第 48 次調査で S F 202A 寄柱穴としたもので、埋土は第 7 次調査の際に掘りあげられている。P 1・3 は、E 16.5 の築地塀南北両側にある一対の柱穴で、平面形はいずれも一辺 50 cm の方形、深さは 40～50 cm で、北側の柱穴底面に礎盤とみられる河原石が 2 つある。P 2 は、E 13.5 の築地塀北側にある柱穴で、掘り方の平面形は一辺 50 cm の方形で、深さは 50 cm である。柱間は、掘り方心々で、桁行の P 1・2 間が約 3 m、梁行の P 1・3 間が約 2.7m である。位置関係から b 築地塀以前の寄柱穴とみられる。

(P 4～6) S X2742 基礎整地上面で検出した。第 48 次調査で S F 202B1・B2 寄柱礎石としたもので、埋土は第 7 次調査の際に掘りあげられている。P 4・5 は P 1・2 と重複し、これらよりも新しく、a 築地塀積み土に半ば食い込む位置にある。いずれもごく浅く、P 4 は底面に河原石を 1 つ据えている。P 6 は築地塀南側にあり、岩盤を削り、その底面に扁平な河原石を 2 枚重ねて据えている。柱間は、掘り方の心々で、桁行の P 4・5 間が約 3 m、梁行の P 5・6 間が約 2.5m である。位置関係から嵩上げ整地②以降の築地塀の寄柱穴とみられる。

(P 7～13) 組み合わせ不明の柱穴を 7 つ検出した築地塀の北側に 6 つ、南側に 1 つで、確認面はいずれも S X 2742 基礎整地上面である。これらは築地塀寄柱穴、側柱、足場穴などの可能性があるが、時期や組み合わせは不明である。

【溝】 築地塀両側の整地層上面で築地に並行する溝を 5 条検出した。北側では S D 2728・2740・2741 溝、南側では S D 2743・2750 溝である。S D 2740・2741 溝は幅 20 cm 前後、深さ 10 cm 前後の浅い溝である。S D 2728・2743・2750 溝は幅 1m 前後、深さ 30cm 前後である。これらは、雨落溝もしくは犬走り外側の溝とみられるが、築地塀本体との関係は明確でない。

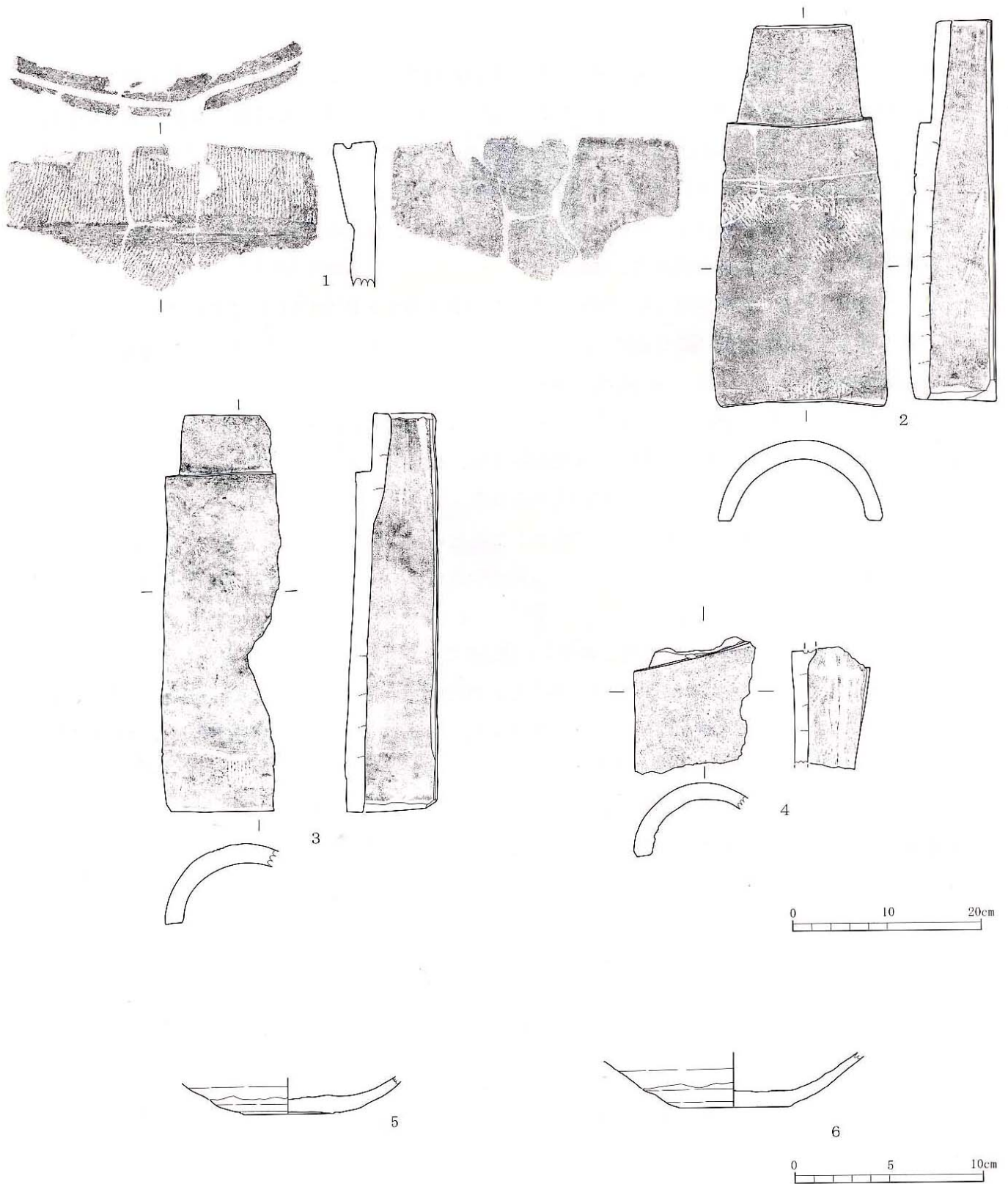
S D 2741 溝堆積層から平瓦 II B 類の破片が出土している。図示できるものはない。

【崩壊土】 時期の異なる築地塀崩壊土が 2 層ある。崩壊土 I は a・b 築地塀の上に堆積した、厚さ 10 cm 前後で灰白色火山灰粒を含む層である。崩壊土 II は築地塀両側の嵩上げ整地層上に堆積した、厚さ 30～50 cm の黄褐色土層である。これらはベルト部分を除き、第 7 次調査の際に掘りあげられている。

【出土遺物】 S D 2728 溝と崩壊土 II から瓦と土器の破片が出土している (第 5 図)。

S D 2728 溝堆積層からは、瓦と土器の破片が出土している。瓦は、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。軒平瓦は 640 単弧文軒平瓦 (第 5 図 1) が 2 点ある。丸瓦は II・II B 類 (第 5 図 2) がある。平瓦は I A・B 類、II B・C 類がある。土器は、須恵器高台坏、甕の破片があるが、図示できるものはない。

崩壊土 II からは、瓦と土器の破片が出土している。瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は 451 陰刻花文軒丸瓦、軒平瓦は 640 単弧文軒平瓦、721 均整唐草文軒平瓦 (A・B 不明) がある。丸瓦は II・II B 類 (第 5 図 3) があり、その中には刻印文字の「伊」(写真 27)・「物」(写真 28) や、刻印記号の「本」・「上」などがみられるものがある。平瓦は I A・B 類、II B・C 類があり、II B 類では刻印文字の「物」A、II C 類ではへら書きの「井」(写真 17) がみられるものが含まれる。また、丸瓦で丸瓦部と玉縁部の境が斜めになるものがある (第 5 図 4)。土器は、須恵器坏 (第 5 図 5・6) がある。いずれも、胎土は、練りが悪いため粘土の縞模様がみられる。



No.	出土遺構	層位	種別	型式・分類	法量(単位=cm)・特徴	登録	箱番号	写真
1	SD2728 溝	2層	軒平瓦	単弧文	長さ：不明・広端幅：不明・狭端幅：30	R 2	B13565	3
2	"	"	丸瓦	ⅡB類	全長：41.8・玉縁長：10.5・前端幅：18.4・玉縁幅：14.0	R 4	B13565	9
3	SF202 築地塀	崩壊上	丸瓦	ⅡB類	全長：43.5・玉縁長：6.5・前端幅：19.0・玉縁幅：13.0	R 44	B13571	11
4	"	"	丸瓦	ⅡB類	玉縁部の段が長軸に対して斜め	R 40	B13570	14
5	"	"	須恵器・坏		底径：6.2、底部：回転糸切り無調整	R 2	B13586	—
6	"	"	"		底径：4.8、底部：回転糸切り無調整	R 3	B13586	—

第5図 築地塀崩壊土・溝出土遺物

E 42～E 60（第 6 図）

E 42～E 60 区間は、これまで未調査の地区であり築地塀本体が厚い崩壊土に覆われている。調査の結果、南門地区の丘陵の最高所にあたるE45とE48の築地塀中央に近世の墓塚と近代の火の見櫓の柱穴による攪乱が検出された。このため、これらの新しい遺構を掘り下げて築地塀の横断面を観察した。

【S X 2742 基礎地業】

E 45、E 48 の築地塀横断面で確認した基礎地業である。E 12～E 19 区間と同様に、基盤の岩盤を約 6 m の幅で削り出し、整地している。整地層は i・ii の 2 層に大別され、i 層は E 12～E 19 区間の整地と土質が共通する。i 層の整地層上面で検出した P 12 を ii 層が覆っていることから、i 層と ii 層の間には一定の時間差があるとみられる。

i 層：築地塀下層の中央部分にある風化礫片を多く含む黄褐色砂質土で、層の厚さは中央部で最大 30 cm 前後で南北両裾にいくにつれ次第に薄くなる。

ii 層：i 層の南北両側にみられる赤褐色土層で、厚さ 20 cm 前後の積み土である。

【S F 202 築地塀】

【積み土】S X 2742 基礎整地上に版築された築地塀積み土である。残存する基底幅は 2.5m 前後で、残存する積み土の高さは 1～1.5m である口築地塀の方向は東から約 6 度南に偏る。

築地塀の積み土を観察した結果、積み直しや補修痕跡から、築地塀本体に三時期の変遷を確認した。

a：E 45 の築地塀横断面と、E 48～E 60 の平面で確認した。E 48～E 60 では、築地塀上部が後世の畑により削平されているため、a 築地塀積み土上部の状態を平面的に観察することができた。

風化岩片を含む黄褐色土を版築したもので、版築の層理面はほぼ水平で、E 49、E 59 の 2 カ所で積み土の積み手の違いを確認した。

b：E 45、E 48 の築地塀横断面で確認した築地塀補修痕跡である。a 築地塀南側辺上部を奥行き 40 cm ほどまで削り込んで積み土を積み直している。風化岩片を含むにぶい黄褐色砂質土で版築は明瞭でない。横断面以外の部分は崩壊土に覆われているため、補修の範囲は不明である。

上部は灰白色火山灰粒を含む崩壊土と築地塀積み土に覆われている。

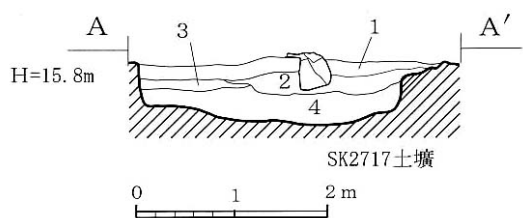
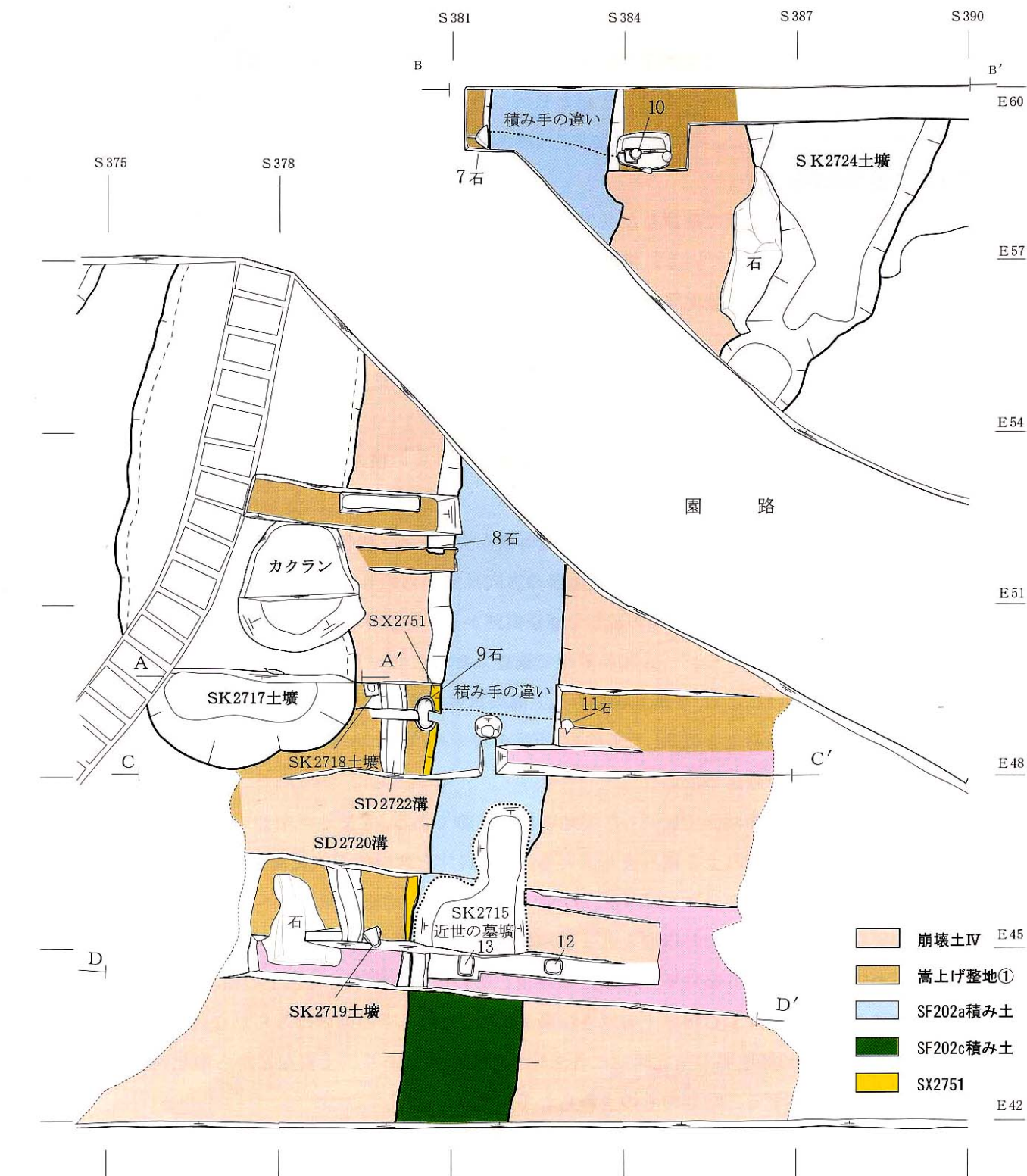
c：E 45 以西で確認した。b 築地塀の崩壊土堆積後、その上部を削平し褐色土の積み土を版築したものである。残存する積み土の厚さは最大 0.4m で積み手の違いはみられない。

【嵩上げ整地】S F 202 築地塀の南北両側に各三時期の整地層があり、土質などから南北両側の嵩上げ整地はそれぞれ対応する三時期のものとみられる。

①：築地塀の南北両側を、凝灰岩片を多量に含む黄褐色砂質土で嵩上げ整地したもの（第 7 層）である。幅は北側が約 2 m、南側が約 1 m で、厚さは北側が 70 cm 前後、南側が 20 cm 前後である。南北で整地層の厚さが異なるため、南側のレベルが北側よりも 0.5m 低い。

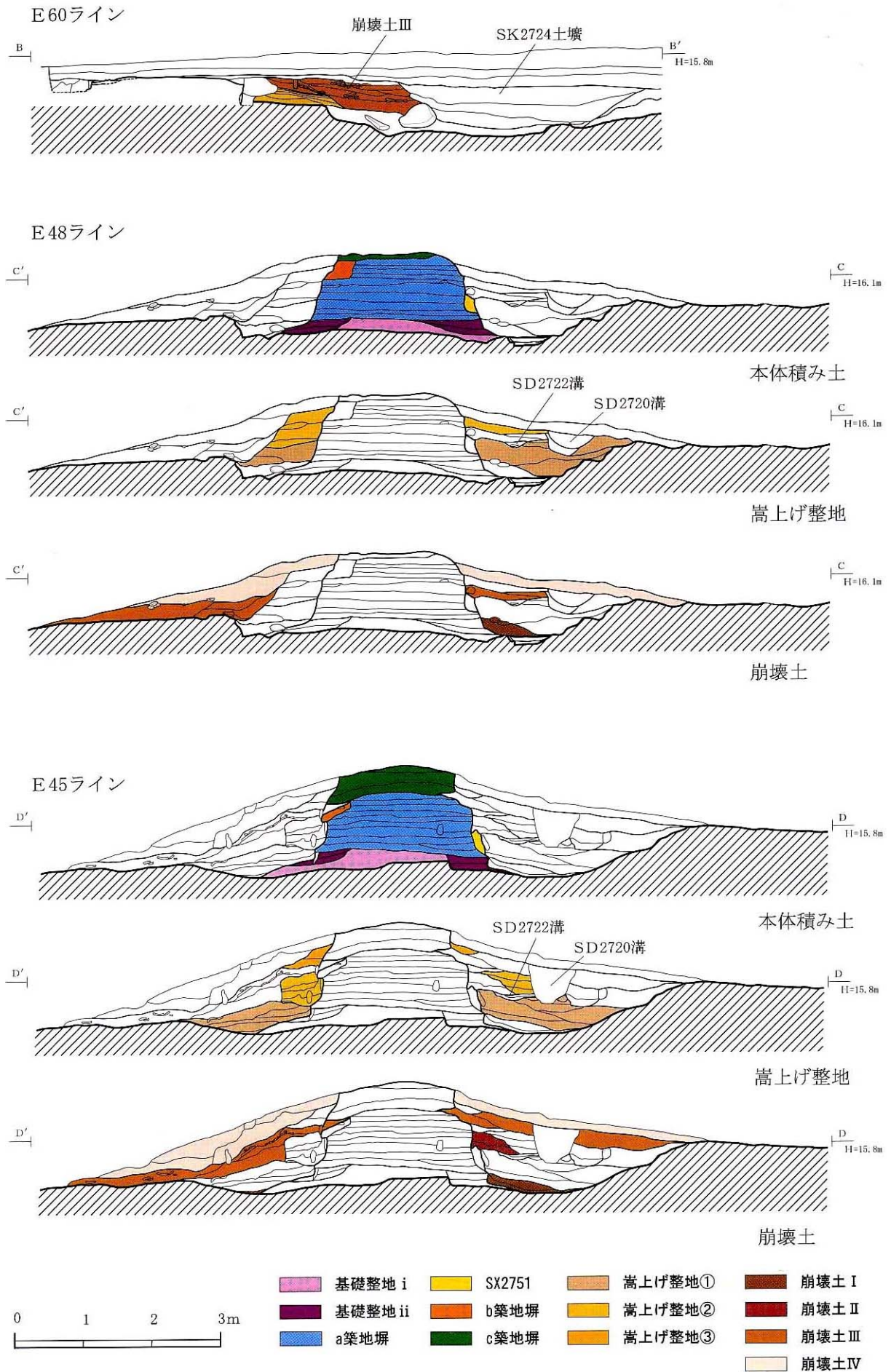
②：築地塀の南北両側に黄褐色土を版築状に積み重ねて整地したもの（第 5 層）である。整地層の規模は南北ほぼ同規模で、幅は約 0.7m、厚さは 50 cm 前後である。南北ほぼ同レベルである。

③：築地塀南北両側に明黄褐色土を版築状に積んだ整地層（第 3 層）である。整地層の規模は南北ほぼ同規模で、幅は約 0.5m、厚さは 10 cm 前後である。



No.	土色	土性	備考	性格
1	褐色 (10YR4/6)	シルト	灰白色火山灰ブロックを含む。	自然流入土
2	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト		自然流入土
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	凝灰岩片を少量含む。	埋め戻した土
4	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	凝灰岩片を多量に含む。	埋め戻した土

第6-1図 南辺築地塀 (E42~60) 平面図



第6-2図 南辺築地塀横断面図 (E42~60)

〔柱穴〕 築地塀両側の整地層上面で柱穴を6個検出した。

P 7～9・11 は、嵩上げ整地①上面で検出した。いずれも築地塀北側積み土に喰い込む位置にある。掘り方の深さは 10 cm前後で、底面に河原石を据えている。柱間は掘り方の心々で、P 7・8間が約 7m、P 8・9間が約 3m、P 9・11間が約 2.5m である。P 10 は掘り方のみである。これらの柱穴は位置関係から嵩上げ整地②以降の築地塀寄柱穴とみられる。

P 12 は S X 2742 基礎整地上面で検出されたもので、平面形は一辺 30 cm の方形、深さは 5 cm である。

〔溝〕 築地塀北側で築地に並行する溝を 2 条検出した。

S D 2722 溝は、嵩上げ整地①上面で検出した上幅 30 cm、深さ 10 cm の溝で、雨落溝とみられる。S D 2720 溝は嵩上げ整地③上面で検出した上幅 60 cm、深さ 50 cm の溝で、犬走り北側の溝である。

〔崩壊土〕 時期の異なる築地塀崩壊土が 3 層ある。

崩壊土Ⅰは、築地塀南北両側の最下層に堆積した黄褐色土層（第 8 層）で、北側では厚さ 20 cm 前後、南側で 5 cm 前後である。a 築地崩壊土である。

崩壊土Ⅱは、築地塀南北両裾に堆積した厚さ 30～50 cm の褐色土層で（第 6 層）である。a・b いずれかの築地塀崩壊土である。

崩壊土Ⅲは、a・b 築地塀積み土の上部から嵩上げ整地②上部にかけて堆積した、厚さ 30～50 cm で灰白色火山灰粒を含む層（第 4 層）である。b 築地崩壊土である。

崩壊土Ⅳは、築地塀南北両裾に堆積した厚さ 30～80 cm の黄褐色土層（第 2 層）である。c 築地塀以降の崩壊土である。

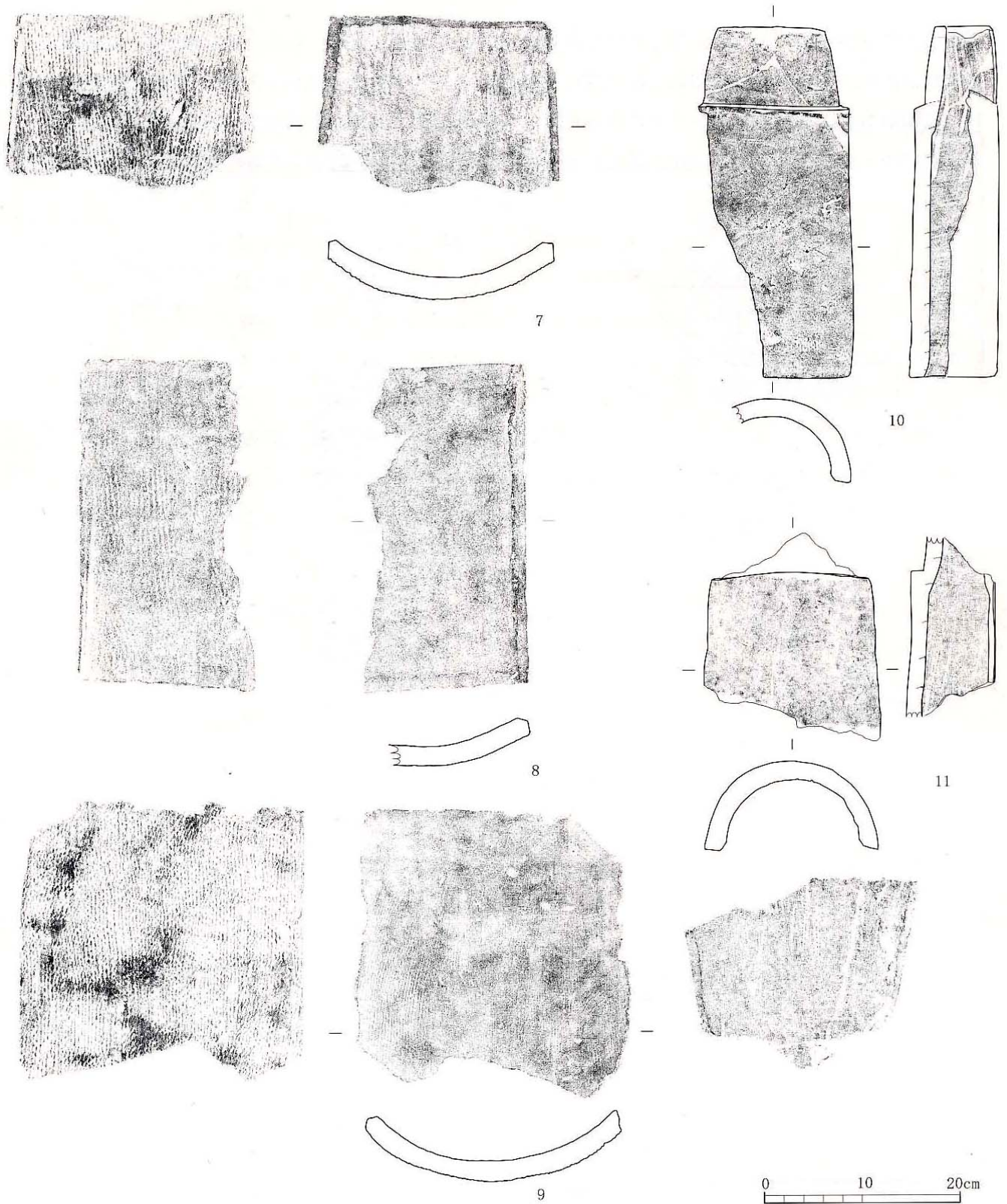
〔出土遺物〕 S D 2720 溝堆積層、嵩上げ整地③、崩壊土各層から瓦、須恵器、灰釉陶器、羽口、鉄鏃などが出土している。

S D 2720 溝堆積層から丸瓦、平瓦が出土している。丸瓦はⅡ・Ⅱ B 類、平瓦はⅡ B・C 類がある。

嵩上げ整地③からは、瓦と土器の破片が出土している。瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は重圏文軒丸瓦、軒平瓦は 640 単弧文軒平瓦、丸瓦はⅡ・Ⅱ B 類、平瓦はⅡ B・C 類がある。土器は、須恵器坏・鉢の破片があるが図示できるものはない。

崩壊土Ⅰ（第 8 層）からは、瓦と土器破片が出土している。瓦は、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。軒平瓦は二重弧文軒平瓦、丸瓦はⅡ・Ⅱ A・B 類、平瓦はⅡ B・C 類がある。土器は土師器坏、椀、須恵器甕の破片があるが、図示できるものはない。土師器は整形にロクロを使用しないもののみである。

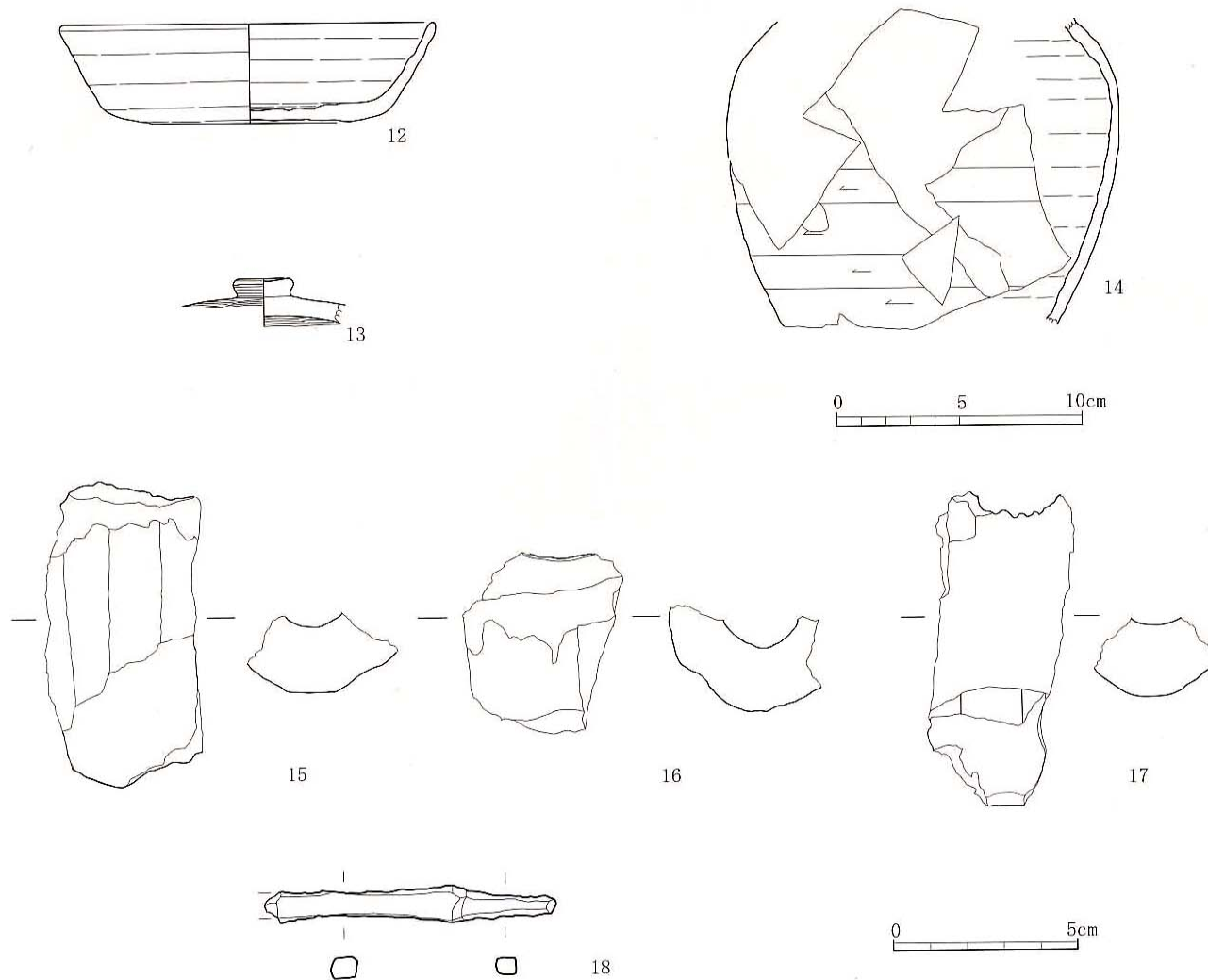
崩壊土Ⅱ（第 6 層）からは、瓦と土器破片が出土している。瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は重圏文軒丸瓦、軒平瓦は 640 単弧文軒平瓦、丸瓦はⅡ・Ⅱ B 類（第 7 図 10）があり、その中には刻印文字の「田」A や、刻印記号の「本」、ヘラ書きの「二」（第 7 図 11）などがみられる。平瓦はⅠ A 類、Ⅱ B 類（第 7 図 7・8）・Ⅱ C 類（第 7 図 9）があり、Ⅱ B 類では刻印文字の「矢」A、Ⅱ C 類ではヘラ書きの「七」（写真 16）、「二」がみられる。土器は、須恵器坏・甕の破片があるがいずれも小破片で図示できるものはない。底部の残る坏は、手持ちヘラケズリ再調整により切り離し技法が不明のものである。



No.	出土遺構	層位	種別	型式・分類	法量(単位=cm)・特徴	登録	箱番号	写真
7	SF202 築地塀	崩壊土(第6層)	平瓦	II B類 bタイプ	長さ: 不明・広端幅: 不明・狭端幅: 22	R16	B13576	—
8	"	"	平瓦	II B類 bタイプ	長さ: 34・広端幅: 不明・狭端幅: 不明	R15	B13576	—
9	"	"	平瓦	II C類	長さ: 不明・広端幅: 27・狭端幅: 26	R14	B13576	8
10	"	"	丸瓦	II B類	全長: 39・玉縁長: 8・前端幅: 17・玉縁幅: 14	R13	B13576	13
11	"	"	丸瓦	II B類	全長: 不明・幅: 18、凹面にヘラ書「二」	R 6	B13575	18

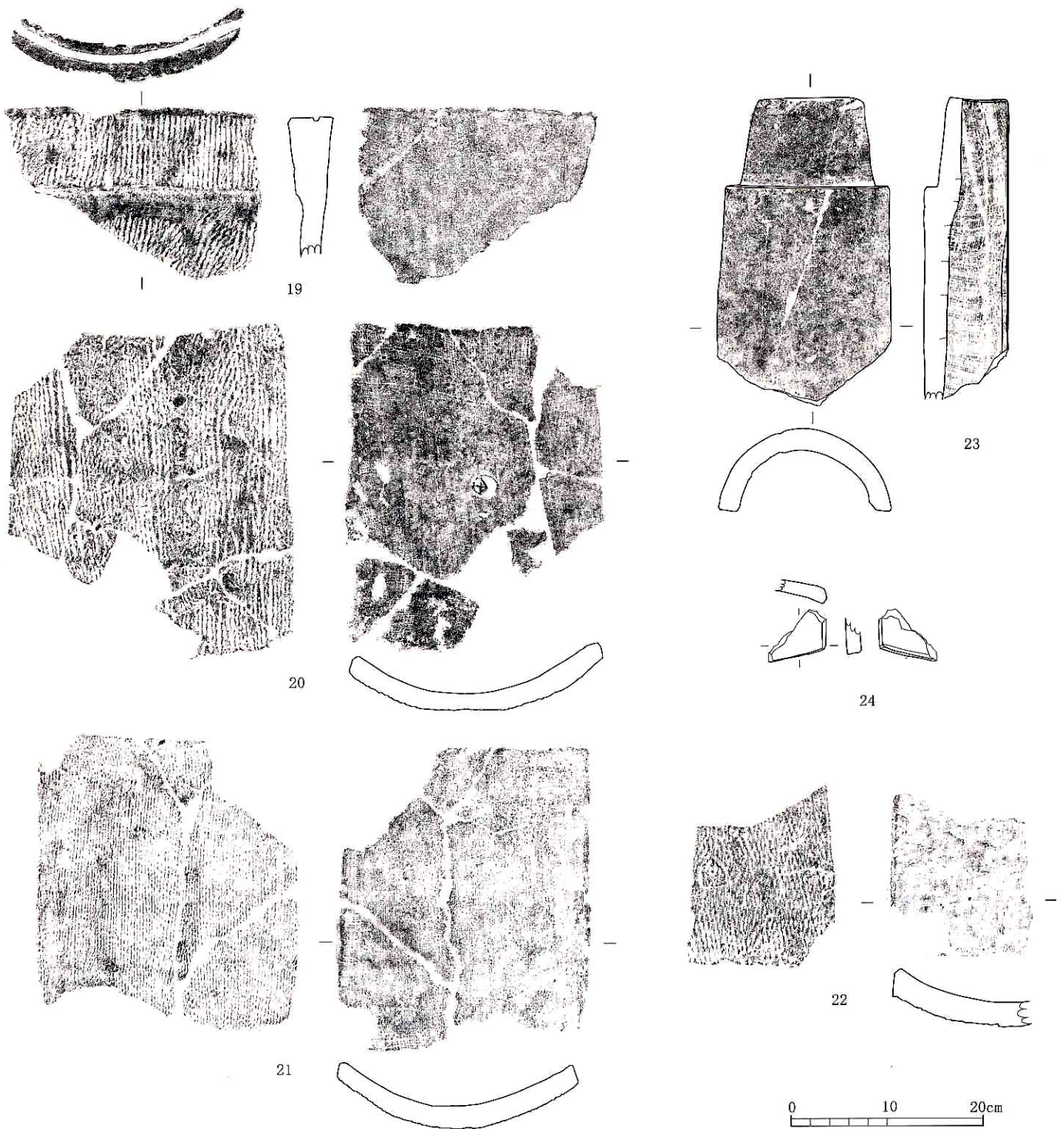
第7図 築地塀崩壊土(第6層)出土遺物

崩壊土Ⅲ（第4層）からは、瓦と土器の破片が出土している。瓦は、丸瓦、平瓦がある。丸瓦はⅡ・ⅡB類があり、その中には刻印記号の「・」（写真37）、ヘラ書きなどがみられる。平瓦はⅠA類、ⅡB・C類があり、ⅡC類ではヘラ書きのみみられるものがある。土器は、須恵器、須恵系土器がある。須恵器は坏・甕、須恵系土器は坏の破片があるがいずれも小破片で図示できるものはない。



No.	出土遺構	層位	種別	法量（単位＝cm）・特徴	登録	箱番号	写真
12	SF202 築地塀	崩壊土（第2層）	須恵牌・坏	口径：15.3・底径：8.0・器高：4.1、底部：ヘラ切り無調整、海綿骨針含	R 1	B 13586	
13	〃	〃	須恵器・蓋	つまみ部のみ、器面の内外全面ヘラミガキ	R 2	B 13586	
14	〃	〃	灰釉陶器・瓶	体部のみ、体部下半をヘラケズリ、肩部に緑色の灰釉	R 1	B 13586	
15	〃	〃	羽口	先端にスラグ付着	R 4	B 13586	62
16	〃	〃		先端にスラグ付着	R 3	B 13586	61
17	〃	〃		先端にスラグ付着	R 1	B 13586	63
18	〃	〃	鉄鏃	長頭鏃、茎・被篋のみの破片	RM11	B 13587	56

第8図 築地塀崩壊土（第2層）出土遺物（1）



No.	出土遺構	層位	種別	型式・分類	法量(単位=cm)・特徴	登録	箱番号	写真
19	SF202 築地塀	崩壊土(第2層)	軒平瓦	単弧文 640	長さ=不明・広端幅 : 不明・狭端幅 : 30	R 3	B13572	4
20	"	"	平瓦	ⅡB類 aタイプ	長さ= 34・広端幅 : 28・狭端幅 : 24、凹面に刻印「㊦」	R 45	B12571	29
21	"	"	平瓦	ⅡC類	長さ=不明・広端幅 : 25・狭端幅 : 不明	R 37	B13574	7
22	"	"	平瓦	ⅡC類	長さ=不明・広端幅 : 不明・狭端幅 : 不明、凸面に方形突出	R 41	B12571	15
23	"	"	丸瓦	ⅡB類	全長 : 不明・玉縁長 : 10・前端幅 : (18)・玉縁幅 : 14	R 36	B13574	12
24	"	"	隅切瓦			R 39	B13570	—

第9図 築地塀崩壊土(第2層)出土遺物(2)

崩壊土Ⅳ（第2層）からは、瓦、土器、羽口、鉄鏝が出土している。瓦は・軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は重弁蓮花文軒丸瓦、軒平瓦は640単弧文軒平瓦（第9図19）、丸瓦はⅡ・ⅡB類があり、その中には刻印記号の「・」（写真38）、ヘラ書きの「レ」「ト」「七」などがみられる。平瓦はⅠA・B類、ⅡB・C類があり、ⅡB類では刻印文字の「矢」A・「物」、刻印記号の「㊀」（写真31）、ⅡC類ではヘラ書きの「メ」・「㊀」（第9図20）などがある。

土器は、土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器がある。土師器は坏・壺がある。いずれも破片資料で図示できないが、底部破片は手持ちもしくは回転ケズリ再調整で切り離し不明のものがある。須恵器は坏（第8図12）・蓋（第8図13）・壺・甕がある。図示不能な底部破片ではヘラ切り手持ちケズリ、静止糸切り無調整のものがみられる。須恵系土器は坏があるが図示できるものはない。灰釉陶器は瓶の体部破片（第8図14）である。

羽口（第8図15～17）は小鍛冶に関連するとみられるSK2719土壌付近から出土している。鉄鏝（第8図18）は長頸鏝で、被篋から茎にかけての破片である。

【SK2751 遺構】

築地塀北辺の溝状の痕跡である。E45の横断面と、E48～E60の範囲で平面的に確認した。E48～E60ではa築地塀跡積み土の北辺に沿って幅15cm、深さ40cm前後の溝状の痕跡として確認され、積み上を押さえるための枠板もしくは杭列などの抜取穴とみられるが材の痕跡は確認していない。

【SK2717 土壌】

【位置・検出状況】 E48以東の築地塀北1.5mにあり、築地塀に並行して溝状に延び、E57以東の調査区外におよぶ。基盤の凝灰岩を掘り込み、嵩上げ整地層①の一部を切っている。

【形態・規模】 平面形は上幅3.5m、長さ9m以上の溝状で、深さは70cm前後である。底面および壁面には岩盤の節理の凹凸が残り起伏が大きい。

【堆積層】 下層は凝灰岩片を多く含む黄褐色土で人為的に埋め戻されているが、上層は灰白色火山灰ブロックを含む自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積層から瓦と土器の破片が出土している。瓦は、丸瓦、平瓦がある。丸瓦はⅡ・ⅡB類、平瓦はⅠA・B類、B・C類がある。丸瓦ⅡB類には刻印文字の「占」（写真25）がみられる。土器は、土師器坏、須恵器盤、甕の破片があるが小破片で図示できるものはない。土師器坏は製作にロクロを使用したものである。須恵器盤の底部は静止糸切り無調整である。

【SK2718 土壌】

【位置・検出状況】 E50の築地塀北側1mに位置する。嵩上げ整地層①上面で検出した。

【形態・規模】 平面形は径30cmの隅丸方形で、深さが15cm前後の浅い土壌である。底面から壁面にかけて火を受け、黒色もしくは赤褐色に変色している。

【堆積層】 炭化物、焼土粒を含む褐色土が堆積している。

【出土遺物】 丸瓦Ⅱ類の破片が出土している。

【SK2719 土壌】

【位置・検出状況】 E45の築地塀北側0.5mに位置する。嵩上げ整地層①上面で検出した。

【形態・規模】 平面形は径 30 cm の隅丸方形で、深さが 10 cm 前後である。底面から壁面にかけて火を受け、黒色もしくは赤褐色に変色している。東側半分は火の見櫓の柱穴で破壊されている。

【堆積層】 炭化物、焼土粒を含む褐色土が堆積している。

【出土遺物】 堆積層から瓦と土器の破片が出土している。瓦は丸瓦、平瓦があり、丸瓦はⅡ類、平瓦はⅡB・C類がある。土器は須恵器蓋の破片があるが図示できるものはない。

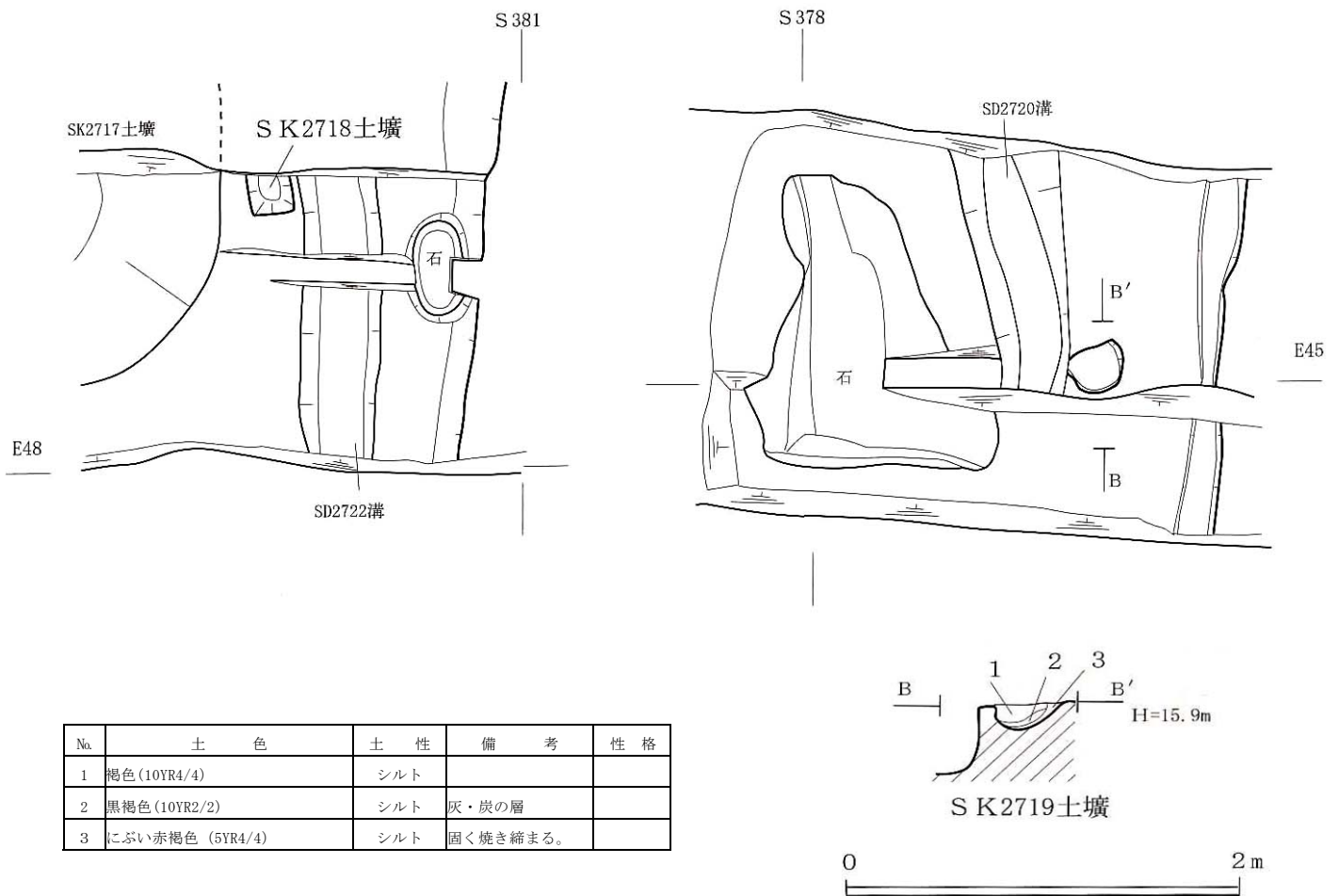
【SK2724 土壇】

【位置・検出状況】 E54 以東の築地塀南 2m にあり、築地塀に並行して溝状に延び、E60 以東の調査区外におよんでいる。基盤の凝灰岩を掘り込み、崩壊土Ⅲの一部も掘り込んでいる。

【形態・規模】 平面形は上幅 3.5m、長さ 5m 以上の溝状で、深さは 60 cm 前後である。底面および壁面には岩盤の節理の凹凸が残り起伏が大きい。

【堆積層】 凝灰岩片を多く含む褐色土が自然堆積している。

【出土遺物】 堆積層から瓦と土器の破片が出土している。瓦は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は重圏文軒丸瓦、丸瓦はⅡ・ⅡB類、平瓦はⅠA類、ⅡB・C類で、丸瓦ⅡB類には刻印文字の「田」A、平瓦ⅡB類には刻印文字の「物」・「丸」B (写真 21) がみられる。土器は、土師器坏、須恵器坏、瓶、甕、須恵系土器坏の破片があるが図示できるものはない。土師器坏は製作にロクロを使用したもので底部が回転糸切り無調整である。須恵器坏は底部がへら切り無調整である。



第 10 図 SK2718・2719 土壇

②南門跡周辺の遺構と出土遺物

今回の南門跡の調査は、門跡の南北両側の状況を把握する目的で調査区を設定した。以下では門跡の南側と北側の2地区に分けて発見された遺構の状況を記述する。

南門南側 (第11図)

南門南側の調査区は、史跡公園広場を避けてE6以東の築地塀寄りに設定した。調査の結果、南門から南に約9mのS387までの範囲で広場、溝、土壇などの遺構が検出された。しかし、S387以南は大規模な削平を受け、岩盤が2m以上の深さまで削り取られ遺構は残っていないことが確認された。

【SH2748 広場】

E16以西の築地塀南裾を岩盤まで削り出した平坦面を検出した。この平坦面は、南門南面に造成された広場の北東隅部分とみられる。SD2729・2730・2750溝はこの広場北東隅に設けられた排水施設とみられる。第7・48次調査では、この平坦面の上面が焼け、その上に焼土を含む層が堆積していることを確認している。

【溝】SD2729・2730溝は、いずれも表土直下の岩盤で確認した。SF202築地塀の南に位置し、築地塀に並行して東西に延び、E14付近で南にほぼ直角に折れる溝で相似形を呈する。約5m分を検出したが、S387以南は削平により失われている。いずれも断面形は「V」字状で、SD2729溝は上幅30cm前後、深さ10cm前後で、堆積層から瓦と土器の破片が出土している。瓦は、丸瓦、平瓦がある。丸瓦はⅡ・ⅡB類、平瓦はⅠA類、ⅡB・C類がある。土器は、土師器鉢(第12図29)で製作にロクロを使用しないものである。SD2730溝は上幅10cm前後、深さ5cm前後である。堆積層は第7次調査の際に掘りあげている。

SD2750溝は、E15の南北方向のベルト下にあるため掘り下げていない。築地塀の南基底部から南に延びる溝で、上幅約1m、深さ約1mである。

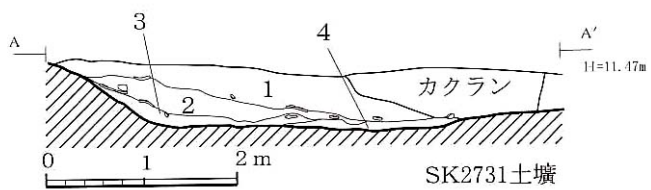
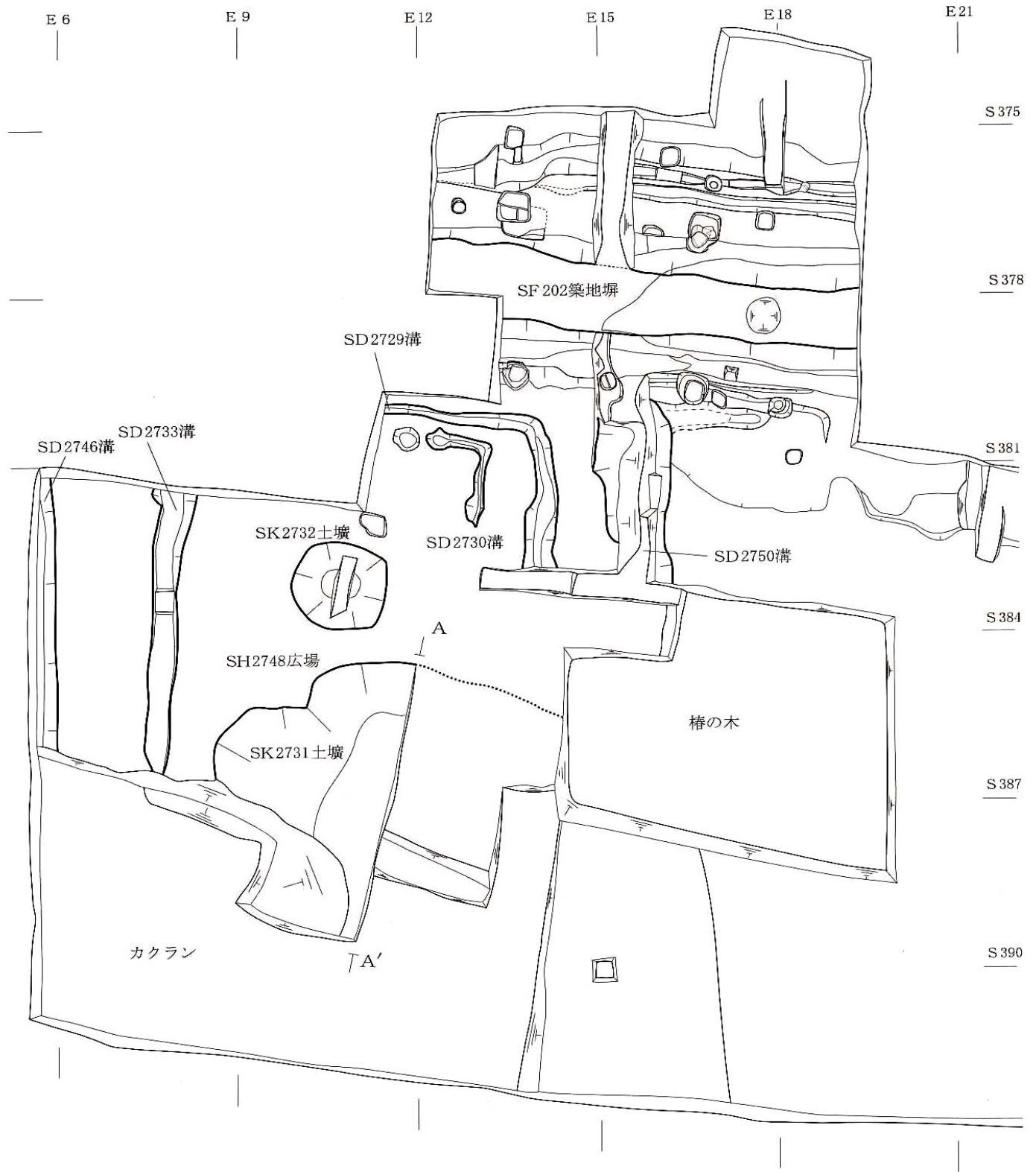
【SD2733 溝】

【位置・検出状況】表土直下の岩盤で確認した。南門東側柱列から2m東側のE8に位置する南北方向に直線的に延びる溝である。

【形態・規模】築地塀から南に約2m離れたS382付近を北端としてほぼ真南に直線的に延びる。約5m分を検出したが、S387以南は削平により失われている。基盤の凝灰岩を掘り込んでいる。断面は箱形で、平坦な底面から壁が垂直に立ち上がる。幅は30cm深さは約25cmである。

【堆積層】にぶい黄褐色土で、瓦・焼土・炭化物を含む自然堆積層である。

【出土遺物】堆積層から瓦の破片が出土している。瓦は、丸瓦、平瓦がある。丸瓦はⅡ類、平瓦はⅠA類、ⅡB類がある。



No.	土色	土性	備考	性格
1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	岩片・瓦片を多く含む。	人為堆積層
2	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	岩片・瓦片を多く含む。	人為堆積層
3	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	岩片・瓦片を若干含む。	人為堆積層
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭を多く含む。	人為堆積層

第 11 図 南門南側の遺構

【SD2746 溝】

【位置・検出状況】第7次調査で確認された溝で、SB201A門跡の東側柱列にはほぼ一致するE6に位置する南北方向に直線的に延びる。表土直下の岩盤で確認した。

【重複】SB201A門跡のSX205掘込地業を掘り込んでいる。第7次調査では、焼土層に覆われていたことが確認されている。

【形態・規模】築地塀南裾を北端としてほぼ真南に直線的に延びる。約8m分を検出したが、S387以南は削平により失われている。基盤の凝灰岩を掘り込んでいて、断面は箱形で、平坦な底面から壁が垂直に立ち上がる。幅は40cm、深さは約30cmである。

【堆積層】褐色土で、焼土・炭化物を含む自然堆積層である。北半の埋土は第7次調査の際に掘りあげられている。

【SK2731 土坑】

【位置・検出状況】E12の築地塀の南約6mに位置する。表土直下の岩盤で確認した。S387以南は削平により失われている。

【形態・規模】平面形は東西6m、南北4m以上の不整楕円形である。基盤の凝灰岩を掘り込んでいて、平坦な底面から、ゆるやかに壁が立ち上がる。深さは約1mである。

【堆積層】風化礫片・瓦片を多く含む褐色土で、人為的に埋め戻されている。

【出土遺物】堆積層から瓦、土器、壁土の破片が出土している。瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は311細弁蓮花文軒丸瓦（第12図25・26）、軒平瓦は721A均整唐草文軒平瓦、二重弧文軒平瓦がある。丸瓦はⅡ・ⅡB類があり、その中には刻印文字の「占」（第12図28）がある。平瓦はⅠA・B類、ⅡB・C類があり、その中には刻印文字の「物」（第12図27）がある。

土器は、土師器、須恵器、須恵系土器がある。土師器は坏・甕、須恵器は坏・壺・甕、須恵系土器は坏・高台坏がある。いずれも小破片で図示できない。須恵器坏底部破片ではヘラ切り無調整、回転糸切り無調整のものがみられる。壁土はスサ入りの粘土塊である。

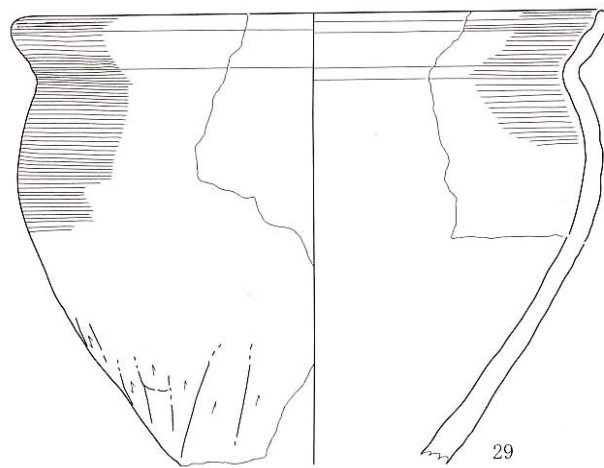
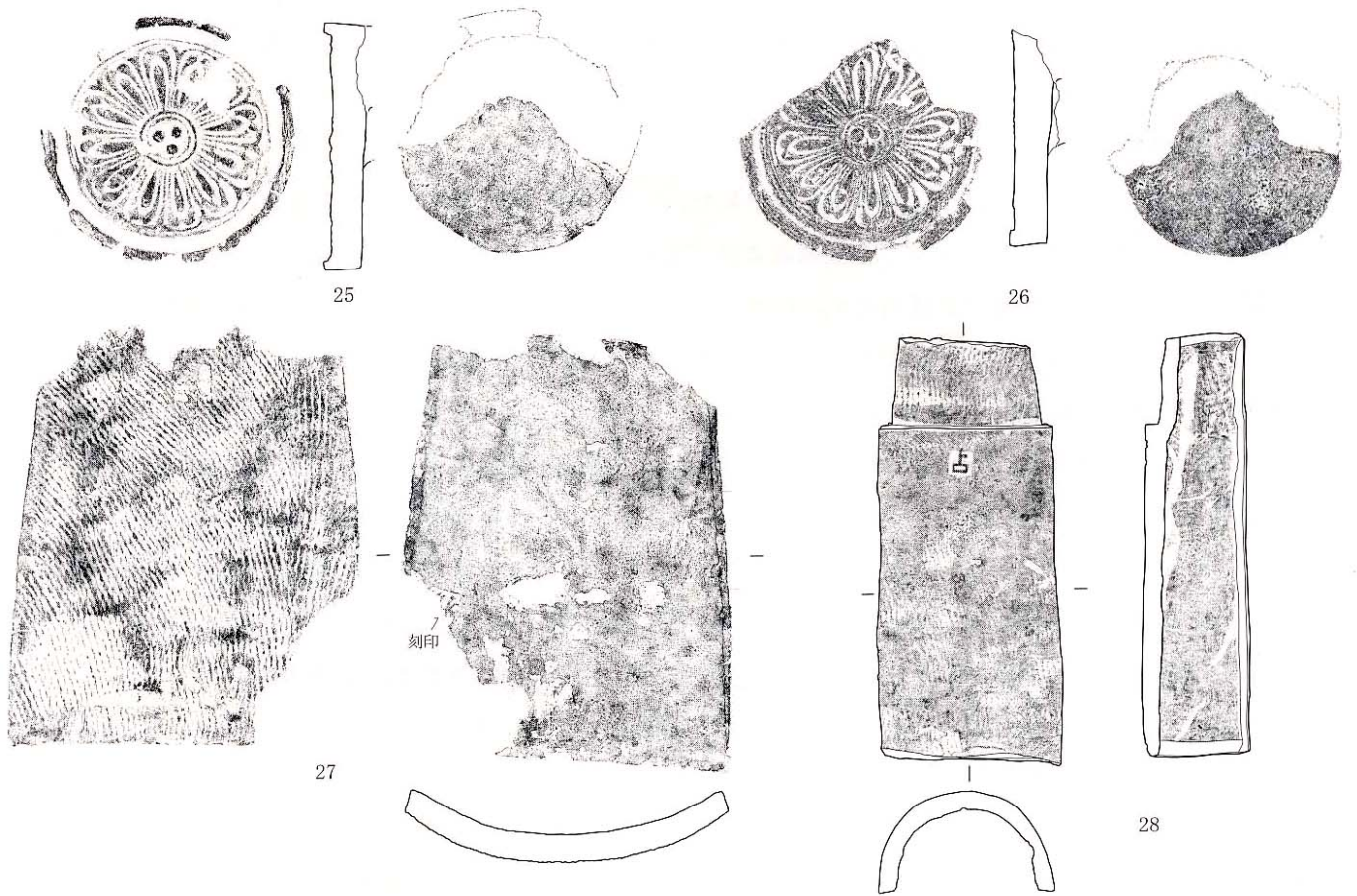
【SK2732 土坑】

【位置・検出状況】E10の築地塀の南約4mに位置する。表土直下の岩盤で確認した。

【形態・規模】平面形は径1.5mの円形である。基盤の凝灰岩を掘り込んでいて、平坦な底面から、ゆるやかに壁が立ち上がる。深さは約1mである。

【堆積層】風化礫片を多く含む褐色土で人為的に埋め戻されている。

【出土遺物】堆積層から須恵器甕の体部破片が出土している。



No.	出土遺構	層位	種別	型式・分類	法量(単位=cm)・特徴	登録	箱番号	写真
25	SK2731 土壇	2層	軒丸瓦	細弁蓮花文 311	瓦当部のみ	R 14	B 13567	2
26	"	1層	"	"	"	R 1	B 13566	1
27	"	2層	平瓦	II B類 aタイプ	長さ : (34) ・ 広端幅 : (27) ・ 狭端幅 : (23)、凹面に刻印「物」	R 17	B 13567	6
28	"	1層	丸瓦	II B類	全長 : 34 ・ 玉縁長 : 7 ・ 前縁幅 : 15 ・ 玉縁幅 : 12、凸面に刻印「占」	R 11	B 13566	10
29	SD2729 溝	"	土師器・鉢		口径 : (23.5)、器高 : (18.5)、ロクロ不使用、体部下半ヘラケズリ	R 1	B 13586	

第 12 図 南門南側の遺構出土遺物

南門北側 (第13図)

南門北側の調査区は、史跡遊歩道を避けてE 9 以東に設定した。調査の結果広易、溝、建物跡などの遺構が検出された。

【SH2749 広場】

E19 以西の岩盤を削り出した平坦面を検出した。この平坦面は、南門北面に造成された広場の南東隅部分で、SD2734・2745 溝はこの広場南東隅に設けられた排水施設とみられる。

【溝】 SD2734・2745 溝は広場南東隅に位置し、南北方向に延びる溝である。表土直下の岩盤で確認した。SD2734 溝がSD2745 溝より古く、いずれもSD2747 溝と重複しこれらより古い。SB2744 建物跡との新旧関係は不明。S360～S372 間の約12m 分を検出した。基盤の凝灰岩を掘り込んでいて、断面は浅く、上幅は0.7m 前後、深さは10cm 前後である。堆積層は、風化礫片を多く含む暗褐色土で、自然堆積である。SD2745 溝の上層には灰白色火山灰ブロックを含む層が堆積している。

SD2734 溝堆積層から瓦、土器、鉄製品が出土している。瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は重圏文軒丸瓦、軒平瓦は721A均整唐草文軒平瓦がある。丸瓦はII A・B類がある。平瓦IA類、II B・C類があり、II B類には刻印文字の「矢」A (写真26) がある。

土器は、土師器、須恵器がある。土師器は甕、須恵器は稜坑・甕があるが小破片で図示できない。

鉄製品は、大釘で頭部が次損している (第14図33)。

【SD2739 溝】

【位置・検出状況】 多賀城碑南側に位置し、南西から北東に延びる溝で、表土直下の岩盤で確認した。

【重複】 SD2747 溝と重複しこれよりも古い。

【形態・規模】 ゆるやかな弧を描くように南西から北東に延びる。約9m 分を検出した。基盤の凝灰岩を掘り込んでいる。断面は浅い台形で、上幅は2.5m 前後、深さは50cm 前後である。

【堆積層】 堆積層は灰白色火山灰ブロック・焼土・炭化物を含む褐色土で、自然堆積である。

【出土遺物】 堆積層から瓦、土器、鉄製品が出土している。瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は240 重圏文軒丸瓦、軒平瓦は640 単弧文軒平瓦がある。丸瓦はII・II B類がある。平瓦はIA・B類、II B・C類 (第14図32) があり、II B類中には刻印文字の「物」A・「丸」A、II C類の中には刻印記号の「・」や、凸面に方形突出のあるものがある。

土器は、土師器、須恵器、須恵系土器がある。土師器は坏・坑、須恵器は坏・瓶・甕、須恵系土器は坏・高台坏 (第14図30・31)・台付鉢がある。

鉄製品は刀子 (第14図34) と鑿 (同35) の破片である。

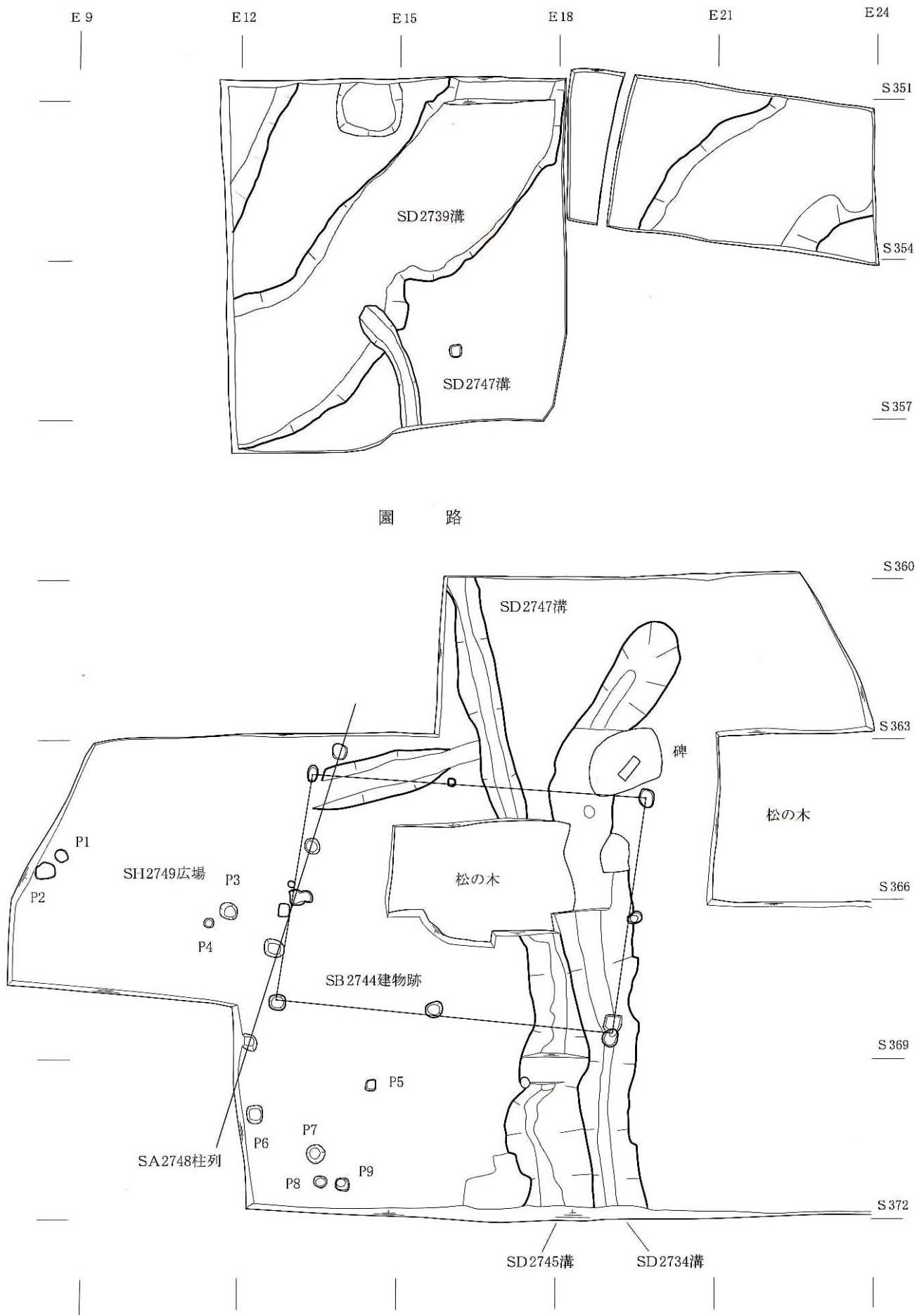
【SD2747 溝】

【位置・検出状況】 E18 に位置し、北北西に延びる溝である。表土直下の岩盤で確認した。

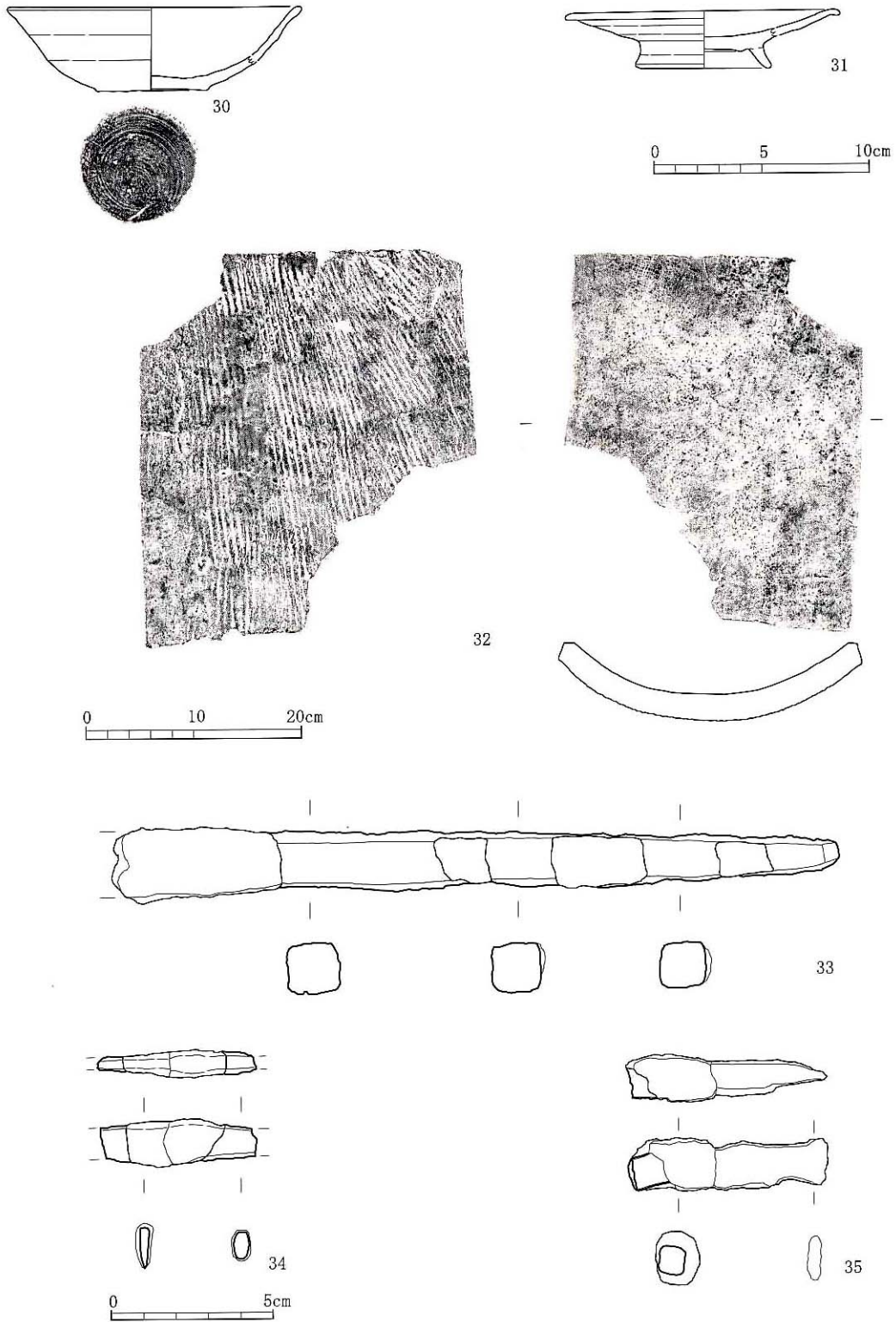
【重複】 SD2734・2739・2745 溝と重複し、もっとも新しい。SB2744 建物跡との新旧関係は不明。

【形態・規模】 北北西に直線的に延びる。約15m 分を検出した。基盤の凝灰岩を掘り込んでいる。断面は浅く、上幅は1m 前後、深さは30cm 前後である。

【堆積層】 堆積層は風化礫片・瓦片を含む褐色土で、自然堆積である。



第 13 図 南門北側の遺構



No.	出土遺構	種別	形式・分類	法量(単位=cm)・特徴	登録	箱番号	写真
30	SD2739 溝	須恵系土器・坏		底径 : 6.2 ・口径 : 13.8 ・器高 : 3.9、底部 : 回転糸切り無調整	R 1	B13586	
31	"	須恵系土器・高台坏		底径 : 6.3 ・口径 : 12.9 ・器高 : 2.7、底部 : 回転糸切り	R 2	B13586	
32	"	平瓦	ⅡB類 a タイプ	長さ : 35 ・広端幅 : (30) ・狭端幅 (27.5)	R 11	B13568	5
33	SD2734 溝	鉄釘		残存長 : 22.5 ・幅 : 1.5 頭部欠損	RM10	B13567	60
34	SD2739 溝	刀子		柄から刃部にかけての破片。区はサビにより不明瞭。	RM12	B13567	55
35	"	鑿		柄から刃部にかけての破片。	RM15	B13568	57

第 14 図 南門北側の溝出土遺物

【SB2744 建物跡】

〔位置・検出状況〕 南門の北東約 10m に位置する。表土直下の凝灰岩盤上で確認した。

〔重複〕 SD2734・2745・2747 溝と重複しSD2734 溝より新しい。SD2745・2747 溝との新旧関係は不明である。

〔柱間・棟方向〕 桁行 2 間、梁行 2 間の東西棟で、棟方向は、南側柱列で見ると東から南に 6 度。

〔掘り方〕 掘り方は径 30 cm 前後の不整形円形で、検出面からの深さは南西隅の柱穴で 13 cm である。東妻側以外の埋土は第 7 次調査で掘りあげている。東妻の柱穴埋土はしまりのない褐色土である。

〔柱痕跡〕 東妻柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径 10 cm 前後の円形である。

〔平面規模〕 桁行総長は南側柱列で約 6.3m、柱間は西から 3.0m・約 3.3m である。梁行総長は東妻で約 4.6m、柱間は北から 2.3m・2.3m である。

【SA2748 柱列】

〔位置・検出状況〕 南門の北東約 5 m に位置する。表土直下の凝灰岩盤上で確認した。

〔重複〕 SB2744 建物跡と重複しているが、切り合いがなく新旧関係は不明である。

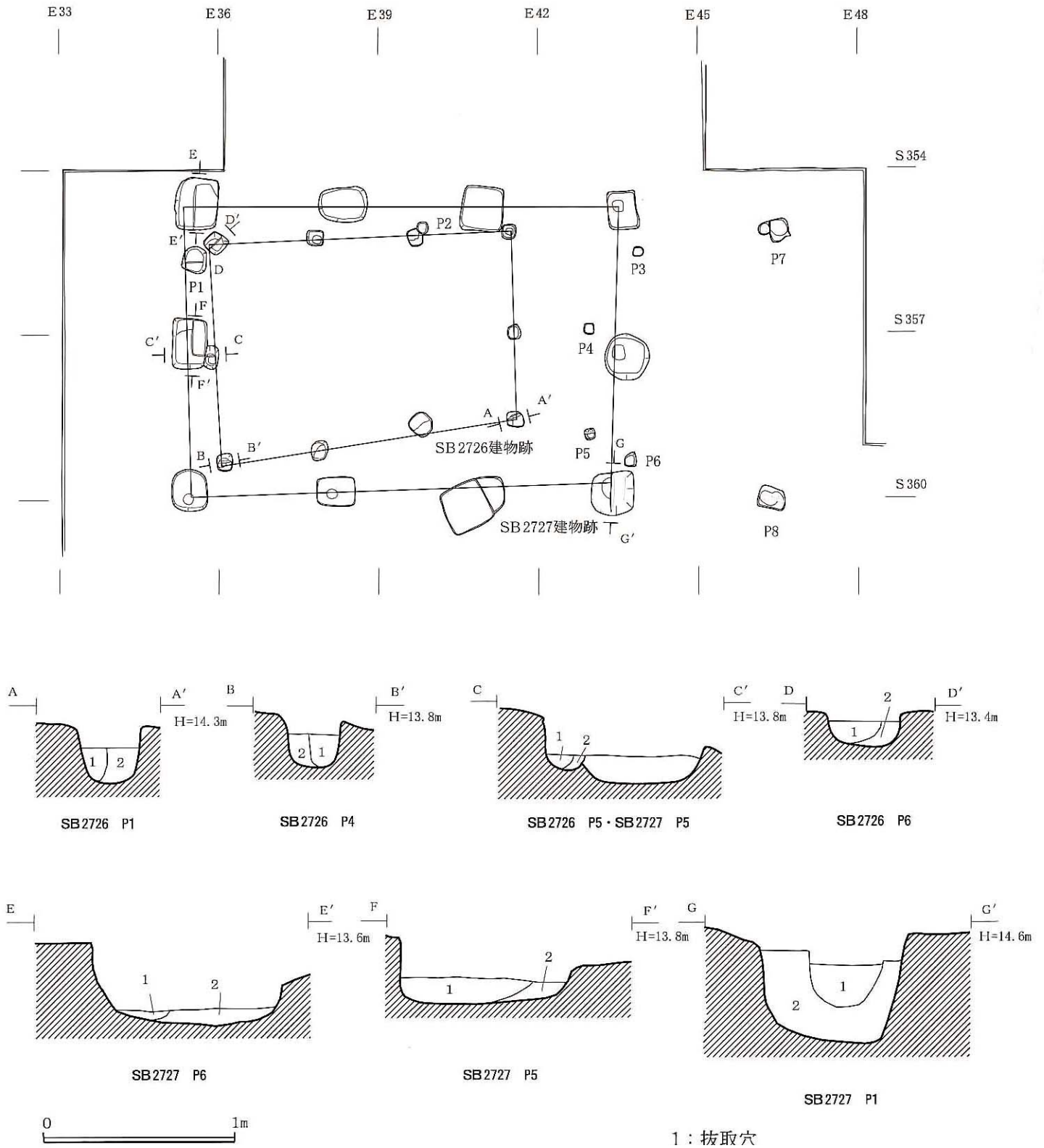
〔柱間・棟方向〕 柱間 2 間の南北方向の柱列で柱間は北から 1.8m・2.0m・1.8m である。方向は、北から東に 17 度偏る。

〔掘り方〕 掘り方は径 30 cm 前後の不整形円形で、検出面からの深さは 15 cm 前後である。埋土はいずれも第 7 次調査で掘りあげている。

〔その他の柱穴〕 南門の北東部で組み合わせ不明の柱穴を 9 個検出した（第 13 図 P 1～9）。確認面はいずれも凝灰岩盤上面である。時期や組み合わせは不明である。

③掘立柱建物跡と出土遺物

発見された2棟の建物跡は、外郭南門地区の最高所に立地する南辺築地塀跡の北側約20mに位置している。



第15図 掘立柱建物跡

【S B 2726 建物跡】

【位置・検出状況】 外郭南門の北東約 40m の丘陵斜面に位置する。表土直下の岩盤上で確認した。

【重複】 S B 2727 建物跡と重複し、これより新しい。

【柱間・棟方向】 桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟である。棟の方向は、北側柱列で見ると東から約 2 度北に偏る。

【柱穴掘り方】 掘り方は一辺 30～40 cm の隅丸方形で、検出面からの深さは 20～30 cm である。埋土は暗褐色土で凝灰岩片を多く含む。いずれも柱は抜き取られていて柱痕跡は確認されなかった。深さは 10 cm 前後である。

【平面規模】 桁行総長は北側柱列で 5.4m、柱間は 1.8m 等間である。梁行総長は西妻で約 4.0m、柱間は 2.0m 等間である。

【S B 2727 建物跡】

【位置・検出状況】 外郭南門の北東約 40m の丘陵斜面に位置する。表土直下の岩盤上で確認した。

【重複】 S B 2726 建物跡と重複し、これより古い。

【柱間・棟方向】 桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟である。棟の方向は、北側柱列で見るとほぼ真東西である。

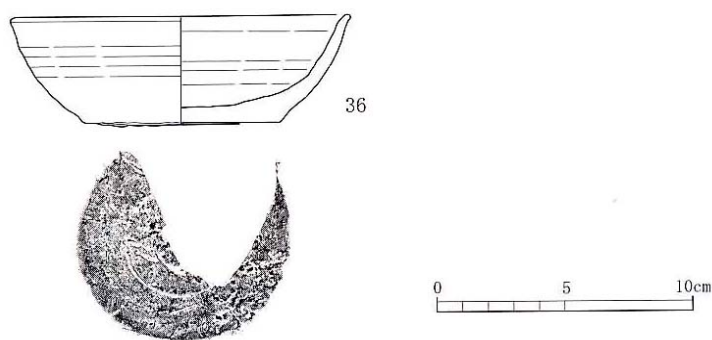
【柱穴掘り方】 掘り方は一辺 70～100 cm の方形もしくは長方形で、検出面からの深さは南東隅の柱穴で 60 cm である。埋土は黄褐色土で凝灰岩片を含む。

【柱痕跡】 いずれも柱は抜き取られているが、4 カ所の抜取穴底面で柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径 25 cm 前後の円形である。

【平面規模】 桁行総長は北側柱列で 7.9m、柱間は西から 2.7m・2.6m・2.6m である。梁行総長は東妻で約 5.0m、柱間は北から 2.6m・2.4m である。

【出土遺物】 須恵器坏（第 16 図 36）が出土している。

【その他の柱穴】 S B 2726・2727 建物跡の周辺で組み合わせ不明の柱穴を 8 個検出した（第 15 図 P 1～8）。確認面はいずれも凝灰岩盤上面である。時期や組み合わせは不明である。



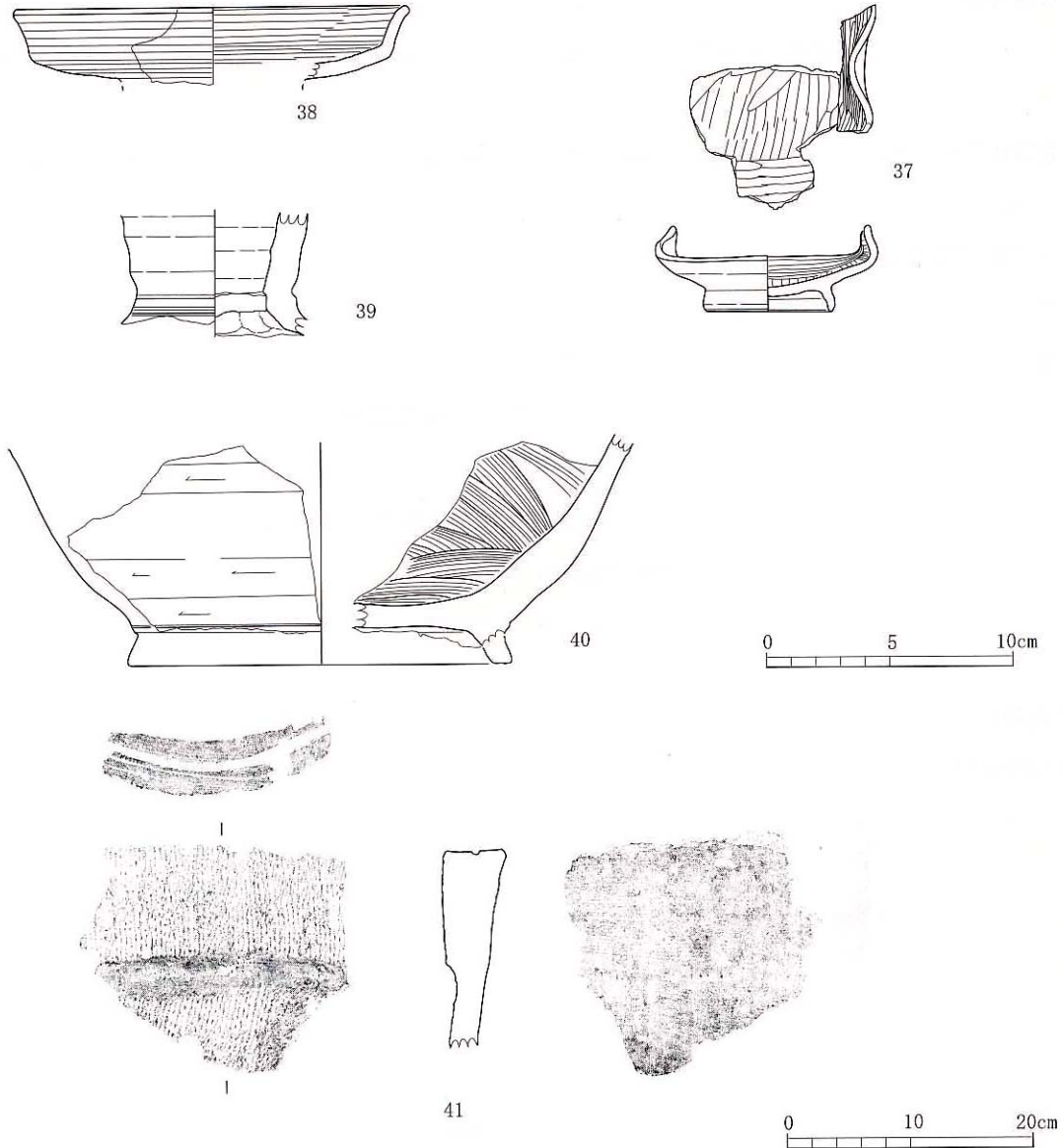
No.	出土遺構	層位	種別	法量（単位＝cm）・特徴	登録	箱番号	写真
36	SB2727 建物跡	柱抜取穴	須恵系・坏	口径：13.3・底径：7.7・器高：4.3、底部：ヘラ切り無調整	R1	B13586	

第 16 図 掘立柱建物跡出土遺物

④表土出土遺物

築地堀跡周辺の表土から土器・瓦・土錘・砥石・鉄製品などが出土している（第17・18図）。

土器には土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器がある。土師器は坏・高台坏・耳皿（37）がある。須恵器は坏・蓋・高台坏（38）・瓶（39・40）・甕がある。須恵系土器は坏・高台坏・甕がある。灰釉陶器は瓶の破片が1点ある。



No.	層位	種別	型式・分類	法量(単位=cm)・特徴	登録	箱番号	写真
37	表土	土師器・耳皿		口径：不明・底径：(5.0)・器高：不明、内面黒色処理、底部：静止糸切り無調整	R6	B13586	
38	"	須恵器・高台坏		口径：不明・底径：不明・器高：不明、内外面全面ヘラミガキ	R2	B13586	
39	"	須恵器・瓶		頸部のみ、頸部と肩部の境に突帯、大戸窯製品	R4	B13586	
40	"	"		底径：不明、体部下半のみ、外面回転ケズリ、大戸窯製品	R5	B13586	
41	"	軒平瓦	単弧文 640	長さ：不明・広端幅：不明	R17	B13577	

第17図 表土出土遺物（1）

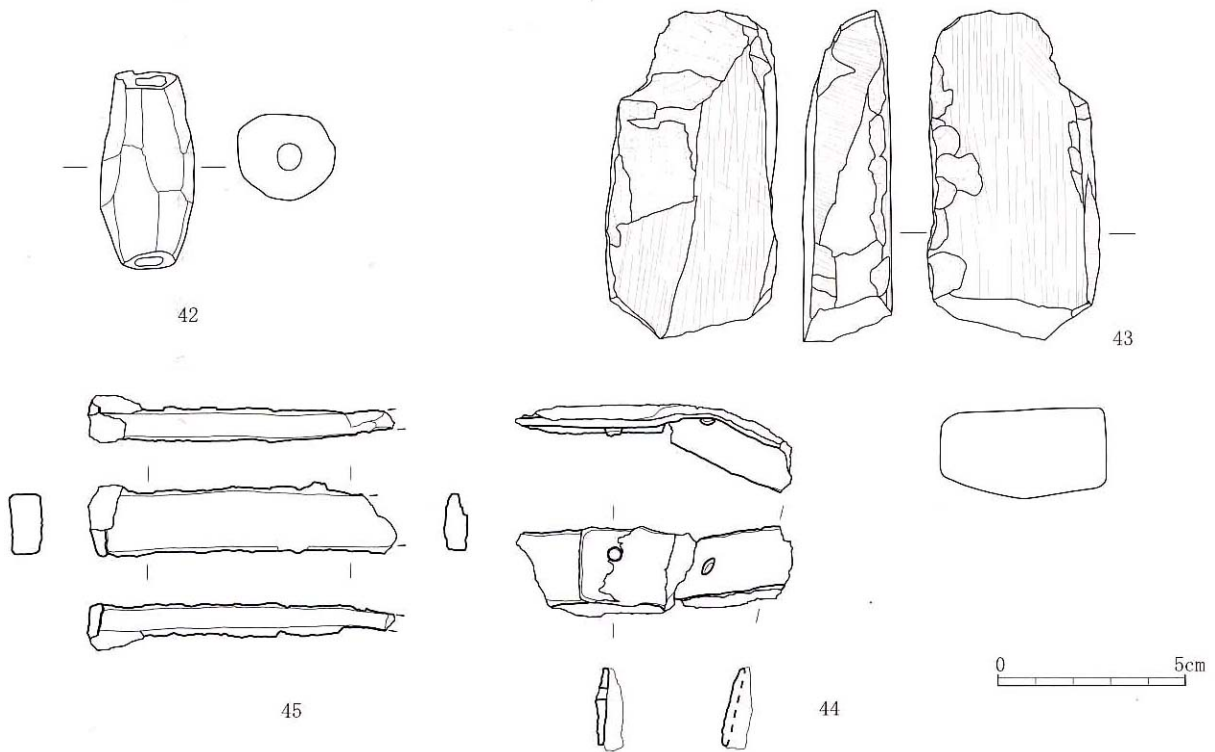
瓦には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦には 240～243 とみられる重圏文軒丸瓦が 6 点、310 細弁蓮花文軒丸瓦が 1 点、311 細弁蓮花文軒丸瓦が 2 点、320 とみられる重弁蓮花文軒丸瓦が 4 点ある。軒平瓦には 511 重弧文軒平瓦が 3 点、640 単弧文軒平瓦が 24 点（第 17 図 41）、641 無文軒平瓦が 3 点、650 二重波文軒平瓦が 2 点、660 均整唐草文軒平瓦が 1 点、721 均整唐草文軒平瓦が 5 点、831 連珠文軒平瓦が 1 点ある。この他に瓦当文様が判別できない軒瓦が多数ある。

丸瓦は確認できたものはすべてⅡ類で、刻印文字は「伊」が 2 点、「田」が 3 点、刻印記号は「⊖」が 4 点(写真 39)、「⊕」(写真 32)・「⊗」(写真 36)・「⓪」(写真 31)・「⊞」が各 1 点、へら書きは「王」(写真 19)が 1 点、「二」が 4 点、「三」(写真 20)が 3 点、「L」が 3 点、「+」が 3 点、ある。

平瓦にはⅠA・B類、ⅡA類、ⅡB類aタイプ、ⅡB類bタイプ、ⅡC類がある。この中のⅡB類aタイプには刻印文字がみられ「丸」Aが 6 点(写真22～24)、「丸」Bが 3 点、「伊」が 1 点、「矢」Aが 5 点ある。同じくⅡC類には刻印記号がみられ「⊖」が 4 点、「⓪」が 2 点、「⊕」・「回」・「⓪」(写真 35)が各 1 点、「⓪」(写真 30)が 2 点、「⊞」が 3 点(写真 40)あり、その他に不明のへら書きのあるものが多数ある。

土錘(第18・図42)は土師質のものである。砥石(第18図43)は凝灰岩製で一端が欠損している。

鉄製品は 2 つの貫通孔のある小札状の鉄製品(第 18 図 44)と鑿(第 18 図 45)がある。



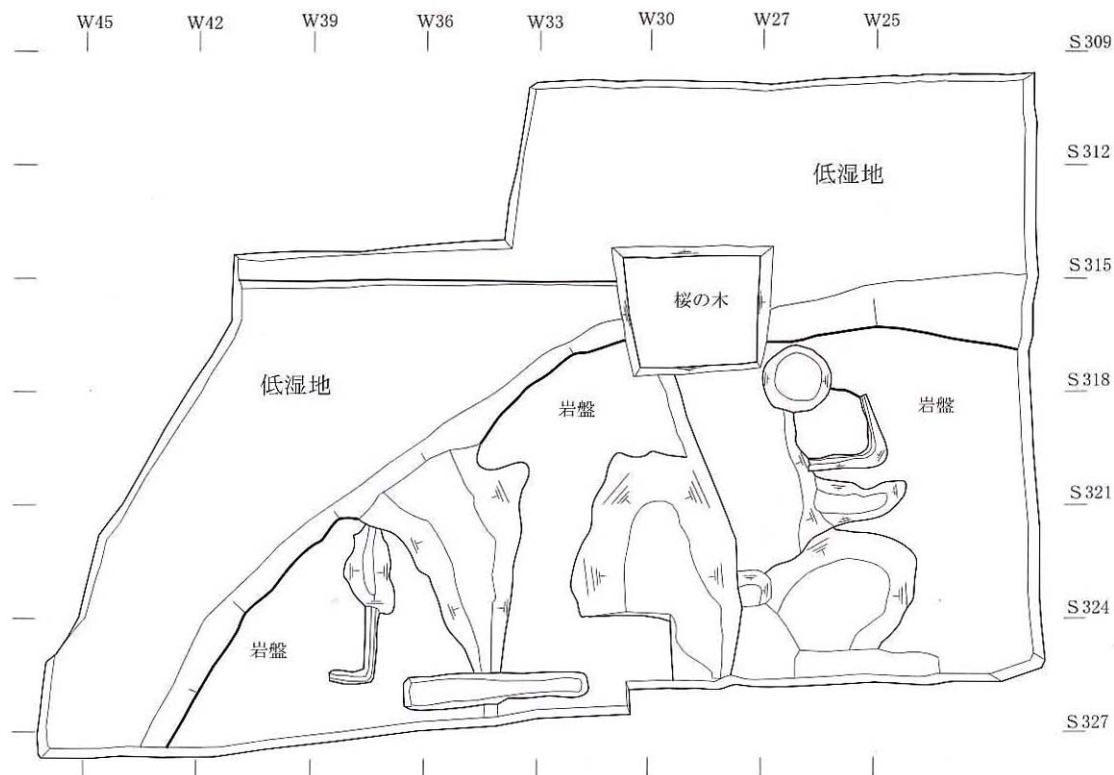
No	層位	種別	型式・分類	法量(単位=cm)・特徴	登録	箱番号	写真
42	表土	土錘		長さ: 5.2・幅: 2.5・土師質	R7	B13586	
43	"	砥石		残存長: 8.8・幅: 4.5・厚さ: 2.4、桃色凝灰岩製	R9	B13586	
44	カマ	小札状鉄製品		残存長: 7.5・幅: 2.3 両端欠損	RM13	B13567	58
45	表土	鑿		長さ: 8.1・幅: 1.5・厚さ: 0.7	RM14	B13567	59

第 18 図 表土出土遺物(2)

(2) 鴻の池南東調査区

鴻の池南東調査区は鴻の池の南東辺を確認するため調査した。その結果、調査区南東部で基盤の岩盤を確認し、低湿地部の南東辺が北西に張り出していることがわかった。また、鴻の池周辺に遺構は残存していないことも確認した。

確認した低湿地部の南東辺は、西側では次第に南にまわりこみ、第 72 次調査で横穴墓を確認した南門地区の丘陵西側斜面につながる。一方、東側は低湿地がさらに西側に入り込むこともわかった。



第 19 図 鴻の池南東調査区

(3) その他の遺構と出土遺物

古代以外の時期の遺構遺物として、縄文時代以前の土器、石器と、近世のS K 2715 墓壇の出土遺物、近世の多賀城碑覆屋の屋根瓦などがある。

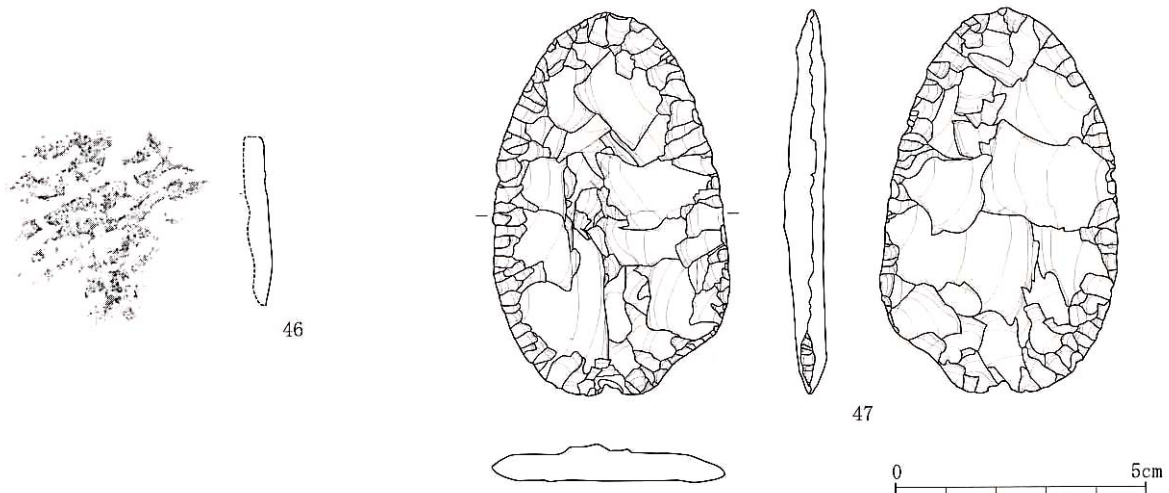
縄文土器と石器はいずれも個別に出土しており、詳しい時期の特定はできない。

縄文土器（第 20 図 46）は築地塀崩壊土から出土した。深鉢形土器の体部破片で、外面に粗い縄文がみられるが摩滅が著しく縄の種類や施文方法は確認できない。内面は剥落している。

石器（第 20 図 47）は表土出土である。剥片を素材とし両面に直接もしくは押圧剥離による深い整形剥離が加えられ、周縁に押圧剥離による細かい調整剥離が施されている。背面の整形・調整剥離が著しく、腹面の基部にも剥離が加えられ、あさいえぐりが入れている。晩期旧石器時代から縄文時代早期の遺物である可能性がある。

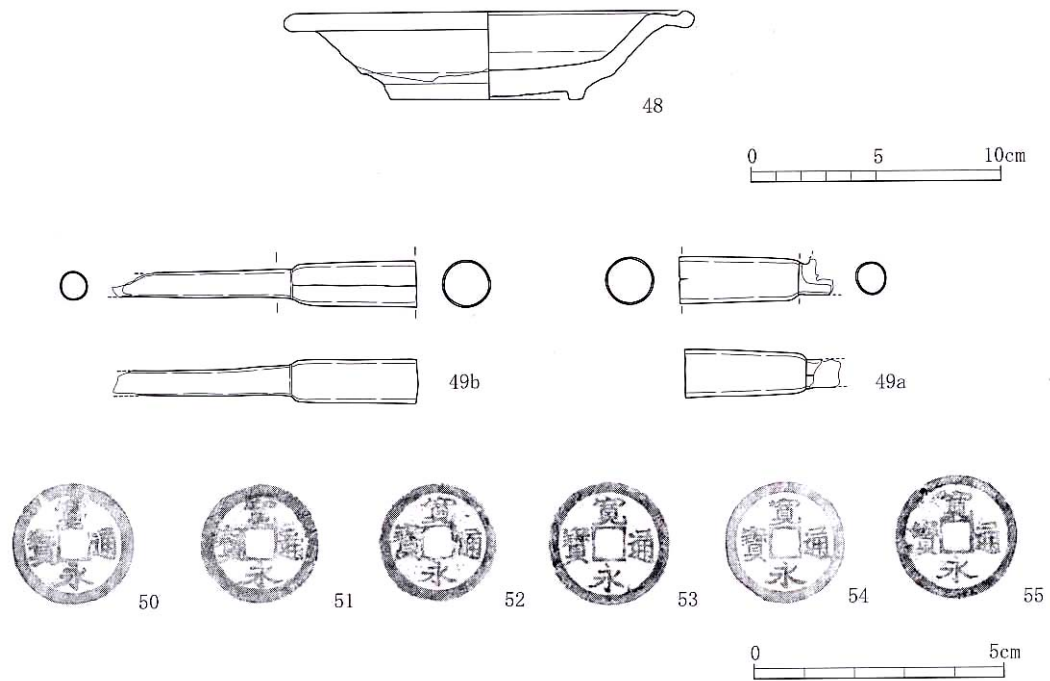
次に近世の遺構として、外郭南門地区の最高所にあたるS F 202 築地塀のほぼ中央に掘り込まれた墓壇であるS K 2715 墓壇（第 6 - 1 図）がある。墓壇の平面形は一辺約 2 m の隅丸方形、深さ 1 m で、南東部は近代の火の見櫓の掘り方により破壊されていた。墓壇底面付近から人骨片とともに副葬品とみられる施釉陶器折縁皿（第 21 図 48）、キセル（第 21 図 49）、六道銭（第 21 図 50～55）（古寛永：初鑄=1633 年）が出土した。棺材や墓石は発見されなかった。副葬品の内容から、墓の造営年代は 17 世紀中頃と推定される。

近世の瓦類は、多賀城碑覆屋周辺の表土から出土したものでいずれも多賀城碑覆屋に用いられていた屋根瓦とみられる。破片資料で図示できるものはないが、いずれもいぶし瓦で、本瓦と棧瓦の 2 種類があり、本瓦には巴文軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の他、鳥衾、鬼瓦の破片などの種別がある。巴文軒丸瓦は、大きな三巴文（写真 41～45）と巴文の周辺に連珠の巡るもの（写真 46～51）で、後者はさらに巴の小さなもの（写真 46～49）と大きなもの（写真 50・51）がある。鳥衾の瓦当文様は梅花（写真 52）である。鬼瓦は右耳部分（写真 53）とあご髭の部分の破片（写真 54）である。



No.	遺構・層位	種別	形態・名称	法量（単位=cm）・特徴	登録	箱番号	写真
46	崩壊土 I	縄文土器	深鉢	縄文結節文か？（大木 2a 式？）	R1	B13586	72
47	表土	石器	両面加工	長さ：8.8・幅 4.5・厚さ：2.4、珪質頁岩製	R1	B13586	71

第 20 図 その他の遺物（1）



No.	遺構・層位	種別	形態・名称	法量(単位=cm)・特徴	登録	箱番号	写真
48	SK2715 土壌	施釉陶器	折縁皿	底径：5.8・口径：12.4・器高：2.6、美濃登窯Ⅰ器	R1	B13586	
49 a	"	煙管	雁首	長さ：不明・径：0.9、銅製	RM3	B13567	
49 b	"	煙管	吸い口	長さ：不明・径：0.9、銅製	RM1・2	B13567	
50～55	"	銅銭	寛永通宝	初鑄年＝西暦 1633 年、通称「古寛永」	RM4～9	B13567	

第 21 図 その他の遺物 (2)

4. 考察

第 73 次調査で検出した主な遺構として、南辺築地塀跡に関係する遺構、南門跡周辺の遺構、掘立柱建物跡などがある。以下では本地区の遺構の変遷・年代・性格について考察する。

(1) 南辺築地塀跡について

S F 202 築地塀跡については、第 7・48 次調査で今次調査と重複する E 12～E 19 区間の調査を実施している。ここでは、第 7・48 次調査成果と今次調査成果を比較検討し、築地塀の変遷を整理する。

①これまでの調査成果

第 7・48 次調査での成果から南辺築地塀の変遷を概括すると以下のようになる。

S F 202A 築地塀：積み土は削平により失われている。寄柱穴から推定して基底幅約 2.7m。

寄柱は掘立式。桁行柱間は約 3 m、梁行柱間は約 2.7m。

S F 202B1 築地塀：積み土は A 築地塀を削平して版築。基底幅約 2.6m。

寄柱は礎石式。桁行柱間は約 3 m。

S X 1539 基礎地業

S F 202B2 築地塀：積み土は B1 築地塀を削平して版築。基底幅約 2.4m。

寄柱は礎石式。桁行柱間は約 3 m。

S F 202C 築地塀：積み土は残存せず。瓦列から推定して基底幅約 2.1m。

②今回の調査成果

今回の調査では、S F 202 築地塀跡について E 12～E 19 と E 42～E 60 の 2 つの地区で調査を行った。両地区では、それぞれ S F 202 築地塀に 3 時期の変遷が確認されたが、積み土の特徴や補修部位、嵩上げ整地の状態などが両地区でほぼ対応することから、共通の変遷としてとらえることができる。それぞれの変遷と対応関係をまとめると以下のようになる。

〔E 12～E 19 での変遷〕

- 1 S X 2742 基礎地業
↓
- 2 a 築地塀築成
南門南側に S H 2748 広場を造成
↓
広場が焼土を含む崩壊土で覆われる
↓
- 3 嵩上げ整地①→ b 築地塀
↓
- 4 嵩上げ整地②
↓
火山灰降下
↓
- 5 c の築地塀築成

〔E 42～E 60 での変遷〕

- 1 S X 2742 基礎地業 i 層
↓
- 2 基礎地業 ii 層→ a 築地塀築成
↓
- 3 嵩上げ整地①→ b 築地塀
↓
- 4 嵩上げ整地②
↓
火山灰降下
↓
- 5 嵩上げ整地③→ c 築地塀築成

③これまでの調査成果との対比

第7・48次調査の成果と今回の調査成果を比較し、修正点について整理しておく。

- ・第48次調査でS X1539基礎地業とした層は、今回の調査によりE11の東西で異なる層であることを確認した。E11以東はS X2742基礎整地、E11以西はa築地塀積み土の一部、と改めた。
- ・第48次調査でS F202Aとした寄柱穴のうち、第7次調査のE11以東で検出した寄柱穴の検出面は、地山面ではなくS X2742基礎整地上面である。(E11西側の検出面は地山面。)
- ・第48次調査でS F202B1・B2築地塀寄柱礎石としたものは、嵩上げ整地のレベルからみて、地上に露出していた礎石ではなく、柱穴掘り方内に埋置された礎盤であった可能性が高い。
- ・第48次調査の築地塀断面とその南側の堆積層(「年報1985」51頁36図右下を参照)については、以下の如く修正する(同位置の断面図の再検討結果は第4図下の断面図を参照)。

○第48次調査でS F202B2と一括した積み土層中に灰白色火山灰を含む崩壊土Iが介在している。

○崩壊土I上にさらにS F202c築地塀積み土がある。

○築地塀南側の灰白色火山灰を含む崩壊土I以下の堆積層は、①・②二時期の嵩上げ整地層である。

④S F202築地塀跡の変遷と年代的位置付け

今回の調査では、S F202築地塀跡に関わる火災の痕跡や出土遺物などの年代的位置付けをおこなう具体的な資料は得られなかった。しかし、これまでの南辺築地塀の調査成果と比較すると、第48次調査でa築地塀崩壊土に多量の焼土が含まれることを確認していることから、a築地塀は伊治公告麻呂事件以前で政庁遺構期の第Ⅱ期以前と考えられる。c築地塀は、灰白色火山灰粒を含む崩壊土I上に築成されていることから、政庁遺構期の第Ⅳ期以降で、灰白色火山灰降下以後のものである。a築地塀は第Ⅱ期以前、b築地塀は第Ⅲ期以後で、第Ⅲ期もしくは灰白色火山灰降下以前の第Ⅳ期に位置付けられることになる。

(2)南門跡周辺の遺構について

南門南北両側で古代の溝や土壌のほか、岩盤を削り出した広場を検出した。その特徴を概括し変遷を検討する。

①南門南側の遺構

南門の南側で発見された遺構には南門南側広場、溝、土壙などがある。

まず、E15から西側の南門南側では、岩盤を削り出した平坦面が造成されていることを確認した。この平坦面については第48次調査でも部分的に検出していたが、その広がり是不明であった。今回の調査で、平坦面の東北隅の排水施設とみられるS D2729・2730・2750溝を検出したため、この平坦面が南門前面に造成されたS H2748広場の一部であると認定した。

第48次調査ではこの広場平坦面上のA3層上面が焼けていたことと、その上部に多量の焼土を含むA2層が堆積していたことから、これを門の火災痕跡と推定し、その原因を伊治公告麻呂事件(西暦780年)に求めている。これに従えば、南門南側平坦面の造成時期も、政庁遺構期の第Ⅱ期以前と考え

ることができる。築地堀跡との関係では、広場造成のための削り出しが築地堀基礎整地を切っていることから広場造成の時期は、当初の築地堀築成後と考えられる。また、S D2729・2730・2750 溝の新旧関係は不明であるが、広場の北東隅は時期によりわずかに変動したものと考えられる。

この他、南門南側の政庁中軸線東側で検出した南北方向のS D2733・2746 溝については、規模や方向、南門との位置関係からみて、いずれも南門から南に延びる道路跡の東側溝である可能性もある。中軸線からの距離は、S D2733 溝が8m、S D2746 溝は6m で、中軸線で折り返した場合の推定路幅はS D2733 溝が約16m、S D2746 溝が約12m となる。

このうち、S D2746 溝については、第7次調査で、第48次調査のA2層に相当する焼土層に覆われていたことが確認されていることから、政庁遺構期の第Ⅱ期以前のものと考えられる。多賀城跡南面の市川橋遺跡で検出されている南北大路は、平安時代に路幅が約23m であったことが明らかにされているが、今回検出された2条の溝から推定される道路幅はいずれもそれより狭い。市川橋遺跡の南北大路の成立年代についてはなお検討が必要である。今回確認された溝と市川橋遺跡の南北大路との関係についても、その間が未調査であることもあって直接比較することはできないが、南門から南に延びる道路跡の成立と変遷を考える上で、S D2746 溝が検出された意味は大きい。

②南門北側の遺構

南門の北側で発見された遺構には南門北側広場、溝、土壇、掘立柱建物跡、柱列などがある。

まず、E18から西側の南門北側では、南側と同様に岩盤を削り出した平坦面が造成されていることを確認した。この平坦面は、E18にみられる南北方向のS D2734・2745 溝を東辺とし、その西側に広がるものでS D2734・2745 溝は平坦面東端の排水施設と考えられることから、この平坦面は南門北側に造成されたS H2749 広場の一部であると認定した。

S H2749 広場の平坦面は直接表土に覆われており築地堀崩壊土などとの層位関係も不明であるが、S D2745 溝の堆積層に灰白色火山灰が含まれることから古代の遺構とみられ、南門北側平坦面の造成時期も古代に遡ると考えられる。

この他の遺構として、南門の北側20mに検出されたS D2739 溝がある。これは上部の堆積層から出土した土器・瓦から政庁遺構期第Ⅳ期以降の遺構とみられ、政庁—南門間道路を斜めに横切ることから、政庁—南門間道路の廃絶後の遺構と考えられる。さらに、S D2745・2747 溝S A2748 柱列、S B2744 建物跡などは、堆積層や規模、方向などから中世以降の新しい時期の遺構であると考えられる。

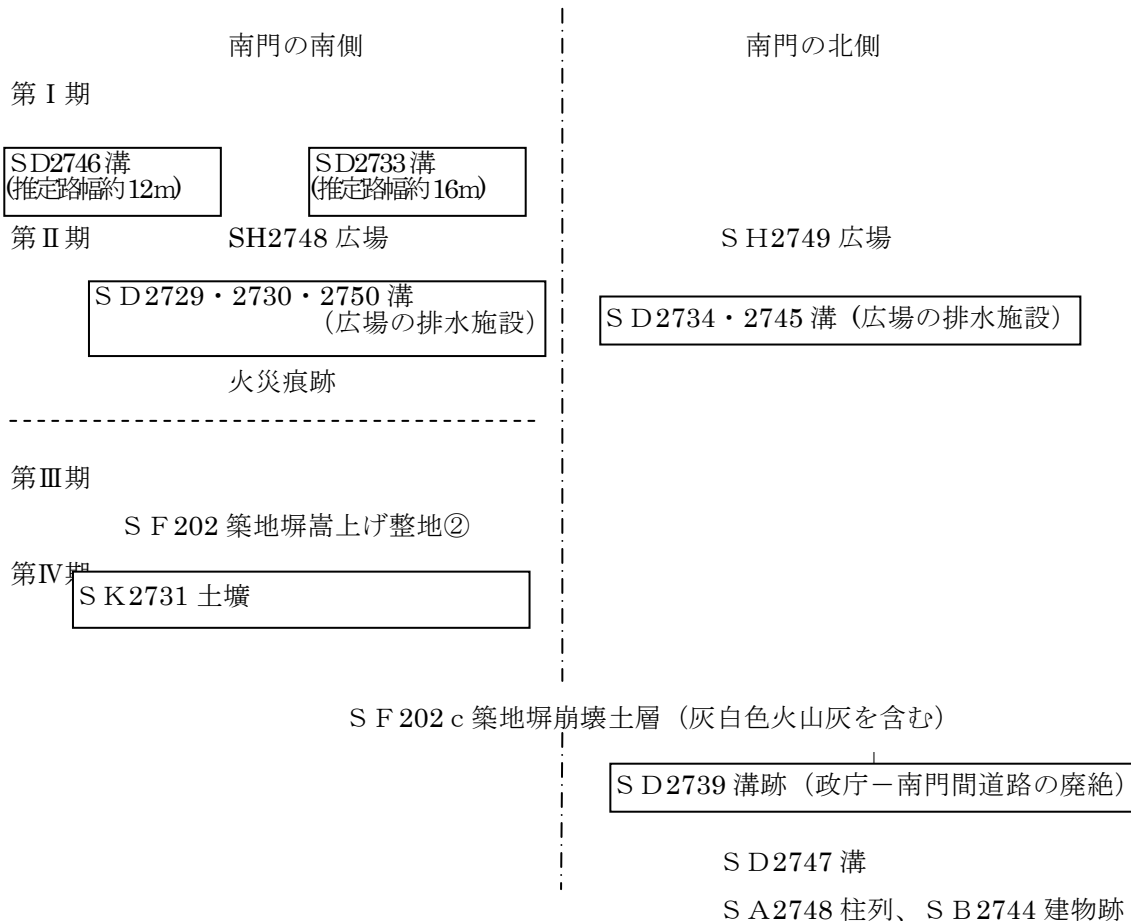
なお、今回の南門北東の調査区では、昨年南門西側の第72次調査成果を受け、外郭南門に至る政庁—南門間道路の東側溝の検出を主な目的とした。しかし、設定した南門北側の調査区では道路跡の存在を示す遺構は一切発見されなかった。具体的には第72次調査で、23m幅の道路跡東側溝と考えたS D2672 溝の延長や、道路西側溝としたS D2657・2663 溝に対応する想定10・13m幅の道路跡の東側溝などは検出されなかった。

今回の調査対象地については、地形的に遺構が削平され失われたとは考え難い。今回発見されたS H2749 広場東端の標高は12.5m前後で、現地形で、この標高に基づいて南門北側の政庁中軸線東西に対称形の広場を造成すると仮定すると、盛土整地の北西部での厚さは2mを越えると想定される。

こうした想定に基づくなら、広場や路面が斜面であったり、東西非対称であったことを想定しない限り第 72 次調査で検出された S D 2657・2658・2663 溝が道路側溝であった可能性はきわめて低いと考えざるを得ず、南門北側の広場と政庁—南門間道路跡との関係については今回調査できなかった園路部分の調査を含めて再検討する必要がある。

③遺構の変遷

以上の南門南北両側の遺構の新旧関係は次のように整理される。



(3) 掘立柱建物跡について

外郭南門地区における第 7・48・72 次の 3 次にわたる調査で、古代の建物跡が発見されたのは S B 201 南門跡以外では今回の S B 2726・2727 建物跡が初めてである。建物跡が発見された位置は、外郭南門地区のほぼ最高所にあたる丘陵頂部からわずかに北に下った場所で、丘陵上の平坦面は狭く、他に建物跡が立地可能なスペースは見いだせない。したがって発見された建物跡は、建物群を構成するものではなく、単独でこの場所に設置されたものと考えられる。

建物跡は 2 棟がほぼ同位置で重複し、他の遺構との重複関係はない。古い方の S B 2727 建物跡柱抜取穴から 8 世紀後葉から 9 世紀前葉の年代と考えられる須恵器坏が出土していることから、建物跡はこの頃には廃絶している。

(4)まとめ

- ①南門東側のS F 202 築地塀跡については、五時期の変遷を確認し、灰白色火山灰が降下した 10 世紀初頭以後にも築地塀を築成していることを確認した。
- ②南門の南北両側に岩盤を削り出して造成した広場と、それに伴う排水施設の溝を検出した。
- ③南門地区の最高所付近で掘立柱建物跡を検出した。
- ④通称「鴻の池」の低湿地部の南東辺を検出した。

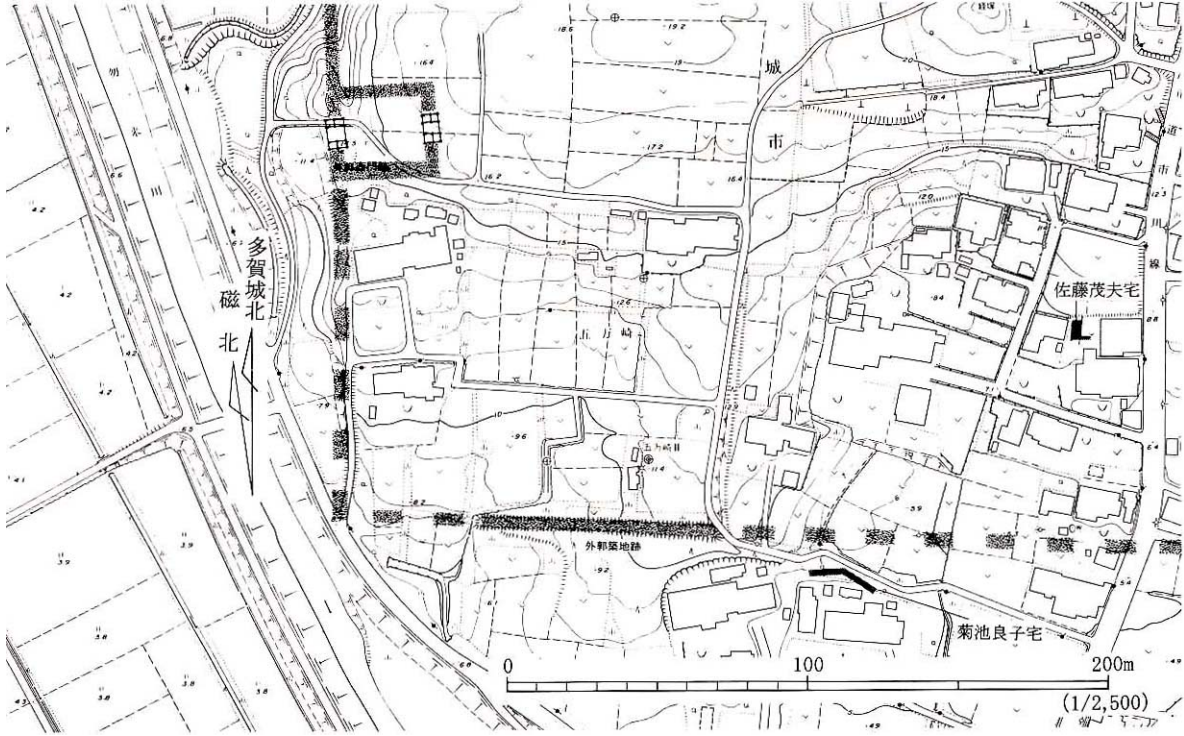
引用文献

- | | | | |
|--------------|------|--|-----------------------|
| 白鳥良一 | 1980 | 「多賀城跡出土土器の変遷」 | 『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』VII |
| 宮城県多賀城跡調査研究所 | 1970 | 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1970』 | (第7次調査) |
| 宮城県多賀城跡調査研究所 | 1980 | 『多賀城跡 政庁跡 区録編』 | |
| 宮城県多賀城跡調査研究所 | 1982 | 『多賀城跡 政庁跡 本文編』 | |
| 宮城県多賀城跡調査研究所 | 1985 | 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1985』 | (第48次調査) |
| 宮城県多賀城跡調査研究所 | 1997 | 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997 一第68次調査・多賀城碑覆屋解体修理一』 | |
| 多賀城市教育委員会 | 1999 | 『市川橋豊跡一第23・24次調査報告書一』 | 多賀城市文化財調査報告書第55集 |
| 宮城県宮城県教育委員会 | 2000 | 『市川橋豊跡の調査』 | 宮城県文化財調査報告書第184集 |
| 宮城県多賀城跡調査研究所 | 2002 | 『宮城県多賀城跡調査研究所年報2001』 | (第72次調査) |

Ⅲ. 現状変更に伴う調査

特別史跡多賀城跡附寺跡内において、平成 11 年度から平成 14 年度までに行った現状変更に伴う発掘調査 8 件について、地区ごとに報告する。

1. 多賀城跡五万崎地区



第 22 図 多賀城跡五万崎地区での調査区の位置

(1) 佐藤茂夫宅の発掘調査 (第 22 図)

位置：市川字五万崎 26-1・2

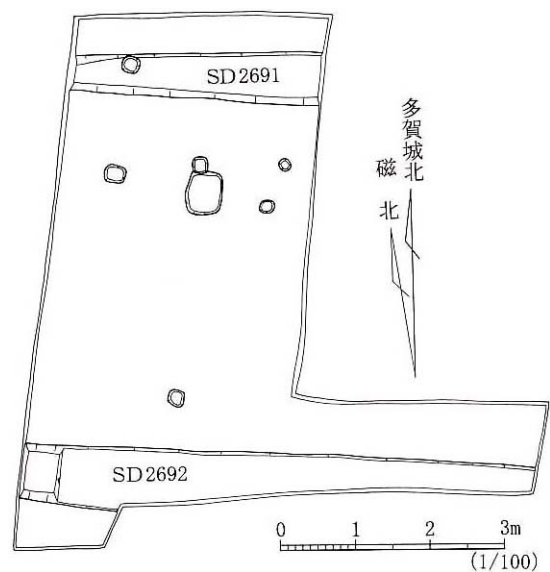
調査期間：平成 12 年 6 月 26・27 日

原因：住宅増築

発掘面積：約 26 m²

1) 調査区

外郭西門跡の東約 240m、外郭南辺築地堀跡推定地の北約 60m に位置する。調査区の周辺は、



第 23 図 佐藤茂夫宅の発掘調査平面図

標高約 8 m で、南が低く、緩やかに傾斜する。調査区は幅約 2 ～ 4 m、南北約 7 m、東西約 7 m の不整形で、面積約 26 m²である。

2) 調査区の層序

表土である第 I 層（黒褐色土）と地山である第 II 層（明黄褐色土）の 2 層に分かれる。

3) 発見した遺構と遺物（第 23 図）

発見した遺構に溝 2 条（S D 2691、S D 2692）と土壇 1 基とピット 6 個がある。遺構の確認はすべて第 II 層（地山）上面である。いずれの遺構も堆積層の状態から古代より新しいとみられる。

【S D 2691 溝】 調査区北で確認した。溝は幅約 60 ～ 70 cm、深さ約 7 cm、断面台形、ほぼ東西方向（E - 3° - S）である。堆積層は自然堆積の黒褐色土である。遺物は出土していない。

【S D 2692 溝】 調査区南で確認した。溝は幅約 80 cm、深さ約 10 cm、断面台形、ほぼ東西方向（E - 6° - S）である。堆積層は自然堆積の黒褐色土である。遺物は出土していない。

【土壇とピット】 土壇 1 基とピット 6 個を確認した。いずれも一辺約 20 ～ 50 cm の方形である。堆積層は黒褐色土や灰黄褐色土などである。遺物は出土していない。

【遺構外出土の遺物】 第 I 層から須恵器蓋の破片と平瓦の破片が出土した。平瓦には II B 類 a タイプのものがある。

（2）菊池良子宅の発掘調査（第 24 図）

位置：市川字五万崎 17

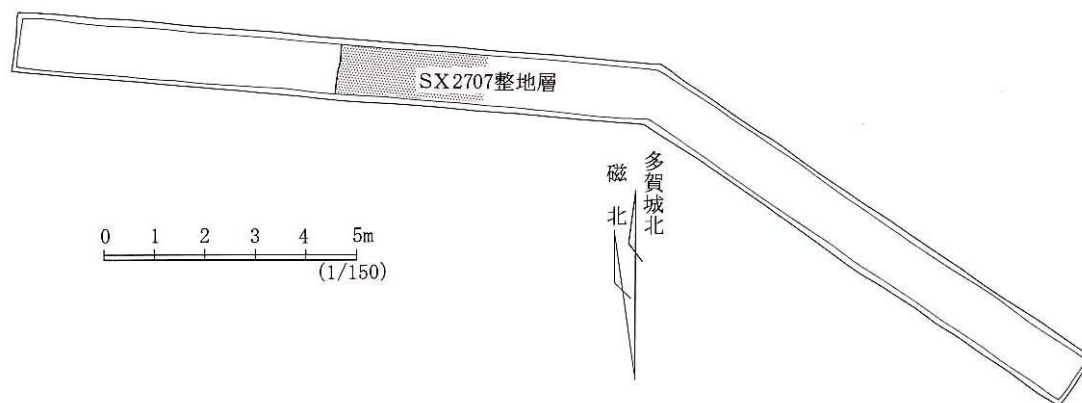
調査期間：平成 13 年 10 月 15・16 日

原因：擁壁設置

発掘面積：約 27 m²

1) 調査区

外郭西門跡の東南約 220 m、外郭南辺築地塀跡推定地のすぐ南に位置する。調査区の周辺は、標高約 6 ～ 7 m で、東が低く、緩やかに傾斜する。調査区は幅約 1.2 m、長さ約 23 m の「く」形で、面積約 27 m²である。



第 24 図 菊池良子宅の発掘調査平面図

2) 調査区の層序

表土である第Ⅰ層（暗褐色土）、整地層（S X2707）である第Ⅱ層（にぶい黄褐色粘質土）、東が低い沢状の地形に自然堆積した第Ⅲ層（褐色砂質土）、地山である第Ⅳ層（黄褐色土）に分かれる。

3) 発見した遺構と遺物（第24図）

発見した遺構は整地層（S X2707）1カ所である。整地層の時期は不明である。

【S X2707 整地層】 調査区のほぼ中央で、東西約3mの範囲で確認した。整地層は厚さ約20cmで、地山土をブロック状に含むにぶい黄褐色粘質土である。東に向かい低くなる地形に整地したもので、自然堆積した第Ⅲ層を覆う。遺物は出土していない。

【遺構外出土の遺物】 第Ⅲ層から土師器坏と甕の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土している。丸瓦にはⅠ類、ⅡA類、ⅡB類、平瓦にはⅠA類、ⅡB類aタイプ、ⅡB類bタイプのものがある。第Ⅰ層からは土師器甕の破片、須恵器甕の破片、須恵系土器高台坏の破片、軒瓦の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土している。軒瓦は重圈文軒丸瓦〔型番不明〕1点である。丸瓦にはⅠA類とⅡB類、平瓦にはⅠA類、ⅡB類aタイプ、ⅡB類bタイプ、ⅡC類のものがある。

2. 多賀城跡坂下地区

(1) 菊池昶宅の発掘調査（第25図）

位置：市川字坂下 29 調査期間：平成14年11月16日

原因：住宅改築 発掘面積：約4.5㎡

1) 調査区

外郭西門跡の東約300mに位置する。周辺は標高約7mで、南が低く、緩やかに傾斜する。調査区は南北約2.8m、東西約1.6mの方形で、面積約4.5㎡である。

2) 調査区の層序

調査区の層序は、厚さ約25cmの盛土の下に、自然堆積した黒褐色粘質土と緑黒色粘土の堆積層がある。この堆積層の掘り下げは、盛土下約1mまでおこなっているが、さらに深く堆積している。この堆積層は、南へ低くなる地形に自然堆積したものと考えられる。

3) 発見した遺構と遺物

発見した遺構はない。盛土から出土した遺物に平瓦の破片がある。

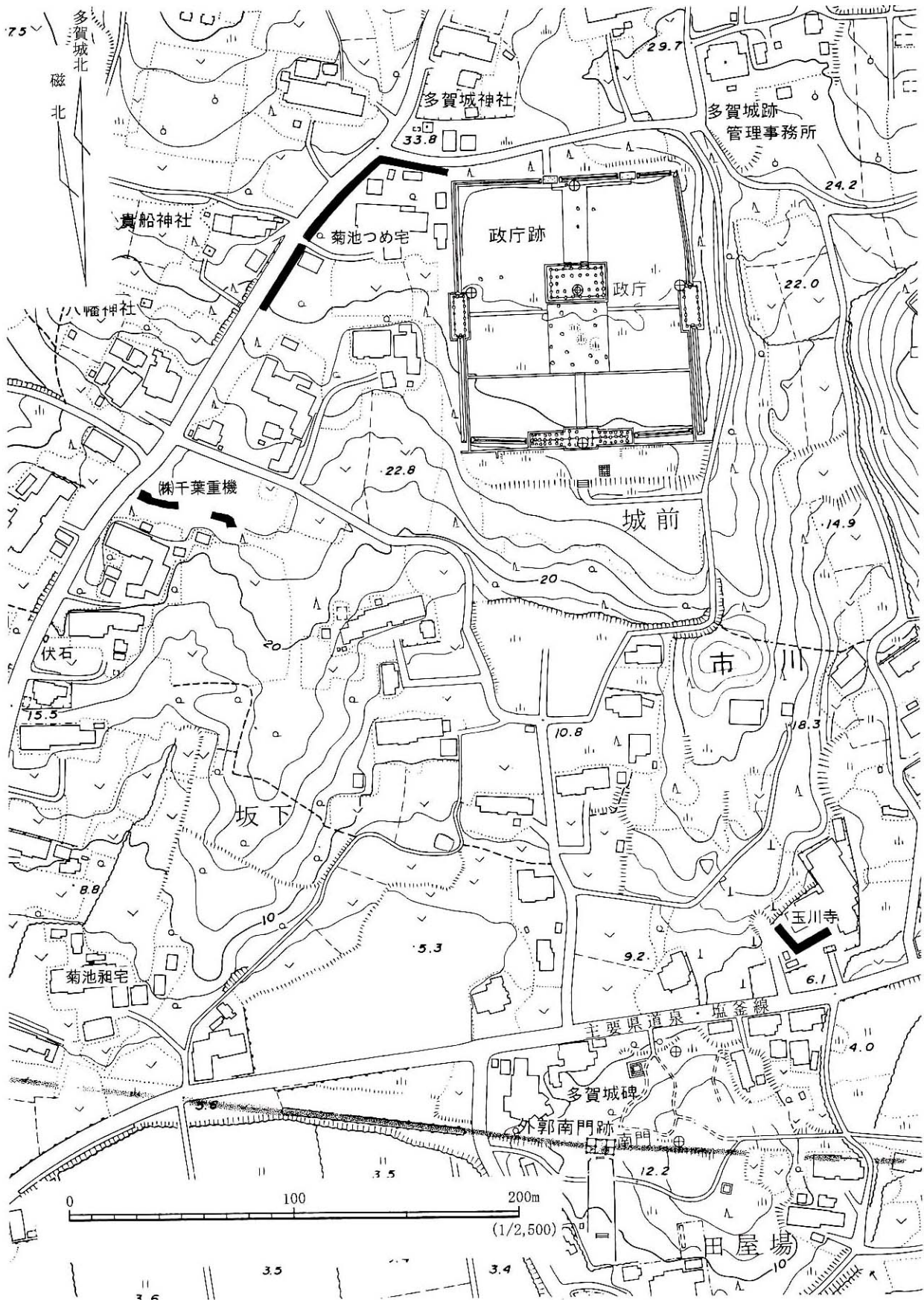
(2) 株式会社千葉重機敷地内の発掘調査（第25図）

位置：市川字坂下 64-1・65-1・65-4 調査期間：平成12年4月24～28日

原因：擁壁設置 発掘調査：面積約76㎡

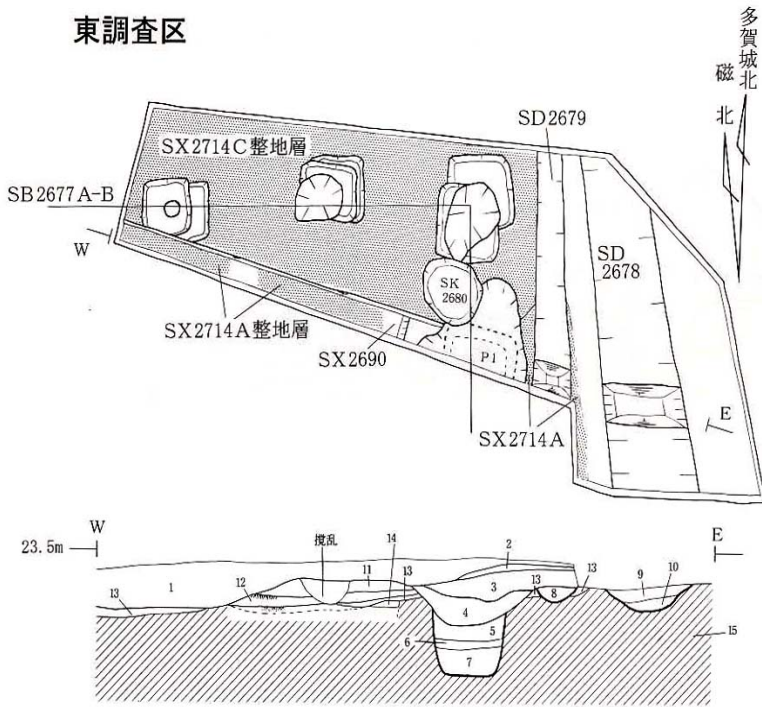
1) 調査区

政庁跡の南西約150mに位置する。周辺は標高約24mで、南が低く、傾斜する。調査区は東調査区と



第 25 図 多賀城跡坂下地区と城前地区での発掘調査区の位置

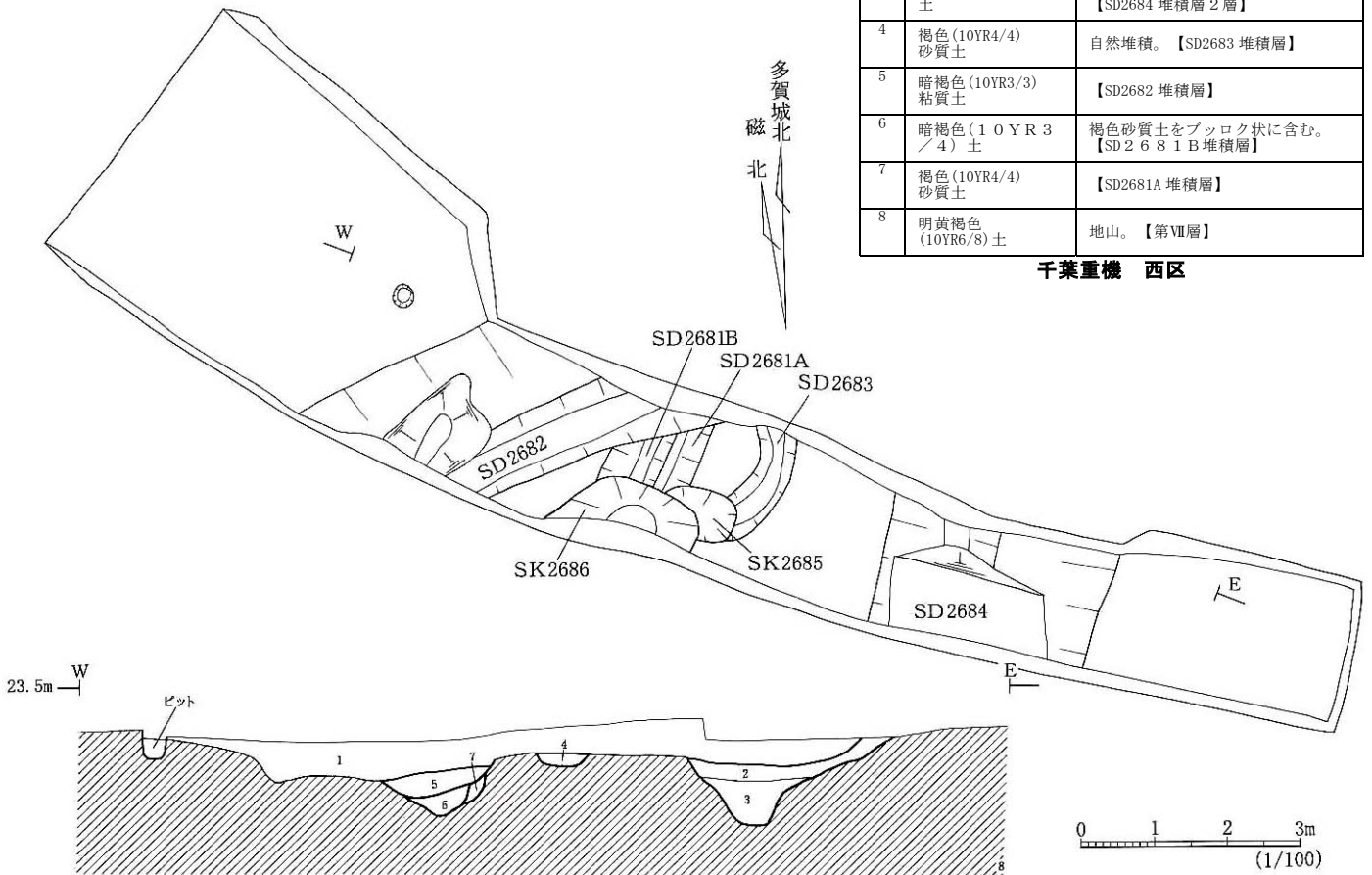
東調査区



層	土色・土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3) 土	しまりなし。表土。【第I層】
2	黒色 (10YR2/1) 土	須恵系土器を多く含む。自然堆積。【第II層】
3	暗褐色 (10YR3/4)	土器と瓦を若干含む。自然堆積。【第III層】
4	褐色 (10YR4/4) 土	地山の粘土を多く含む。【SB2677B 桂抜取穴】
5	灰黄褐色 (10YR4/2) 土	地山の土をブロックで多く含む。炭を多く含む。【SB2677B 桂掘方】
6	褐色 (10YR4/4) 土	地山の土をブロックで多く含む。炭を多く含む。【SB2677B 桂掘方】
7	灰黄褐色 (10YR4/2) 土	地山の土をブロックで若干含む。【SB2677B 桂掘方】
8	褐色 (10YR4/4) 土	自然堆積層。【SD2678 堆積層】
9	暗褐色 (10YR3/4) 土	炭を多く含む。自然堆積。【SD2678 堆積層 1層】
10	褐色 (10YR4/4) 土	炭を特に多く含む。自然堆積。【SD2678 堆積層 2層】
11	褐色 (10YR4/4) 土	地山の土をブロックで多く含む。【第IV層、SX2714C 整地層】
12	明黄褐色 (10YR6/8) 土	地山の土をブロックで多く含む。層上面に焼面。【第V層、SX2712B 整地層】
13	橙色 (7.5YR6/8) 土	地山の土をブロックで多く含む。層上面に焼面。【第VI層、SX2714A 整地層】
14	褐色 (10YR4/4) 土	遺構の堆積層。自然堆積。
15	明黄褐色 (10YR6/8) 土	地山。【第VII層】

千葉重機 東区

西調査区



層	土色・土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3) 土	しまりなし。表土。【第I層】
2	褐色 (10YR4/4) 砂質土	暗褐色粘土を多く含む。自然堆積。【SD2684 堆積層 1層】
3	褐灰色 (10YR5/1) 土	褐色の砂との互層。自然堆積。【SD2684 堆積層 2層】
4	褐色 (10YR4/4) 砂質土	自然堆積。【SD2683 堆積層】
5	暗褐色 (10YR3/3) 粘質土	【SD2682 堆積層】
6	暗褐色 (10YR3/4) 土	褐色砂質土をブロック状に含む。【SD2681B 堆積層】
7	褐色 (10YR4/4) 砂質土	【SD2681A 堆積層】
8	明黄褐色 (10YR6/8) 土	地山。【第VII層】

千葉重機 西区

西調査区の2カ所を設けた。東調査区は、東西約9m、南北約4.5mの不整形で、面積約27㎡である。西調査区は東西約19m、南北約4mの不整形で、面積約49㎡である。東区と西区の間隔は約15mである。

2) 調査区の層序

表土である第Ⅰ層（暗褐色土）、自然堆積した第Ⅱ層（黒色土）と第Ⅲ層（暗褐色土）、人為堆積である第Ⅳ層（S X2714C、褐色土）・第Ⅴ層（S X2714B、明黄褐色土）・第Ⅵ層（S X2714A、橙色土）、地山である第Ⅶ層（明黄褐色土）に分けられる。人為堆積層のうち第Ⅴ層と第Ⅵ層のそれぞれの上面で焼面を確認した。なお東調査区では第Ⅰ層から第Ⅶ層まで堆積するのに対し、西調査区では約1.2mある盛土の下に第Ⅰ層、その直下が第Ⅶ層となる。

3) 発見した遺構と遺物（第26・27図）

東調査区で発見した遺構に掘立柱建物跡1棟（S B2677A・B）、溝2条（S D2678、S D2679）、土壇1基（S K2680）、整地層3枚（S X2714A～C）などがある。西調査区で発見した遺構に溝5条（S D2681～S D2684）と土壇2基（S K2685、S K2686）がある。これらの遺構は、出土遺物及び柱穴の大きさや堆積層の状況、重複関係などから古代の遺構とみられる。

【S B26 刀建物跡】 東調査区西半部に位置する。S X2714C整地層上面で柱穴7個を確認した。S B2677AからS B2677Bへ建て替えられている。S B2677Bの柱抜取穴はS K2680土壇と重複しこれより古い。S B2677Bは東西2間（4.3m以上、柱間は東から約2.2m、約2.1m）以上、南北1間（2.0m）以上で、1個の柱穴で柱痕跡、3個の柱穴で柱抜取穴を確認した。S B2677Aの柱穴の大部分はS B2677Bの柱穴で壊されているが、北側柱列の柱掘り方を3箇所を確認した。S B2677B柱掘り方の堆積層は灰黄褐色土と褐色土の互層で、柱抜取穴は褐色土である。柱痕跡から緑釉陶器皿（第27図58）の破片が出土した。これは内面に陰刻花文が描かれている。S B2677Aは柱掘り方の堆積層が灰黄褐色土で、遺物は出土していない。

【S D2678 溝】 東調査区の東端に位置する。第Ⅶ層（地山）上面で確認した。溝は幅約0.9～1.2m、深さ約33cm、断面台形で、ほぼ南北方向（N-8°-W）である。堆積層は炭化物粒を多く含む褐色土や暗褐色土である。堆積層から土師器坏と甕の破片、須恵器坏・甕の破片、須恵系土器坏と高台坏の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土した。土師器坏と甕にはロクロ使用のものが認められる。丸瓦にはⅡ類、平瓦にはⅡB類aタイプが含まれる。

【S D2679 溝】 東調査区の東半部に位置する。S X2714C整地層の上面で確認した。溝は幅約35～55cm、深さ約24cm、断面台形で、ほぼ南北方向（N-2°-W）である。堆積層は自然堆積した褐色土である。遺物は出土していない。なおS D2679はS B2677建物跡東側柱列の東約1mで平行することから、雨落溝の可能性はある。

【S K2680 土壇】 東調査区中央に位置する。S X2714C整地層上面で確認した。S B2677建物跡の柱抜取穴より新しい。平面形は直径約1mの円形で、深さ約36cmである。堆積層は自然堆積した褐色土である。堆積層から土師器坏と甕の破片、須恵器坏・蓋・甕の破片、須恵系土器坏と高台坏の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土した。丸瓦はⅡ類、平瓦はⅡB類bタイプのものがある。

【SD2681 溝】西調査区中央に位置する。第Ⅶ層（地山）上面で確認した。ほぼ同位置でSD2681AからSD2681Bへ掘り直されている。SD2682 溝跡、SK2685・2686 土壙と重複しこれらよりも古い。SD2681Bは幅約80cm、深さ約40cm、断面「V」形、およそ南北方向（N-23°-E）である。堆積層は自然堆積した暗褐色土である。堆積層から土師器壺と思われる小破片と平瓦ⅡB類の破片が出土している。SD2681Aは同位置で掘り直されたSD2681Bによって大部分を壊されている。遺物は出土していない。なおSD2681A・Bはその位置から城内道路側溝の可能性はある。

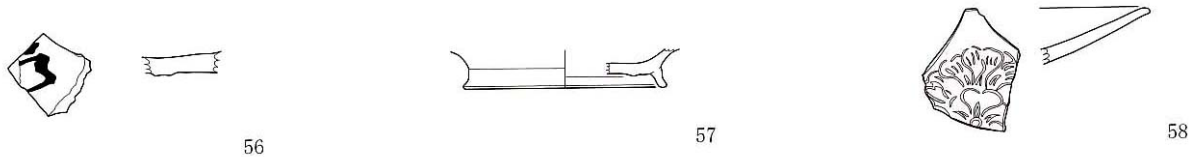
【SD2682 溝】西調査区中央に位置する。第Ⅶ層（地山）上面で確認した。SD2681（A・B）溝跡と重複しこれより新しい。溝幅約80～90cm、深さ約25cm、断面は扁平な「U」形で、北東から南西方向（E-20°-N）である。堆積層は暗褐色粘質土で、遺物は出土していない。

【SD2683 溝】西調査区中央に位置する。第Ⅶ層（地山）上面で確認した。SK2685 土壙と重複しこれよりも古い。溝幅約50cm、深さ約15cm、断面「U」形で、弧状に曲がる。堆積層は自然堆積した褐色砂質土である。堆積層から土師器壺と思われる小破片と甕の破片、須恵器甕の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土している。平瓦にはⅡB類がある。

【SD2684 溝】西調査区東半部に位置する。第Ⅶ層（地山）上面で確認した。溝幅約3.1m、深さ約1.3m、断面台形で、北東から南西方向である。堆積層は自然堆積で、2層（褐色砂質土と褐灰色土）に分けられる。堆積層1層から須恵系土器高台杯の破片（第27図57）と平瓦ⅡB類、2層から平瓦ⅠA類が出土している。なおSD2684は、その位置から城内道路側溝の可能性はある。

【SK2685 土壙】西調査区中央に位置する。第Ⅶ層（地山）上面で確認した。遺構の重複からSD2681（A・B）・2683 溝より新しく、SK2686 土壙より古い。平面は長軸約1m、短軸約70cmの楕円形である。堆積層は自然堆積した褐色土である。堆積層から土師器の小破片と須恵器甕の破片、丸瓦の破片が出土している。

【SK2686 土壙】西調査区中央南端に位置する。第Ⅶ層（地山）上面で確認した。SD2681 溝、SK2685 土壙と重複し、これらより新しい。土壙は平面が直径約1.8mの不整形円で、深さ約47cmである。堆積層は自然堆積した褐灰色土である。堆積層から須恵器壺と甕の破片、平瓦の破片、壁材が出土した。平瓦にはⅡB類がある。



(56～58は縮尺1/3)

遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
56	須恵器 壺	表土	底部破片。底部へラ切り。外面に文字不明の墨書あり。色調は、青灰。	表土-R1	13243
57	須恵系土器 高台杯	SD2684 堆積層1層	高台径(8.0) cm。色調は、淡黄褐。	SD2684-R1	13243
58	緑釉陶器 皿	SB2677-P1 柱痕跡	口縁部破片。内面に陰刻花文。内外面に淡緑色の釉、猿投窯製品。	SD2677-R1	13243

第27図 株式会社千葉重機の発掘調査出土遺物

【S X2690】東調査区中央南端に位置する。S K2714A 整地層の下で確認した。住居跡もしくは土壌などの可能性があるが、その内容はよくわからない。

【S X2714 整地層】東調査区の西側に分布する整地層である。褐色土のS X2714C 整地層、明黄褐色土のS X2714B 整地層、橙色土のS X2714A 整地層の3枚で、A→B→Cの順に新しく、層の境となるA上面とB上面に焼け面がある。層厚はCが約25cm、Bが約20cm、Aが約20cmである。S X2714C 整地層は、S B2677A・B 建物跡、S D2679 溝、S K2680 土壌と重複しこれらよりも古い。S X2714C 整地層中から土師器坏・高台坏・甕の破片、須恵器甕の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土した。土師器高台坏はロクロを使用したものである。丸瓦にはⅡB類、平瓦にはⅡB類aタイプがある。

【遺構外出土の遺物】第Ⅰ層から、土師器坏・甕の破片、須恵器坏・甕の破片、須恵系土器坏・高台坏、灰釉陶器の破片、丸瓦と平瓦の破片、フイゴの羽口の破片、壁材が出土している。灰釉陶器は坑1点で、胎土と釉薬から猿投窯製品とみられる。丸瓦にはⅡ類、平瓦にはⅡB類aタイプ、ⅡC類がある。このうち、底部外面に判読不能の墨書がある須恵器坏（第27図56）を図示した。

3. 多賀城跡城前地区

(1) 玉川寺の発掘調査（第25図）

位置：市川字城前27 調査期間：平成11年12月7～9日

原因：本堂改築等 発掘面積：約87㎡

1) 調査区

外郭南門跡の北東約100m、外郭南辺築地堀跡の北約90mに位置する。政庁跡から南へ舌状に延びる低丘陵の南端にあたる。周辺は標高約9mで、南が低く、緩やかに傾斜する。調査区は幅約3m、東西約18m、南北約15mの「L」形で、面積約87㎡である。

2) 調査区の層序

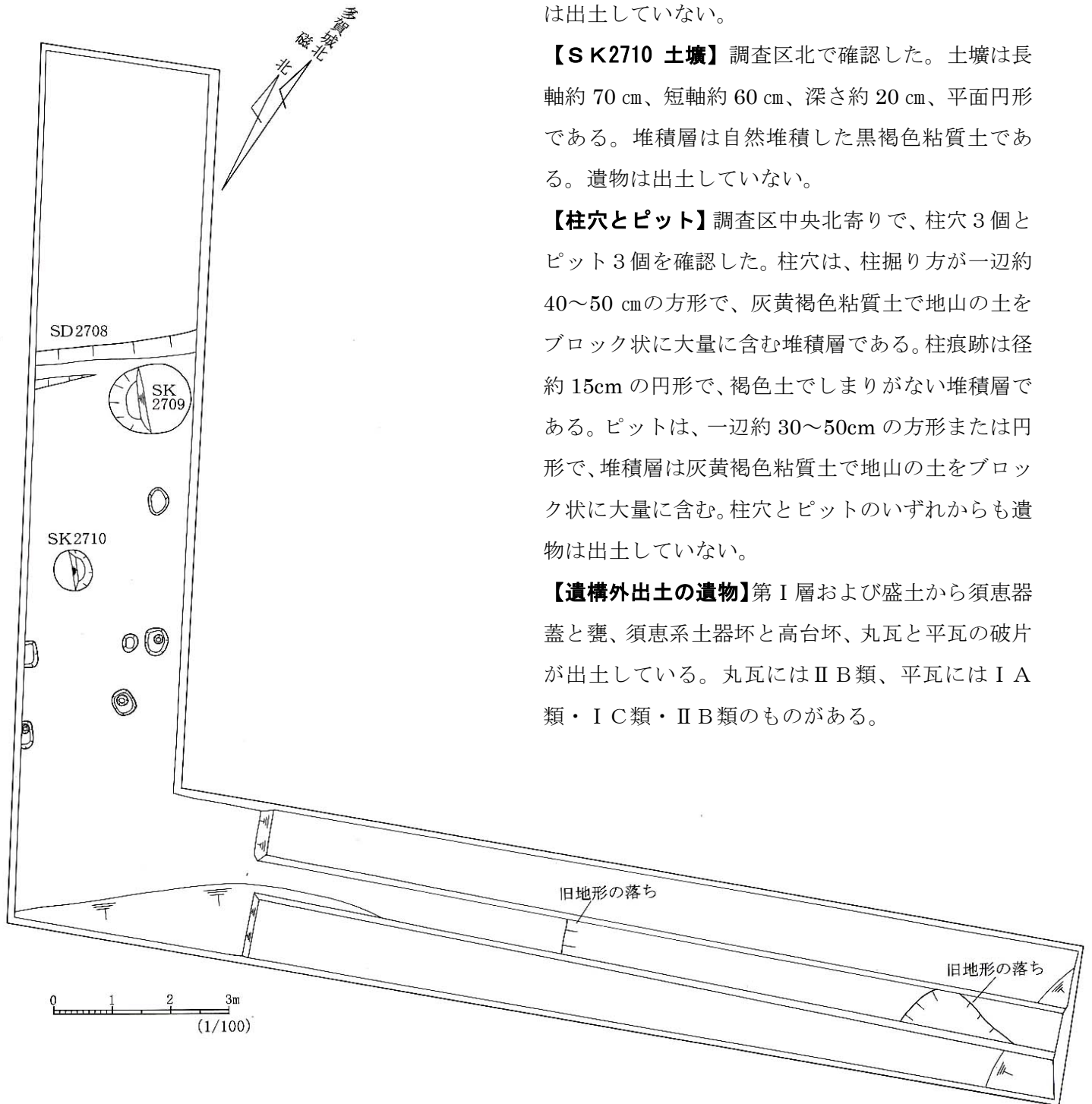
調査区の層序は、明治に玉川寺が移転してきてからの盛土の下に、それ以前の表土である第Ⅰ層（灰黄褐色粘質土）、南へ低くなる地形に自然堆積した第Ⅱ層（褐灰色粘質土）、地山である第Ⅲ層（明黄褐色土）に分かれる。

3) 発見した遺構と遺物（第28図）

発見した遺構に、溝1条（S D2708）と土壌2基（S K2709、S K2710）、柱穴3個などがある。遺構確認面はすべて第Ⅲ層（地山）上面である。これらの遺構は、堆積層の状態から古代より新しいものとみられる。

【S D2708 溝】調査区北に位置する。溝は幅約60cm、深さ約20cm、断面台形で、およそ北東から南西方向（E-40°-N）である。堆積層は自然堆積した暗オリーブ褐色粘質土である。堆積層から丸瓦と平瓦の破片が出土している。平瓦にはⅠA類、ⅡB類aタイプのものがある。

【S K2709 土壌】調査区北で確認した。土壌は長軸約140cm、短軸約120cm、深さ約55cm、平面円形である。堆積層は人為堆積の暗オリーブ褐色粘質土で地山の土をブロック状に大量に含んでいる。遺物



第 28 図 玉川寺の発掘調査平面図

(2) 菊地つめ宅の発掘調査 (第 25 図)

位置：市川字城前 79

調査期間：平成 13 年 5 月 10～25 日

原因：擁壁設置

発掘調査面積：約 270 m²

1) 調査区

政庁築地塀跡の北西隅の西側約 40m に位置する。周辺は、標高約 30～34m、南が低く、緩やかに傾

は出土していない。

【SK2710 土壌】調査区北で確認した。土壌は長軸約 70 cm、短軸約 60 cm、深さ約 20 cm、平面円形である。堆積層は自然堆積した黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

【柱穴とピット】調査区中央北寄りで、柱穴 3 個とピット 3 個を確認した。柱穴は、柱掘り方が一辺約 40～50 cm の方形で、灰黄褐色粘質土で地山の土をブロック状に大量に含む堆積層である。柱痕跡は径約 15cm の円形で、褐色土でしまりがいい堆積層である。ピットは、一辺約 30～50cm の方形または円形で、堆積層は灰黄褐色粘質土で地山の土をブロック状に大量に含む。柱穴とピットのいずれからも遺物は出土していない。

【遺構外出土の遺物】第 I 層および盛土から須恵器蓋と甕、須恵系土器坏と高台坏、丸瓦と平瓦の破片が出土している。丸瓦には II B 類、平瓦には I A 類・I C 類・II B 類のものがある。

斜する。調査区は北調査区と南調査区の2カ所を設けた。北調査区は幅約2m、長さ約80mの「く」形で、面積約176㎡である。南調査区は幅約3m、長さ約30mの方形で、面積約94㎡である。北調査区と南調査区の間隔は約3mである。

2) 調査区の層序

第I層（褐色土）、地山である第II層（明黄褐色粘土）に分けられる。

3) 発見した遺構と遺物（第29～32図）

発見した遺構は、北調査区で溝6条（SD2694～SD2695、SD2697～SD2700）、柱穴1個（SX2693）、整地層1カ所（SX2701）、南調査区で溝1条（SD2703）、土壇2基（SK2704・2706）、整地層1カ所（SK2705）である。遺構の確認面はすべて第II層（地山）上面である。これらの遺構は、出土遺物と重複関係及び柱穴の大きさや堆積層の状況などから、古代の遺構とみられる。

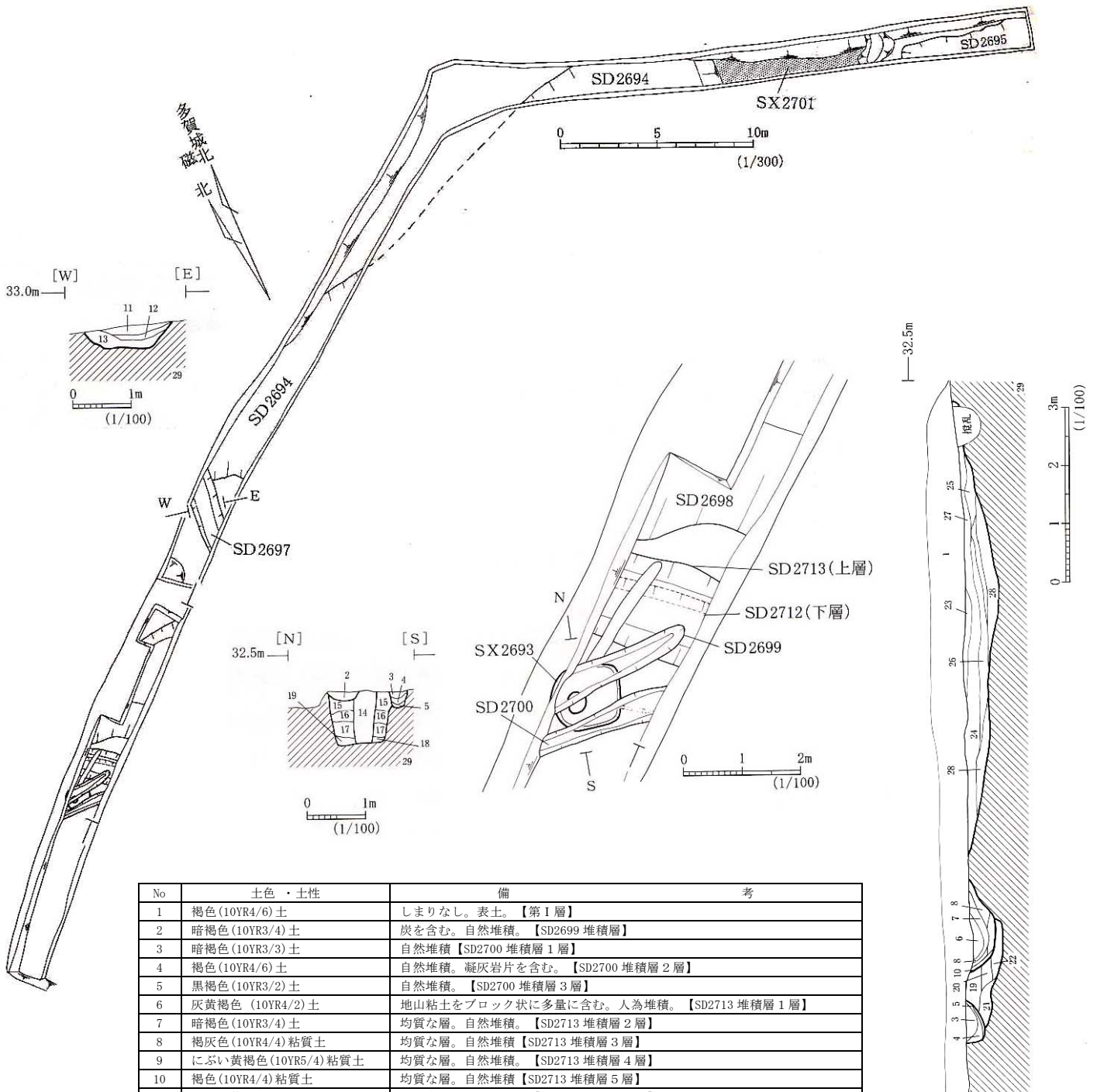
【SX2693 柱穴】北調査区西半部に位置する。遺構の重複からSD2699・2700溝より古く、SD2712溝より新しい。柱掘り方は、一辺約1.1mの方形、深さ約90cm、堆積層は黒褐色土やにぶい黄褐色土などである。柱痕跡は直径約25cmの円形で堆積層が黒色土である。柱掘り方から、土師器甕の破片、須恵器坏・甕の破片、平瓦の破片が出土している。平瓦にはII B類aタイプのものがある。柱痕跡から、土師器甕の破片、須恵器甕の破片、瓦の破片が出土している。

【SD2694 溝】北調査区で確認した。SD2697溝跡、SX2701整地層と重複しこれらより古い。溝は幅約4.5m、東西方向（E—20°—N）で、調査区の屈曲部分より東で約3m、西で約8m、総長約32m分を検出した。底まで掘り下げていない。堆積層は自然堆積した暗褐色土で、3層にわけられる。堆積層1層から、土師器坏・甕・高台坏の破片、須恵器坏・壺・甕の破片、須恵系土器坏・高台坏の破片、二重弧文軒平瓦〔型番511〕、丸瓦と平瓦の破片、漆こし布（写真図版16・82）が出土した。土師器坏と甕にはロクロ使用のものが認められる。丸瓦にはII B類、平瓦にはI A類、I C類、II B類aタイプ、II B類のものがある。3層からは、須恵器甕の破片、平瓦の破片が出土した。平瓦はI A類である。漆こし布には、朱漆が残る。

【SD2695 溝】北調査区東半部に位置する。溝は北西から南東方向で、長さ約7m分を検出した。堆積層には灰白色火山灰が認められる。遺物は丸瓦と平瓦の破片が出土した。丸瓦はII類、平瓦はI A類、II B類aタイプ、II C類のものがある。

【SD2697 溝】北調査区西半部に位置する。SD2694溝と重複しこれより新しい。溝は幅約70cm、深さ約45cm、断面形は台形、ほぼ南北向（N—3°—E）である。堆積層は3層（にぶい黄褐色土、黒褐色土、褐色土）にわけられ、いずれも自然堆積である。堆積層1層から土師器耳皿の破片、須恵器甕の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土している。丸瓦にはII類、平瓦にはII B類がある。

【SD2698 溝】北調査区西半部に位置する。溝は幅約3.5m、深さ約60cm、断面は扁平な「U」形、東西方向で、長さ約7m分を検出した。堆積層は6層（黒褐色粘質土や灰黄褐色粘質土など）に分けられ、いずれも自然堆積である。堆積層1層から土師器坏の破片、須恵器壺の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土している。土師器坏はロクロ使用のもの、平瓦はI A類とII B類のものがある。



No	土色・土性	備考
1	褐色(10YR4/6)土	しまりなし。表土。【第1層】
2	暗褐色(10YR3/4)土	炭を含む。自然堆積。【SD2699 堆積層】
3	暗褐色(10YR3/3)土	自然堆積【SD2700 堆積層1層】
4	褐色(10YR4/6)土	自然堆積。凝灰岩片を含む。【SD2700 堆積層2層】
5	黒褐色(10YR3/2)土	自然堆積。【SD2700 堆積層3層】
6	灰黄褐色(10YR4/2)土	地山粘土をブロック状に多量に含む。人為堆積。【SD2713 堆積層1層】
7	暗褐色(10YR3/4)土	均質な層。自然堆積。【SD2713 堆積層2層】
8	褐灰色(10YR4/4)粘質土	均質な層。自然堆積【SD2713 堆積層3層】
9	にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土	均質な層。自然堆積。【SD2713 堆積層4層】
10	褐色(10YR4/4)粘質土	均質な層。自然堆積【SD2713 堆積層5層】
11	にぶい黄褐色(10YR4/3)土	炭を含む。自然堆積。【SD2697 堆積層1層】
12	黒褐色(10YR3/2)土	炭を含む。自然堆積【SD2697 堆積層2層】
13	褐色(10YR4/6)土	凝灰岩片、炭を含む。自然堆積【SD2697 堆積層2層】
14	黒色(10YR2/1)土	炭を多量に含む。【SX2693 柱痕跡】
15	黒褐色(10YR3/2)土	炭を含む。【SX2693 柱掘方】
16	にぶい黄褐色(10YR4/3)土	炭を含む。【SX2693 柱掘方】
17	灰黄褐色(10YR4/2)土	炭を含む。【SX2693 柱掘方】
18	褐色(10YR4/4)砂	炭を含む。【SX2693 柱掘方】
19	にぶい黄褐色(10YR4/3)土	地山の土を大量に含む。自然堆積。【SD2712 堆積層1層】
20	にぶい黄褐色(10YR5/3)土	地山の土を大量に含む。自然堆積。【SD2712 堆積層2層】
21	にぶい黄褐色(10YR4/3)土	地山の土を大量に含む。自然堆積。【SD2712 堆積層3層】
22	にぶい黄褐色(10YR4/3)TUTI	地山の土を大量に含む。しまりがある。自然堆積。【SD2712 堆積層4層】
23	にぶい黄褐色(10YR5/4)土	炭を僅かに含む。自然堆積。【SD2698 堆積層1層】
24	褐色(10YR4/4)土	炭を若干含む。自然堆積。【SD2698 堆積層2層】
25	黒褐色(10YR3/2)土	炭を若干含む。自然堆積。【SD2698 堆積層3層】
26	褐灰色(10YR5/1)粘土	炭を僅かに含む。自然堆積。【SD2698 堆積層4層】
27	灰黄褐色(10YR5/2)粘質土	炭を若干含む。自然堆積。【SD2698 堆積層5層】
28	灰色(5Y4/1)粘土	炭を僅かに含む。自然堆積。【SD2698 堆積層6層】
29	明黄褐色(10YR6/8)粘土	地山。【第II層】

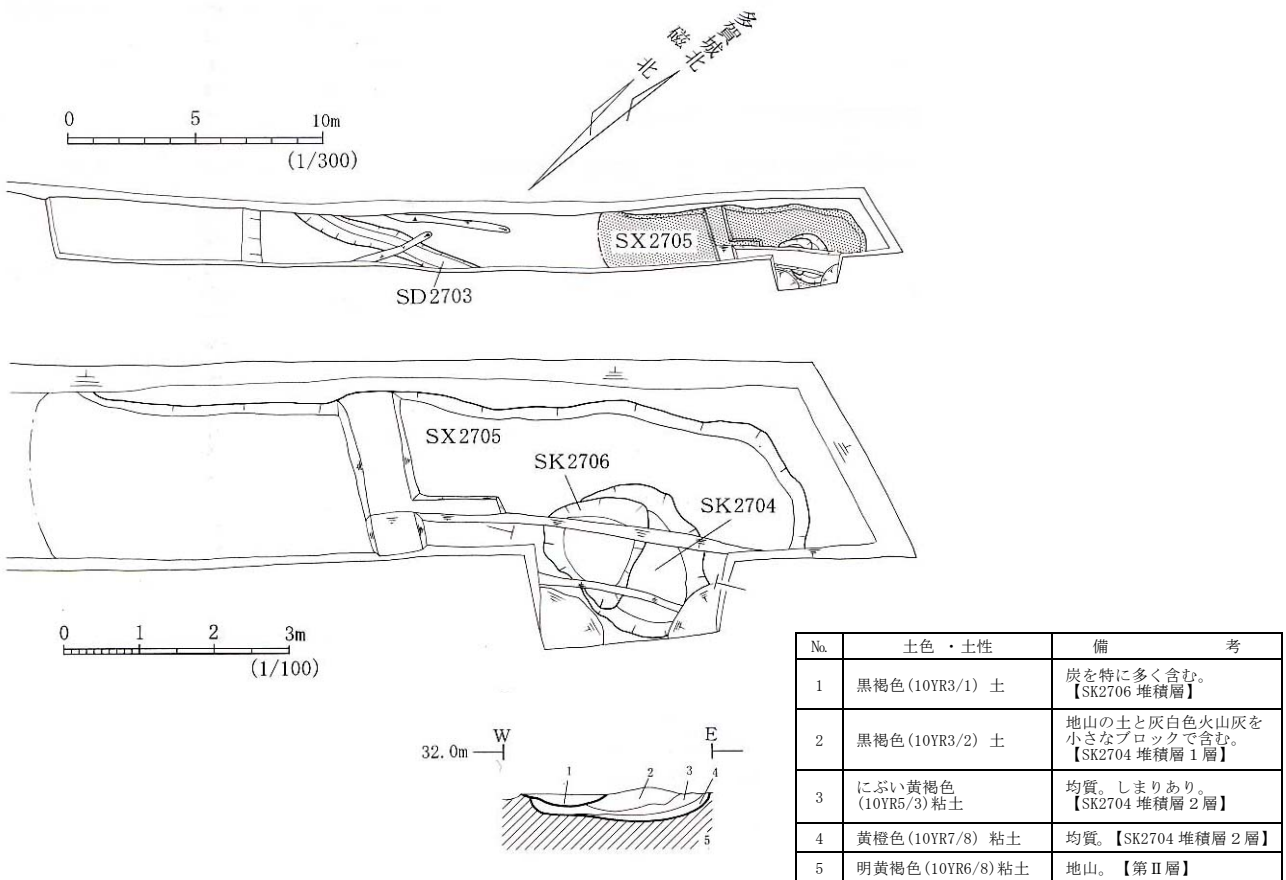
第29図 菊池つめ宅の北調査区平面図と断面図

【SD2699 溝】北調査区西半部に位置する。SD2712・2713 溝、SX2693 柱穴と重複しこれらよりも新しい。堆積層は自然堆積した暗褐色土である。溝は幅約 45 cm、深さ約 15 cm、断面形は「U」形、東西方向で、長さ約 2.3m 分を検出した。堆積層 1 層から土師器坏・甕の破片、須恵器坏・甕の破片、須恵系土器坏の破片、重弁蓮花文軒丸瓦 [型番 320]、二重弧文軒平瓦 [型番不明]、丸瓦と平瓦の破片が出土している。平瓦には IC 類と II B 類のものがある。

【SD2700 溝】北調査区西半部に位置する。SD2712 溝、SX2693 柱穴と重複しこれより新しい。溝は幅約 35～50 cm、深さ約 30 cm、断面「U」形、東西方向で、長さ約 2 m 分を検出した。堆積層は 3 層（暗褐色土、褐色土、黒褐色土）に分けられ、いずれも自然堆積である。堆積層 1 層から土師器高台坏の破片、須恵器坏・甕の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土した。丸瓦は II B 類、平瓦は IA 類、II B 類 a タイプ、II B 類 b タイプのものがある。

【SX2701 整地層】北調査区東半部に位置する。SD2694 溝を覆う整地層である。整地層は厚さ約 20cm で、約 8 m の範囲で分布し、にぶい黄褐色土である。遺物は出土していない。

【SD2703 溝】南調査区の南半部に位置する。溝は、幅約 90 cm、深さ約 10 cm、断面「U」形、北東から南西方向（E-30°-N）で、長さ約 7 m 分を検出した。堆積層は自然堆積した褐色土である。堆積層から土師器甕の破片、須恵器甕の破片、須恵系土器坏・高台坏の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土した。平瓦には II B 類のものがある。



第 30 図 菊池つめ宅の南調査区の平面図と断面図

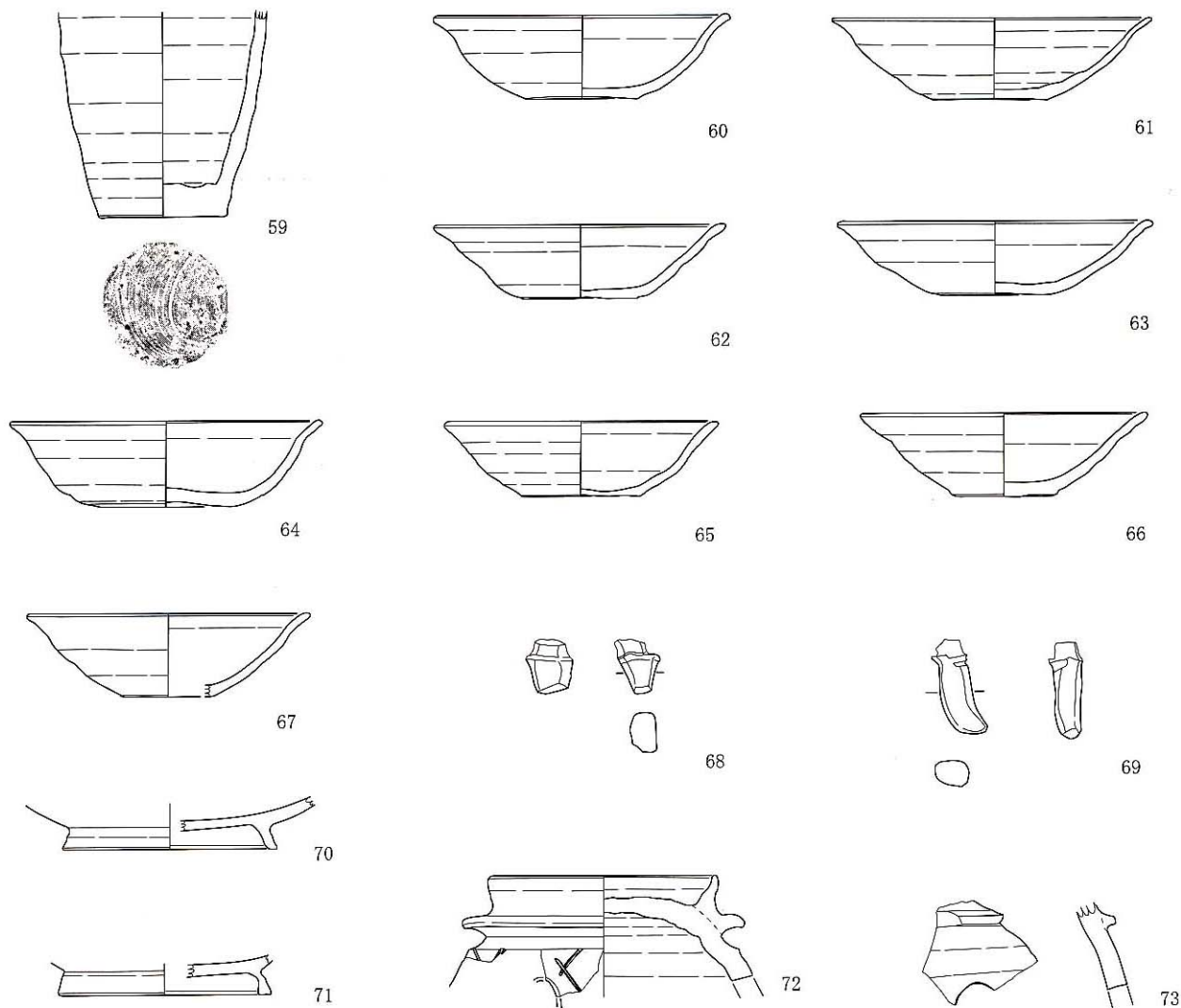
【S K2704 土壙】南調査区の北半部に位置する。遺構の重複からS K2705 整地層、S K2706 土壙と重複しこれより新しい。土壙は長軸約 2.3m、短軸約 1.8m、深さ約 40 cm、平面楕円形、断面「U」形である。堆積層は人為堆積で、3層（黒褐色土、にぶい黄褐色、黄橙色粘土）に分かれる。堆積層1層からは土師器坏の破片、須恵器壺・甕の破片、須恵系土器坏・高台坏・高台鉢の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土した。丸瓦にはⅡB類、平瓦にはⅠA類、ⅡB類aタイプ、ⅡB類bタイプがある。2層からは須恵系土器坏の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土した。平瓦にはⅡB類bタイプとⅡC類のものがある。3層からは、須恵系土器坏の破片と丸瓦の破片が出土している。このうち、須恵系土器坏（第31図60）を図示した。

【S X2705 整地層】南調査区の北半部に分布する。S K2704・2706 土壙と重複しこれらより古い。整地層は、地山面を約5cmほど掘り込み南北約10m 東西3m以上の範囲に及ぶ。褐色土である。堆積層から土師器坏・高台坏の破片、須恵器坏・壺・甕の破片、須恵系土器坏・高台坏・高台鉢の破片、緑釉陶器と灰釉陶器の破片、円面硯の破片、軒瓦の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土した。緑釉陶器は碗1点と碗もしくは皿2点、灰釉陶器は壺1点があり、これらは胎土や釉薬から猿投窯製品と考えられるものである。このうち緑釉陶器碗は高台が台形で、黒笹14号式期と考えられるものである。軒瓦には重弁蓮花文軒丸瓦〔型番不明〕2点、陰刻花文軒丸瓦〔型番450もしくは451〕1点、均整唐草文軒平瓦〔型番721〕2点がある。丸瓦にはⅡB類、平瓦にはⅠA類、ⅠB類、ⅠC類、ⅡB類aタイプ、ⅡB類bタイプのものがある。土壙底からは、土師器坏の破片、須恵器壺・甕の破片、須恵系土器坏・高台坏の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土した。平瓦にはⅡB類aタイプ、ⅡB類bタイプのものがある。このうち、須恵器壺（第31図59）、緑釉陶器碗（70）、円面硯（72）を図示した。

【S K2706 土壙】南調査区の北半部に位置する。遺構の重複からS X2705 整地層より古く、S K2704 土壙より古い。土壙は平面が直径約1.2mの円形で、深さ約15cm、断面「U」形である。堆積層は人為堆積した炭化物粒を特に多く含む黒褐色土である。堆積層から、土師器坏・高台坏・甕の破片、須恵器壺・甕の破片、須恵系土器坏・高台坏・高台鉢・三足土器の破片、緑釉陶器と灰釉陶器の破片、丸瓦と平瓦の破片、フイゴの羽口、壁材が出土している。緑釉陶器は碗2点と碗もしくは皿5点、灰釉陶器は壺1点があり、これらは胎土や釉薬から猿投窯製品と考えられるものである。このうち緑釉陶器の碗もしくは皿の1点は高台が台形で、黒笹14号式期と考えられるものである。丸瓦にはⅡB類、平瓦にはⅠA類、ⅡB類aタイプ、ⅡB類bタイプのものがある。これらのうち須恵系土器坏（第31図61～67）・三足土器（69）、緑釉陶器（71）、平（第32図74）、和釘（78・79）を図示した。

【S D2712 溝】北調査区西半部に位置する。S D2699・2700・2713 溝と重複し、これらよりも古い。溝は幅約2m、深さ約60cm、北西から南東方（E-40°-S）で、長さ約1m分を検出した。堆積層は4層（にぶい黄褐色土）に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

【S D2713 溝】北調査区西半部に位置する。遺構の重複からS D2699・2700 溝、S X2693 柱穴より古く、SD2712 溝より新しい。溝は、幅約1.6m、深さ約45cm、断面は扁平な「U」形、北西から南西方向（E-40°-S）で、長さ約1.6m分を検出した。堆積層は自然堆積した4層（暗褐色土やにぶい黄褐色粘質土など）とその上層の人為堆積である灰黄褐色土に分けられる。遺物は出土していない。



(59~73は、縮尺1/3。)

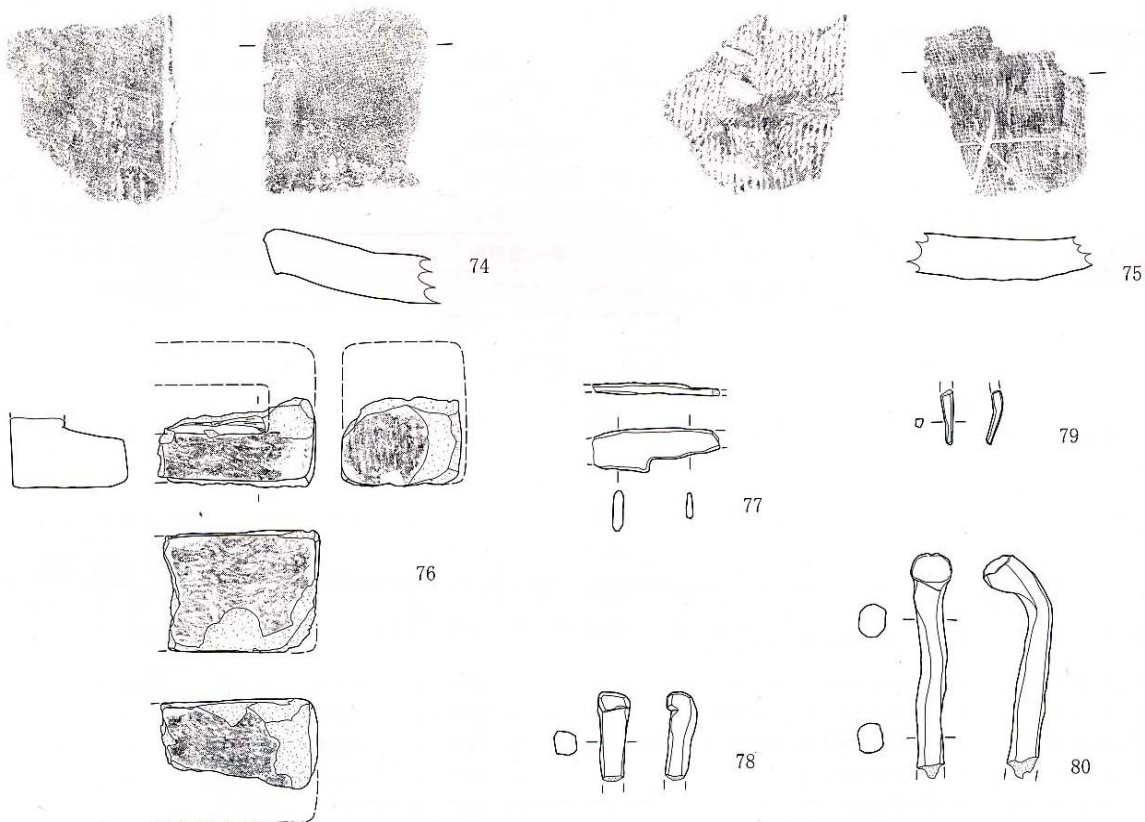
遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
59	須恵器壺	SX2705 堆積層1層	底径5.4cm。底部は静止糸切り。胎土に砂粒が若干混じる。外面に自然釉。色調は青灰。壺G。	SX2705-R8	13244
60	須恵系土器杯	SX2704 堆積層1層	口径(12.6)cm。底径4.6cm。器高3.5cm。底部は同転糸切り無調整。色調は浅黄。	SK2704-R1	13244
61	須恵系土器杯	SX2706 堆積層1層	口径(13.6)cm。底径4.8cm。器高3.5cm。底部は同転糸切り無調整。色調は明黄橙。	SK2706-R9	13244
62	須恵系土器杯	SX2706 堆積層1層	口径(12.4)cm。底径4.8cm。器高3.1cm。底部は同転糸切り無調整。色調は浅黄橙。	SK2706-R10	13244
63	須恵系土器杯	SX2706 堆積層1層	口径(13.4)cm。底径4.6cm。器高3.1cm。底部は同転糸切り無調整。色調は浅黄橙。	SK2706-R11	13244
64	須恵系土器杯	SX2706 堆積層1層	口径(13.2)cm。底径5.4cm。器高3.6cm。底部は同転糸切り無調整。色調は褐灰。	SK2706-R12	13244
65	須恵系土器杯	SX2706 堆積層1層	口径11.6cm。底径5.0cm。器高3.2cm。底部は同転糸切り無調整。色調は浅黄橙。	SK2706-R13	13244
66	須恵系土器杯	SX2706 堆積層1層	口径(12.2)cm。底径4.2cm。器高3.6cm。底部は同転糸切り無調整。色調は橙。	SK2706-R14	13244
67	須恵系土器杯	SX2706 堆積層1層	口径(11.8)cm。底径(3.6)cm。器高3.5cm。底部は同転糸切り無調整。色調は灰白。	SK2706-R15	13244
68	須恵系土器三足土器	表土	脚部破片。ナデ調整。色調は明黄橙。	表土-R22	13244
69	須恵系土器三足土器	SX2706 堆積層1層	脚部破片。ナデ調整。色調は明黄橙。	SK2706-R16	13244
70	緑釉陶器碗	SX2705 堆積層1層	高台径(9.0)cm。高台部の断面角形。内外面にヘラミガキの後に釉(緑灰)。重ね焼き痕内面2箇所、外面1箇所。猿投窯製品。黒笹14号式期。	SX2705-R1	13244
71	緑釉陶器碗 or 皿	SX2706 堆積層1層	高台径(9.0)cm。高台部の断面角形。内外面に釉(淡緑)。猿投窯製品。黒笹14号式期。	SK2706-R1	13244
72	円面硯	SX2705 堆積層1層	硯部径(9.6)cm。脚部に「X」形の線刻と円窓。須恵器質。色調は灰。	SK2705-R7	13244
73	円面硯	表土	脚部の破片。円窓1個を確認。須恵器質。色調は灰。	表土-R22	13245

() 内の数値は復元値である。

第31図 菊池つめ宅の発掘調査出土遺物(1)

【遺構外出土の遺物】

表土及び攪乱から、土師器坏・高台坏・甕の破片、須恵器坏・壺・甕の破片、須恵系土器坏・高台坏・高台鉢・三足土器の破片、緑釉陶器と灰釉陶器の破片、中世陶器の破片、硯の破片、軒瓦の破片、丸瓦と平瓦の破片、埴の破片、壁材が出土した。緑釉陶器は碗1点と碗もしくは皿1点、灰釉陶器は壺2点あり、これらは胎土や釉薬から猿投窯製品と考えられるものである。中世陶器は三筋壺の体部破片1点で、これは常滑製品と考えられるものである。硯は円面硯3点と風字硯1点である。軒瓦には重弁蓮花文軒丸瓦〔型番不明〕2点と二重弧文軒平瓦〔型番不明〕1点、このほかに軒丸瓦の小破片1点と軒平瓦の小破片4点がある。丸瓦にはI A類とII B類、平瓦にはI A類、I B類、I C類、II B類 aタイプ、II B類 bタイプ、II C類のものがある。このうち須恵系土器三足土器（第31図68）、平瓦（第32図75）、埴（76）、鉄製刀子（77）・和釘（80）を図示した。

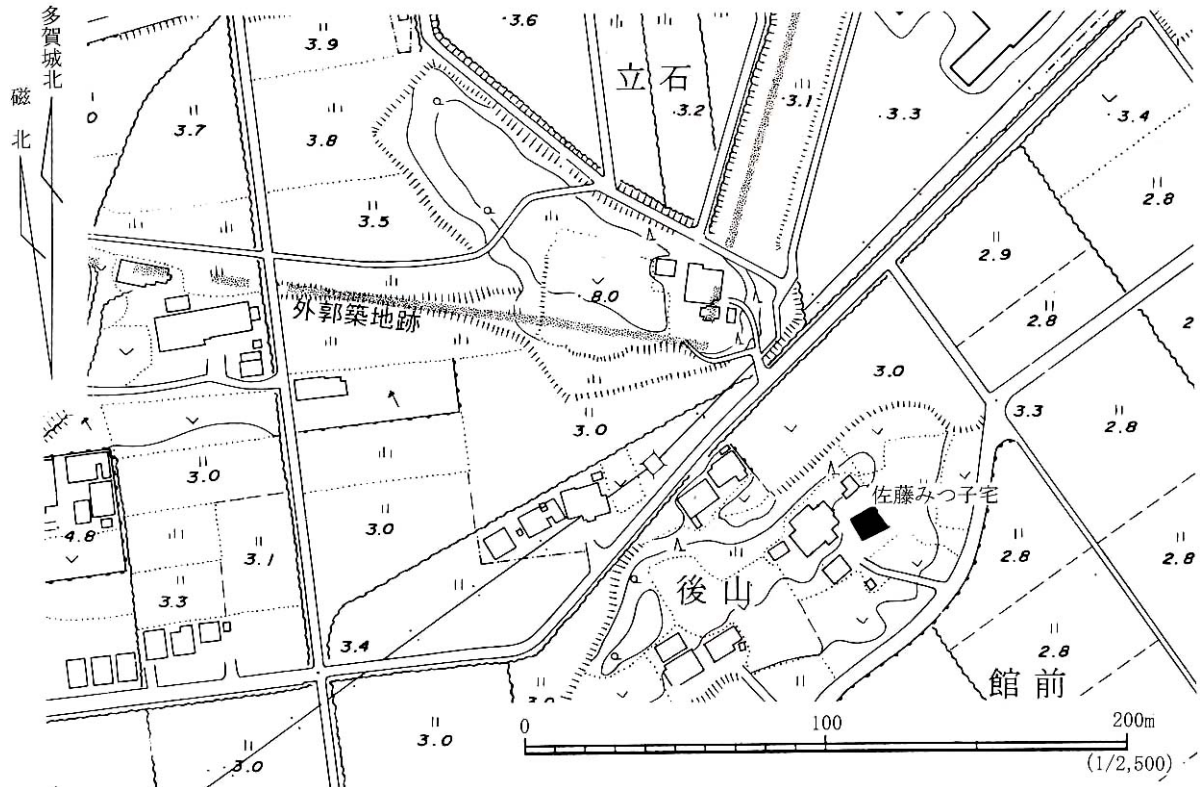


(縮尺は、74～76が1/4、77～80が1/3。)

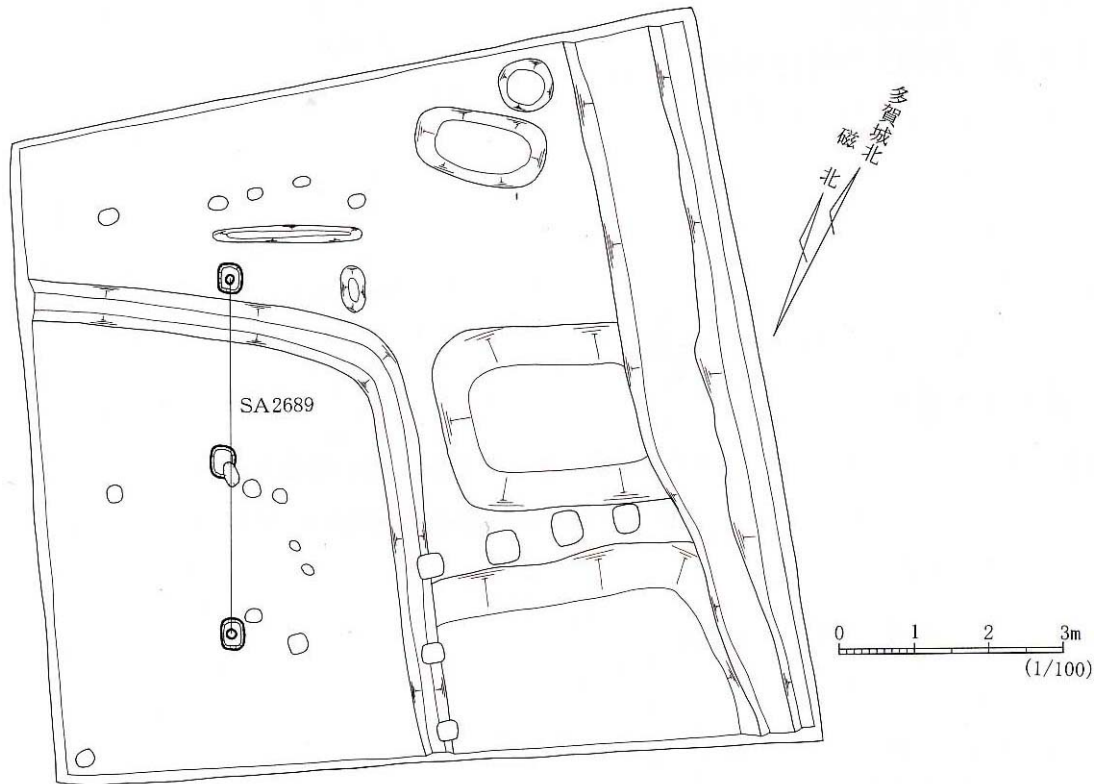
遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
74	平瓦	SK2706-1層	凸面はケズリ。凹面に糸切り痕、布目一ナデ。端部凹面にケズリ。色調は黒褐。平瓦I A類。	SK2706-R21	13244
75	平瓦	表土	凸面に縄叩き目。凹面に布目の後にナデ、ヘラ描き「大」。色調は褐灰。平瓦II B類。	表土-R18	13245
76	埴	表土	四面に縄叩き目。凹部分にケズリ。残存長8.5×幅6.5×残存厚4.9cm	表土-R9	13245
77	鉄製刀子	表土	残存長5.2cm。刀幅1.5cm	表土-RM3	13278
78	鉄製和釘	SK2706-1層	釘足欠損。残存長3.5cm。断面0.9×1.0cm	SK2706-RM1	13278
79	鉄製和釘	SK2706-1層	頭部欠損。残存長2.2cm。断面0.3×0.3cm	SK2706-RM2	13278
80	鉄製和釘	表土	釘足欠損。残存長8.9cm。断面1.1×1.3cm	表土-RM4	13278

第32図 菊池つめ宅の発掘調査出土遺物（2）

4. 多賀城跡後山地区



第 33 図 多賀城跡後山での発掘調査区的位置



第 34 図 佐藤みつ子宅の調査区平面図

佐藤みつ子宅の発掘調査 (第 33 図)

位置：浮島字後山 32-2 調査期間：平成 12 年 5 月 22・23 日

原因：作業場改築工事 発掘調査面積：約 87 m²

1) 調査区

外郭南東端の南西約 60m に位置する。小高い台地の北端にあたり、周辺の標高は約 6 m の平坦な地である。調査区は、平成 10 年度に同氏宅で実施した発掘調査区の南隣である。調査区は東西約 10m、南北約 10m の方形で、面積約 87 m²である。

2) 調査区の層序

表土である第 I 層（褐色土）、地山である第 II 層（明褐色土）に分けられる。

3) 発見した遺構と遺物 (第 34 図)

発見した遺構は柱列跡 1 条 (S A 2689) である。遺構は第 II 層（地山）上面で確認している。なお調査区内は、馬小屋やゴミ穴などにより攪乱を多く受けていた。

【S A 2689 柱列跡】調査区西半部で、北西から南東方向 (N—27°—W) に並ぶ柱穴 3 個を検出した。中央の柱に柱抜取穴が認められる。柱掘り方は一辺約 30～40cm の隅丸方形で、堆積層は褐色砂である。柱痕跡は直径約 10 cm の円形で、堆積層はにぶい褐色砂である。遺物は出土していない。

【遺構外出土の遺物】第 I 層から平瓦の破片と砥石が出土している。平瓦には II B 類のものがある。

5. 多賀城廃寺地区

鈴木進二郎宅の発掘調査 (第 35 図)

位置：高崎 1 丁目 61-1・2・3, 62, 63-1 の一部 調査期間：平成 12 年 5 月 15・16 日

原因：住宅増改築 発掘調査面積：約 21 m²

1) 調査区

多賀城廃寺金堂の西約 70m に位置する。周辺は標高約 17m の平坦な地である。調査区は東西約 1.8m、南北約 13m の方形で、面積約 21 m²である。

2) 調査区の層序

旧表土である第 I 層（黒褐色土）、自然堆積層である第 II 層（にぶい褐色土）・第 III 層（灰白色火山灰）・第 IV 層（褐色土）・第 V 層（暗褐色土）、地山である第 VI 層（黄褐色土）に分けられる。このほかに、調査区全体を覆う厚さ 40cm ほどの盛土がある。

3) 発見した遺構と遺物 (第 36 図)

発見した遺構に、土壇 1 基 (S K 2688) と溝 1 条 (S D 2687)、ピットがある。これらは第 III 層（灰白色火山灰）に覆われることから 10 世紀前葉以前の遺構である。

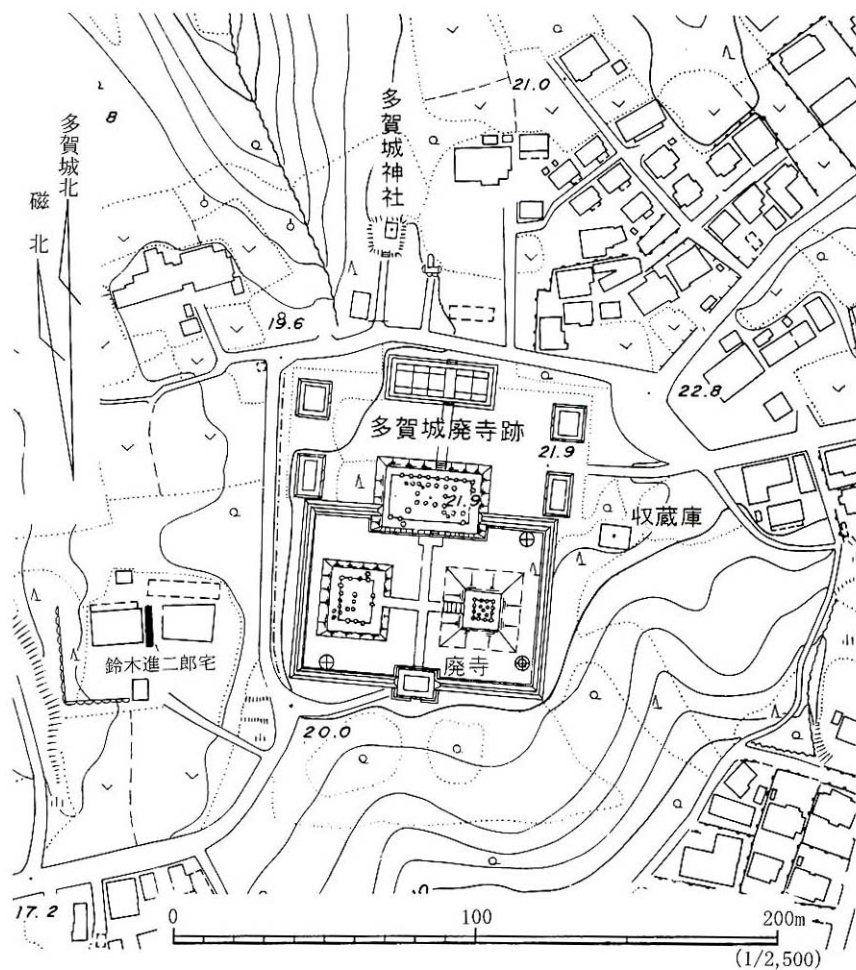
【S D 2687 溝】調査区中央で確認した。溝は幅約 40～80 cm、深さ約 20 cm、断面「U」形で、ほぼ東西方向 (E—2°—N) である。堆積層は自然堆積の褐色土である。堆積層から土師器甕の破片・須恵器壺

の破片、丸瓦と平瓦の破片が出土した。丸瓦にはⅠ類とⅡB類、平瓦にはⅠA類・ⅠC類・ⅡB類aタイプがある。

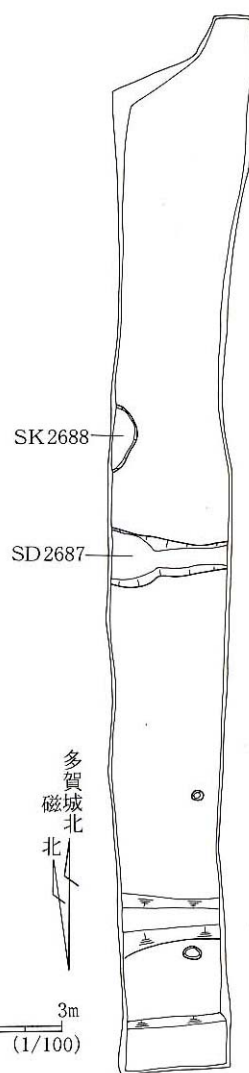
【SK2688 土壌】調査区のほぼ中央で確認した。遺構の大部分が調査区外のため、規模は不明である。堆積層は自然堆積の黒色土で炭粒を含む。遺物は出土していない。

【ピット】調査区の南半で2個確認した。ピットは径約15～20cmほどの円形で、堆積層は褐灰色土と黄灰色土である。遺物は出土していない。

【遺構外出土の遺物】第Ⅰ層及び盛土から土師器坏・甕の破片、須恵器壺の破片、須恵系土器坏の破片、軒瓦、丸瓦と平瓦の破片が出土した。軒瓦は軒丸瓦の小破片である。丸瓦はⅡ類、平瓦はⅠA類・ⅠC類・ⅡB類aタイプ・ⅡB類bタイプがある。



第35図 多賀城廃寺地区での発掘調査位置図



第36図 鈴木進二郎宅の調査区平面図

IV. 付章

1. 関連研究・普及活動

平成 14 年度は多賀城跡発掘調査の他に、次の調査研究事業や普及活動を行った。

(1) 多賀城跡環境整備事業

平成 14 年度は第 7 次 5 カ年計画の 3 年目にあたり、総事業費 9,300 千円（国庫補助 50%）で柏木遺跡の保存整備工事を実施した。詳細は下記の通りである。

- ① 法面保護工：園路工で設置する園路の周辺を中心に芝張りを行った。
- ② 園路工：昨年度工事で設置した園路の延長工事を行った。この園路は、車椅子の通行も可能な緩勾配（幅員 1.8m／最大勾配 8%）で、部分的に高さ 65cm および 85 cm の 2 段式の手すりを設置している。路面はカラー樹脂舗装とした。
- ③ 植栽工：法面保護工が完了した東側・北側を中心に植栽を実施した。東側擁壁上部にはヒラドツツジを、北側丘陵部にはエゴノキ・ウツギ・アセビ・ガマズミ・ミツバツツジを、また園路工周辺部にはウツギ・ガマズミ・イロハモミジを植栽した。
- ④ 雨水排水工：園路工で設置される園路の周辺を中心に排水溝（コンクリート製 U 字型溝）及び集水桝を設置した（流末は平成 12 年度に設置した集水桝を経由して周辺道路側溝に接続）。

(2) 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

当研究所では、特別史跡内の遺構と歴史的景観の保護に努めている。しかし、やむなく特別史跡内の現状を変更するにあたっては、申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡への影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を行っている。

平成 14 年度における現状変更申請は 11 件あった（表 3）。その内容は次のとおりである。

- ① 民間工事 2 件—住宅改築工事（6）、農地整備工事（8）。
- ② 公共事業 3 件—道路改修工事（2・4・5）。
- ③ 史跡の活用に関わるもの 6 件—催事行為（1・3・7）、公園施設修繕等（9・10・11）。

掘削を伴う住宅改築工事(6)については発掘調査を、その他現状変更が軽微なもの 10 件については工事の際に立ち会い調査を行った。

番号	申請者	変更箇所	変更事項	申請	県教委許可	対応
1	あやめまつり実行委員会委員長 多賀城市長 鈴木 和夫	多賀城市市川字田屋場内	あやめまつり	平成 14 年 4 月 3 日	宮教委指令第 8 号 平成 14 年 4 月 11 日	立会・指導
2	宮城県教育委員会 教育長 千葉 眞弘	多賀城市市川字坂下 19-1・3・4, 21 田屋場 40-1, 42-2, 48-4, 12 城前 32, 33	第 73 次発掘調査	平成 14 年 4 月 15 日	宮教委指令第 15 号 平成 14 年 4 月 19 日	発掘調査
3	多賀城市長 鈴木 和夫	多賀城市市川字立石 1 地先	道路舗装工事	平成 14 年 4 月 25 日	宮教委指令第 69 号 平成 14 年 6 月 14 日	立会・指醇
4	史都多賀城万葉まつり実行委員会 委員長 根来 宜昭	多賀城市高崎 1 丁目 74-2, 78-1 87-3, 90-1, 63-2	万葉まつり開催	平成 14 年 7 月 8 日	宮教委指令第 86 号 平成 14 年 7 月 12 日	立会・指導
5	多賀城市長 鈴木 和夫	多賀城市市川字田屋場 38-2	市道緊急工事	平成 14 年 7 月 18 日	宮教委指令第 92 号 平成 14 年 8 月 7 日	立会・指導
6	多賀城市長 鈴木 和夫	多賀城市市川字丸山内	側溝整備等	平成 14 年 10 月 10 日	宮教委指令第 142 号 平成 14 年 11 月 21 日	立会・指導
7	菊池 昶	多賀城市市川字坂下 29	住宅増築一	平成 14 年 10 月 29 日	宮教委指令第 156 号 平成 14 年 11 月 21 日	確認調査
8	多賀城市長 鈴木 和夫	多賀城市市川字立石 17-1・2 18-1・2, 19-1・2, 20, 21-1・2, 25, 水路	あやめ園拡張整備	平成 14 年 11 月 1 日	宮教委指令第 155 号 平成 14 年 11 月 3 日	立会・指導
9	佐藤 みつ子	多賀城市浮島字矢中 28, 28-1・2	農地整備	平成 14 年 11 月 19 日	宮教委指令第 168 号 平成 14 年 12 月 3 日	立会・指導
10	多賀城市長 鈴木 和夫	多賀城市高崎 1 丁目 90-1	照明灯修繕	平成 14 年 12 月 20 日	宮教委指令第 172 号 平成 15 年 1 月 15 日	立会・指導
11	多賀城市長 鈴木 和夫	多賀城市市川字田屋場 22-1 浮島字後山 12, 13-1	病木伐採	平成 14 年 12 月 20 日	宮教委指令第 171 号 平成 15 年 1 月 15 日	立会・指導
12	多賀城市長 鈴木 和夫	多賀城市高崎 1 丁目 74-2, 78-1 83-2, 87-3, 90-1	フェンス修繕	平成 15 年 1 月 14 日	宮教委指令第 200 号 平成 15 年 1 月 23 日	立会・指導

表 3 平成 14 年度実施の現状変更一覧

(3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所では古代多賀城に関連する宮城県内の城柵及び官衙遺跡や生産遺跡について、計画的な調査と研究を継続的に行っている。この調査と研究事業は、中央政府が陸奥と出羽両国を支配する上で中枢的な役割を果たした古代の多賀城を、多角的な視野から解明することを目的としている。

平成14年度は第6次5カ年計画の4年度にあたり、桃生郡鳴瀬町に位置する亀岡遺跡の第1次調査を実施した。発掘調査面積は約520㎡である。調査にあたっては鳴瀬町教育委員会の協力を得た。総事業費は6,500千円(50%国庫補助)である。調査の結果は次のとおりである。

遺跡内に5カ所の調査区を設け、遺跡の範囲と性格を解明するための発掘調査を実施した。その結果、野蒜小学校体育館の北西で多賀城創建期の瓦がまとまって出土することが判明した。なお発見した古代の遺構は貝層1カ所と溝1条で、これまで古代の瓦が出土することから指摘されてきた役所や寺院としての性格を把握することはできなかった。遺跡の具体的な内容は次年度の調査で明らかにする計画である。

(4) 遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査によって検出した諸遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は遺構調査研究事業の第5次5カ年計画の5年度として、鹿児島県大隅国府跡、福岡県太宰府市大宰府跡、佐賀県三田川町吉野ヶ里遺跡、広島県安芸国府・国分寺跡、奈良県興福寺、福島県郡山市広網遺跡、いわき市五反田A遺跡、宮城県亘理町三十三堂遺跡、仙台市郡山遺跡、宮崎町壇の越遺跡、田尻町新田柵推定地、岩手県矢巾町徳丹城跡等の調査データを収集した。さらに従来収集した各地のデータを整理し比較と検討を行った。

(5) 発掘調査図面のデジタル化事業

当研究所がこれまでに調査して蓄積してきた実測図・写真をデジタルデータとして記録保存することにより、発掘調査資料の恒久的な保存と、デジタル情報としての積極的な活用を可能とした。総事業費は9000千円(緊急地域雇用特別基金事業)である。

(6) 刊行物

『宮城県多賀城跡調査研究所年報2002 多賀城跡』(本書)	2003年3月20日
『亀岡遺跡I』 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第28冊	2003年3月17日
『多賀城跡—発掘調査の歩み—』	2003年3月

(7) その他

1. 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するために、下記の現地説明会を開催した。

加藤道男・佐藤則之・古川一明	「多賀城跡第73次調査について」	平成14年9月14日
阿部 恵・吾妻俊典	「亀岡遺跡第1次調査について」	平成14年9月20日

2. 各機関・委員会などへの協力

加藤道男 胆沢城跡整備指導会議 秋田市秋田城跡環境整備指導委員 払田柵跡保存管理計画策定指導委員 盛岡市志波城跡整備委員 仙台市郡山遺跡発掘調査指導委員 多賀城市環境審議委員 古川市名生館官衙遺跡発掘調査・環境整備指導委員 角田市郡山遺跡発掘調査指導委員 古代城柵官衙遺跡検討会代表世話人 亘理町三十三間堂官衙遺跡発掘調査検討委員

佐藤則之 文化庁「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究」に関する協力者会議 協力者
古川市名生館官衙遺跡発掘調査・環境整備指導委員

古川一明 高清水町史編さん委員

吾妻俊典 女川町文化財保護委員

3. 発掘調査・講演会などへの協力

加藤道男 「特別史跡多賀城跡の歴史的意義」 高等学校及び特殊教育諸学校高等部初任者研修 平成14年9月10日

———— 「特別史跡多賀城跡の歴史的意義」 小中学校及び特殊教育諸学校小中学部初任者研修 平成14年10月8日

佐藤則之 「多賀城跡」 平成14年度第13回史跡案内ボランティア養成講座 平成14年5月20日

———— 田尻町 新田柵跡 発掘調査 平成14年8月

———— 亘理町 三十三間堂遺跡 発掘調査 平成14年10月

佐藤和彦 「鎮守府—多賀城と胆沢城—」 平成14年度東北歴史博物館開放講座 平成14年11月3日

吾妻俊典 「特別史跡多賀城跡について」 宮城県西多賀養護学校教職員研修 平成14年7月11日

———— 「戦国時代の領主—領土と戦い—」 河北地区教育委員会文化財セミナー 平成15年2月15日

———— 「戦国時代の歳時記—武家年中行事の世界—」 河北地区教育委員会文化財セミナー 平成15年2月22日

———— 「戦国城時代のイエ—村落と秩序—」 河北地区教育委員会文化財セミナー 平成15年3月8日

———— 「白河の史跡巡り」 河北地区教育委員会文化財セミナー移動講座 平成15年3月16日

4. 研究発表・執筆など

阿部・佐藤(和)・古川・吾妻他「桃生城跡第1次～第10次発掘調査の概要」

『月刊考古学ジャーナル』臨時増刊号No.494 平成14年10月30日

佐藤則之「多賀城創建期の概要」第29回古代城柵官衙遺跡検討会 古川市 平成15年2月8日

古川一明「多賀城跡第73次調査の概要」宮城県遺跡調査成果発表会 多賀城市 平成14年12月21日

———— 「多賀城跡第73次調査の概要」第29回古代城柵官衙遺跡検討会 古川市 平成15年2月8日

吾妻俊典「塩釜式から南小泉式へ」第17回研究会宮城県考古学会古墳時代研究部会 平成14年4月16日

———— 「2001年の考古学界的動向 古代(東北)」『月刊考古学ジャーナル』臨時増刊号No.488 平成14年5月12日

———— 「海道の拠点 桃生城跡—38年戦争始まりの地—」桃生郡阿比地区教育委員会文化財シフレット 平成15年3月20日

吾妻・阿部「亀岡遺跡の概要」第29回古代城柵官衙遺跡検討会 古川市 平成15年2月8日

5. 連携大学院

東北大学大学院文学研究科長と宮城県多賀城跡調査研究所長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究と指導にあたった。

加藤道男(客員教授) 文化財科学研究演習Ⅰ 「史跡の保存整備と活用(1)」
文化財科学研究演習Ⅱ 「史跡の保存整備と活用(2)」
課題研究

佐藤則之(客員助教授) 文化財科学研究実習Ⅱ 「発掘調査の実際」
課題研究

2. 組織と職員

〈宮城県教育委員会行政組織規則（抄）〉

第13条の四 文化財保護課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第21条 特別史跡多賀城跡附寺跡（これに関する遺跡を含む。以下同じ。）の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
宮城県多賀城跡調査研究所	多 賀 城 市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

- 一 特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘に関すること。
- 二 特別史跡多賀城跡附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。
- 三 特別史跡多賀城跡附寺跡の環境整備に関すること。
- 四 庶務に関すること。

第24条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、職は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職 務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は技術職員をもつて充てる。
〈職員〉

《研究班》

主任研究員（班長） 阿部 恵
主任研究員 佐藤 則之
副主任研究員 佐藤 和彦[博物館兼務]
副主任研究員 古川 一明
研究員 吾妻 俊典
技 師 関口 重樹[博物館兼務]

《総務班》

主任 主 査 西條 久代[博物館兼務]
主 事 伊藤 亮一[博物館兼務]

所 長 副参事兼次長副（総括・総務班長）
加藤 道男—— 石川 鎮雄
[博物館兼務]

3. 沿革と実績

(1) 宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年月	事 項
大正 11.10	多賀城跡が史蹟名勝天然記念物保存法(大正8・4公布)により史蹟指定、指定名称「多賀城跡附寺跡」
昭和 35	県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織して5力年計画で多賀城跡の発掘調査を実施することになり、その初年度事業として多賀城跡と多賀城廃寺跡の地形図を作成
36. 8	多賀城廃寺跡第1次発掘調査実施(県教委主体、多賀城町と河北文化事業団共催。調査団長は伊東信雄東北大学教授)
37. 8	多賀城廃寺跡第2次発掘調査実施、主要伽藍配置が判明
38. 8	多賀城跡政庁地区発掘調査(第1次)開始、以後40年8月(第3次)まで実施、政庁地区の朝堂院的な建物配置が判明
41. 4	多賀城跡附寺跡特別史跡に昇格指定
43.11	多賀城町が多賀城跡政庁地区の発掘調査(第4次)を再開
44. 4	宮城県多賀城跡調査研究所設立
44. 7	多賀城跡調査研究指導委員会設置(委員長伊東信雄) 研究所による多賀城跡調査研究事業開始
44.10	色麻村日の出山窯跡の発掘調査実施
45. 3	『多賀城跡調査報告Ⅰ—多賀城廃寺跡—』刊行
45. 4	研究所による多賀城跡環境整備事業開始
48.10	金堀地区を対象とした第21次調査で計帳様文書断簡を発見
49. 2	外郭西辺地区の追加指定が官報告示
49. 4	多賀城関連遺跡発掘調査事業開始
49. 8	桃生城跡の発掘調査に着手(昭和50年度まで継続)
49. 8	プレハブ庁舎から東北歴史資料館の建物に移転
51. 3	特別史跡多賀城跡附寺跡保存管理計画書策定
52. 7	伊治城跡の発掘調査に着手(昭和54年度まで継続)
53. 4	研究第一科・同第二科の2科制となる、遺構調査研究事業開始
53. 6	漆紙文書の発見を報道発表、これにより研究所が山本壮一郎知事から表彰を受ける
55. 3	『多賀城跡—政庁跡図録編—』刊行
55. 3	館前遺跡の追加指定が官報告示
55. 7	名生館遺跡の発掘調査に着手(昭和60年度まで継続)、初年度の調査で8世紀初頭の官衙中枢部を検出
57. 1	現状変更に伴う興急調査(第40次)により外郭線南辺築地中央部で木樋発見
57. 3	『多賀城跡—政庁跡本文編—』刊行
58.11	第43・44次調査で政庁南前面の道路遺構発見
59. 3	多賀城跡南面地城の追加指定が官報告示
60. 9	名生館遺跡関連合戦原瓦窯跡発掘調査実施
61. 8	東山遺跡の発掘調査に着手(平成4年度まで継続)
62. 8	名生館官衙遺跡の史跡指定が官報告示
62.11	第53次調査で多賀城第Ⅰ・Ⅱ期の外郭東門を発見
63. 3	特別史跡多賀城跡附寺跡第2次保存管理計画書策定
平成 2. 6	柏木遺跡の追加指定が官報告示
2.11	多賀城跡調査研究指導委員会に南門—政庁間整備活用専門部会を設置
4.11	日本最古の「かな」漆紙文書について報道発表
5. 8	下伊揚野窯跡群の調査を実施し、3基の多賀城創建瓦窯跡を発見
5. 9	山王千刈田地区の追加指定が官報告示
6. 8	桃生城跡の発掘調査を再開(平成13年度まで継続)、政庁の全貌を解明
7. 6	第31回指導委員会において南門—政庁間整備活用計画案承認
9.11	多賀城碑覆屋の解体修理および碑地下部分の発掘調査を実施
10. 6	多賀城碑の重要文化財(古文書)指定が官報告示
11. 1	東山官衙遺跡の史跡指定が官報告示
11. 4	2科制が廃され、研究班となる
11. 4	東北歴史博物館の建物に移転
14. 1	「多賀城跡等の発掘調査を通して東北古代史の解明に尽くした功績」により第51回河北文化賞を受賞
14. 8	亀岡遺跡の発掘調査に着手

(2) 事業実績

1) 多賀城跡発掘調査の実績

計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)	計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)		
第1次5カ年計画	昭和44	5次	政庁地区南東部	1,980	9,000	第4次5カ年計画	昭和59	45次	坂下地区	70	29,000		
		6次	政庁地区北東部	2,079				46次	外郭西門地区	750			
		7次	外郭南辺中央部 (多賀城碑付近)	264				47次	外郭西辺中央部	1,000			
	昭和45	8次	外郭南辺中央部	350	12,000		昭和60	48次	外郭南門地区	800	29,000		
		9次	政庁地区南西部	2,046				49次	外郭北門推定地区	450			
		10次	外郭西辺中央部	495				昭和61	50次	政庁南地区		900	29,000
		11次	外郭東辺南部	660					51次	外郭北東隅東地区		500	
	昭和46	12次	外郭中央地区北部	3,795	12,000		昭和62	52次	大畑地区及び東辺外の地区	500	29,000		
		13次	外郭東辺東門付近	1,600				53次	外郭東門北東地区	1,000			
		14次	外郭東地区北部	2,086				昭和63	54次	外郭東門東地区		1,000	29,000
	昭和47	15次	鴻の池周辺	112	13,000		平成元		55次	外郭東辺中央部 (作貫地区)	500		
		16次	政庁地区北半部	1,320				56次	大畑地区北半部	1,550	29,000		
		17次	外郭北東隅・北西隅	1,729				57次	外郭東辺南半部 (西沢地区)	500			
		18次	外郭中央部地区北部	2,937				平成2	58次	大畑地区中央部		1,470	30,000
	昭和48	19次	政庁地区北西部	2,640	平成3		59次		大畑地区中央部東側	900			
		20次	外郭南辺中央部	990			平成4	60次	大畑地区中央部	1,450	30,000		
		21次	外郭西地区中央部	1,485	61次			鴻の池地区	1,450				
		22次	城外南方 (高平遺跡)	3,465	平成5		62次	大畑地区南半部	1,100	35,000			
昭和49	23次	外郭東地区北部 (字大畑)	3,300	63次		大畑地区北半部	1,700						
	24次	外郭南東隅	2,640	平成6	64次	大畑地区北部	3,000	35,000					
昭和50	25次	多賀城廃寺跡南大門推定地	2,310		平成7	65次	外郭東門北部 現状変更に伴う調査		1,800	36,000			
	26次	多賀城廃寺跡中門前方地区	2,310	平成8		66次	大畑地区北西部	3,000	35,000				
	27次	奏社官西隣市川大久保地区	660			平成9	67次	大畑地区西部			3,000	39,000	
昭和51	28次	五万崎地区	2,310	平成10	68次		大畑地区西部 多賀城碑覆屋の解体修理に伴う発掘調査	2,650	36,000				
	29次	五万崎地区	2,310		平成11	69次	城前地区南部	2,000		36,000			
昭和52	30次	五万崎地区	1,980	平成12		70次	城前地区南部	2,000	37,700				
	31次	政庁北方隣接地区	1,980		平成13	71次	城前地区南部	2,000		32,300			
昭和53	32次	政庁北方隣接地区	1,000	平成14		72次	南門西側築地塀跡	1,000	28,900				
	33次	外郭西門地区	1,000		平成15	73次	南門東側築地塀跡	1,800		26,000			
第3次5カ年計画	昭和54	34次	雀山地区南低湿地	1,300		平成15	74・75次	城内南北大路跡と 外郭北門推定地区	1,800		25,220		
		35次	鴻の池南地区	900									
	昭和55	36次	外郭東地域中央部作貫地区	1,800									
		37次	多賀城外南地方 (砂押川東岸) 地区	700									
	昭和56	38次	作貫南端低湿地 (緊急調査)	50									
		39次	外郭東地域中央部作貫地区	2,500									
	昭和57	40次	外郭南辺築地東半中央部 (立石地区・緊急)	80									
		41次	外郭東辺南端部 (田屋場東端地区)	1,200									
	昭和58	42次	外郭東地域中央部 (作貫地区)	500									
		43次	外郭中央地区中央部 (政庁南方)	800									
44次		外郭中央地区中央部 (政庁南方)	2,500										

※平成14年度までは実績で、平成15年度以降は計画

2) 多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

	年度	対象地区	主な工事内容	面積(㎡)	事業費(千円)
第1次5カ年計画	昭和45	政庁地区(第1期)	南門翼廊跡・東脇殿跡表示工	3,519	10,000
	昭和46	政庁地区(第2期)	正殿跡・築地塀跡表示工	7,256	20,000
	昭和47	政庁地区(第3期)	西脇殿跡・築地塀跡表示工	14,669	25,000
	昭和48	政庁地区(第4期)	北西門跡・築地塀跡表示工	9,415	20,000
		外郭東門地区	東門跡・堅穴住居跡表示工		
昭和49	六月坂地区	掘立建物跡・倉庫跡・道路跡表示工	8,326	20,000	
第2次5カ年計画	昭和50	外郭東南隅地区(第1期)	木質遺構保存施設設置工	3,600	20,000
	昭和51	外郭東南隅地区(第2期)	湿地修景工・園路工	6,400	10,000
	昭和52	鴻の池地区(第1期)	南辺築地塀跡表示工	2,000	16,000
	昭和53	鴻の池地区(第2期)	多賀城碑周辺修景工	2,500	16,000
		南門地区(第1期)	南門跡・築地塀跡保護工		
昭和54	南門地区(第2期)	南門周辺丘陵の地形修復工・緑化修景工	5,200	20,000	
第3次5カ年計画	昭和55	南門地区(第3期)	園路工・便益施設工・緑化修景工	7,030	30,000
	昭和56	外郭南築地東半部	緑化修景工	2,149	30,000
		園路(資料館一南門)	園路工・便益施設工・緑化修景工		
	昭和57	外郭南門地区東斜面	園路工	31,831	28,000
		作貫地区(第1期)	遺構保護盛土工・緑化修景工		
昭和58	作貫地区(第2期)	建物跡表示工・便益施設工・園路工・緑化修景工	54,400	30,000	
昭和59	作貫地区(第3期)	土塁跡及び空堀跡表示工・便益施設工・園路工	6,750	27,000	
第4次5カ年計画	昭和60	作貫地区(第4期)	遺構露出展示工・便益施設工・園路工・緑化修景工	6,400	27,000
	昭和61	政庁南地区	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	7,470	27,000
		作貫地区	便益施設工		
		雀山地区	緑化修景工		
	昭和62	作貫地区北部	園路工・緑化修景工・便益施設工	6,130	27,000
		政庁地区	便益施設工・園路工・緑化修景工		
	雀山地区	便益施設工・園路工・緑化修景工			
昭和63	作貫地区北部・丘陵南西裾部	便益施設工・園路工・緑化修景工	8,260	27,000	
平成元	北辺地区南半部	便益施設工・園路工・緑化修景工	6,700	27,112	
第5次5カ年計画	平成2	北辺地区北半部(第1期)	便益施設工・園路工・緑化修景工	11,500	30,000
	平成3	北辺地区北半部(第2期)	便益施設工・園路工・緑化修景工	19,000	30,000
	平成4	北辺地区北半部(第3期)	便益施設工	2,900	30,000
		東門・大畑地区東側部(第1期)	地形修復工・園路工・緑化修景工		
	平成5	東門・大畑地区東側部(第2期)	奈良時代東門跡及び掘立建物跡表示工・便益施設工	2,500	35,000
	平成6	東門・大畑地区東側部(第3期)	便益施設工	550	35,000
第6次5カ年計画	平成7	東門・大畑地区西側北半部(第1期)	道路跡復元工・築地塀跡及び建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工	3,120	30,000
	平成8	東門・大畑地区西側北半部(第2期)	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	14,250	39,000
	平成9	東門・大畑地区西側北半部(第3期)	道路跡表示工・便益施設工	805	51,000
		南門地区	多賀城碑覆屋解体修理工	50	
	平成10	東門・大畑地区西側北半部(第4期)	道路跡表示工・排水施設工・緑化修景工	12,500	35,000
	平成11	東門・大畑地区西側北半部(第5期)	建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工		31,500
第7次5カ年計画	平成12	柏木遺跡(第1期)	遺構保護造成工・排水工・法面保護工	3,800	14,400
	平成13	柏木遺跡(第2期)	法面保護工・園路階段工・植栽工・排水工		19,700
	平成14	柏木遺跡(第3期)	遺構表示工・園路工		9,300
	平成15	柏木遺跡(第4期)	遺構表示工・園路広場工等		9,020

3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計画	年度	遺跡名	事業	内容	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和49	桃生城跡	地形図作成 第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2500
	昭和50	桃生城跡	第2次発掘調査	同上	850	2,500
	昭和51	伊治城跡	地形図作成		—	1,500
	昭和52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438	3,000
	昭和53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第2次5カ年計画	昭和54	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	1,000	4,000
	昭和55	名生館遺跡	地形図作成 第1次発掘調査	城内地区の調査	1,650	7,000
	昭和56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	1,960	7,000
	昭和57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区の調査	1,156	7,000
	昭和58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区の調査	1,020	7,000
第3次5カ年計画	昭和59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区の調査	1,800	6,300
	昭和60	名生館遺跡 合戦原窯跡	第6次発掘調査	範囲確認調査 関連窯跡の調査	1,300	6,300
	昭和61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
	昭和63	東山遺跡	第3次発掘調査	官衙中枢部の把握	1,200	7,000
第4次5カ年計画	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同上	562	7,000
	平成2	東山遺跡	第5次発掘調査	同上	600	7,000
	平成3	東山遺跡	第6次発掘調査	同上	2,200	10,000
	平成4	東山遺跡	第7次発掘調査	同上	3,260	12,000
	平成5	下伊場野窯跡	地形図作成 発掘調査	多賀城創建期窯跡の調査	600	14,000
第5次5カ年計画	平成6	桃生城跡	地形図作成 第3次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300	22,000
	平成7	桃生城跡	第4次発掘調査	同上	730	20,000
	平成8	桃生城跡	第5次発掘調査	外郭線の調査	800	17,000
	平成9	桃生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800	17,000
	平成10	桃生城跡	第7次発掘調査	同上	800	17,000
第6次5カ年計画	平成11	桃生城跡	第8次発掘調査	同上	1,200	15,300
	平成12	桃生城跡	第9次発掘調査	政庁西側丘陵上の調査	1,400	10,500
	平成13	桃生城跡	第10次発掘調査	同上	600	11,400
	平成14	亀岡遺跡	第1次発掘調査	遺跡の範囲確認調査	520	6,500
	平成15	亀岡遺跡	第2次発掘調査	同上	800	6,305

※平成14年度までは実績で、平成15年度以降は計画

4) 研究成果刊行物

①宮城県多賀城跡調査研究所年報

『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1969』	(第 5・6・7 次調査)	昭和 45 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1970』	(第 7・8・9・10・11 次調査)	昭和 46 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1971』	(第 12・13・14 次調査)	昭和 47 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1972』	(第 15・16・17・18 次調査)	昭和 48 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1973』	(第 19・20・21・22 次調査)	昭和 49 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1974』	(第 23・24 次調査)	昭和 50 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1975』	(第 25・26・27 次調査、東外郭線南端部緊急発掘)	昭和 51 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1976』	(第 28・29 次調査)	昭和 52 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1977』	(第 30・31 次調査)	昭和 53 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1978』	(第 32・33 次調査、環境整備)	昭和 54 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』	(第 34・35 次調査、環境整備)	昭和 55 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1980』	(第 36・37 次調査)	昭和 56 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1981』	(第 38・39・40 次調査)	昭和 57 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1982』	(第 41・42 次調査)	昭和 58 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1983』	(第 43・44 次調査)	昭和 59 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984』	(第 45・46・47 次調査、環境整備)	昭和 60 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1985』	(第 46・48・49 次調査)	昭和 61 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1986』	(第 49・50・51 次調査)	昭和 62 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1987』	(第 50・52・53 次調査)	昭和 63 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1988』	(第 53・54・55 次調査)	平成 元年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1989』	(第 56・57 次調査)	平成 2 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1990』	(第 58・59 次調査)	平成 3 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』	(第 60・61 次調査)	平成 4 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992』	(第 62・63 次調査)	平成 5 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1993』	(第 64 次調査)	平成 6 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994』	(第 65 次調査、環境整備)	平成 7 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1995』	(第 66 次調査)	平成 8 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1996』	(第 67 次調査)	平成 9 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』	(第 68 調査、多賀城碑覆屋解体修理)	平成 10 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1998』	(第 69 次調査)	平成 11 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1999』	(第 70 次調査)	平成 12 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2000』	(第 71 次調査、環境整備)	平成 13 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001』	(第 72 次調査)	平成 14 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2002』	(第 73 次調査)	平成 15 年 3 月

②多賀城関連遺跡発掘調査報告書

『桃生城跡 I』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 1 冊	昭和 50 年 3 月
『桃生城跡 II』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 2 冊	昭和 51 年 3 月
『伊治城跡 I』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 3 冊	昭和 53 年 3 月
『伊治城跡 II』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 4 冊	昭和 54 年 3 月
『伊治城跡 III』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 5 冊	昭和 55 年 3 月
『名生館遺跡 I』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 6 冊	昭和 56 年 3 月
『名生館遺跡 II』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 7 冊	昭和 57 年 3 月
『名生館遺跡 III』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 8 冊	昭和 58 年 3 月
『名生館遺跡 IV』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 9 冊	昭和 59 年 3 月
『名生館遺跡 V』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 10 冊	昭和 60 年 3 月
『名生館遺跡 VI』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 11 冊	昭和 61 年 3 月
『東山遺跡 I』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 12 冊	昭和 62 年 3 月
『東山遺跡 II』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 13 冊	昭和 63 年 3 月
『東山遺跡 III』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 14 冊	平成 元年 3 月
『東山遺跡 IV』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 15 冊	平成 2 年 3 月
『東山遺跡 V』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 16 冊	平成 3 年 3 月
『東山遺跡 VI』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 17 冊	平成 4 年 3 月
『東山遺跡 VII』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 18 冊	平成 5 年 3 月
『下伊場野窯跡』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 19 冊	平成 6 年 3 月
『桃生城跡 III』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 20 冊	平成 7 年 3 月
『桃生城跡 IV』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 21 冊	平成 8 年 3 月
『桃生城跡 V』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 22 冊	平成 9 年 3 月
『桃生城跡 VI』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 23 冊	平成 10 年 3 月
『桃生城跡 VII』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 24 冊	平成 11 年 3 月
『桃生城跡 VIII』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 25 冊	平成 12 年 3 月
『桃生城跡 IX』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 26 冊	平成 13 年 3 月
『桃生城跡 X』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 27 冊	平成 14 年 3 月
『亀岡遺跡 I』	多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 28 冊	平成 15 年 3 月

③研究紀要

『研究紀要 I』	昭和 49 年 3 月
『研究紀要 II』	昭和 50 年 3 月
『研究紀要 III』	昭和 51 年 3 月
『研究紀要 IV』	昭和 52 年 3 月
『研究紀要 V』	昭和 53 年 3 月
『研究紀要 VI』	昭和 54 年 3 月
『研究紀要 VII』	昭和 55 年 3 月

④調査報告書・資料集他

『多賀城と古代日本』	昭和 50 年 3 月
『多賀城漆紙文書』	昭和 54 年 3 月
『多賀城跡—政庁跡図録編—』	昭和 55 年 3 月
『多賀城跡—政庁跡本文編—』	昭和 57 年 3 月
『多賀城と古代東北』	昭和 60 年 3 月
『多賀城跡—発掘調査の歩み—』	平成 15 年 3 月

写真図版

写真図版 1

1 南門南側調査区
(南より)
〔フィルム D23608A〕



2 SD2733 溝 (北より)
〔フィルム D23607A〕



3-1 SF202 築地塀南側面と
SD2729 溝 (南より)
〔フィルム D23596A〕

3-2 SF202 築地塀 E12~19 ライン
(東より)
〔フィルム D23593A〕



写真図版 2



4 SF202 築地塀北側寄柱穴
P 1・4 (北より)
〔フィルム D23591A〕



5 SF202 築地塀北側寄柱礎石
P 9 (東より)
〔フィルム D23592A〕



6 南門北側調査区 SD2734 溝
(北より)
〔フィルム D23636A〕

写真図版 3

- 7 SF202 築地塀側面
E42～E54 ライン (南より)
〔フィルム D23603A〕



- 8 SF202 築地塀 E48 ライン
崩壊土と瓦の出土状況
(南東より)
〔フィルム D23626A〕



- 9 SF202 築地塀横断面
E48 ライン (東より)
〔フィルム D23606A〕



写真図版 4



10 SF202 築地塀横断面
E45 ライン（東より）
〔フィルム D23605A〕



11 SF202 築地塀横断面
（北東より）
〔フィルム D23604B〕



12 SF202 築地塀側面
（南より）
〔フィルム D23588C〕

写真図版 5

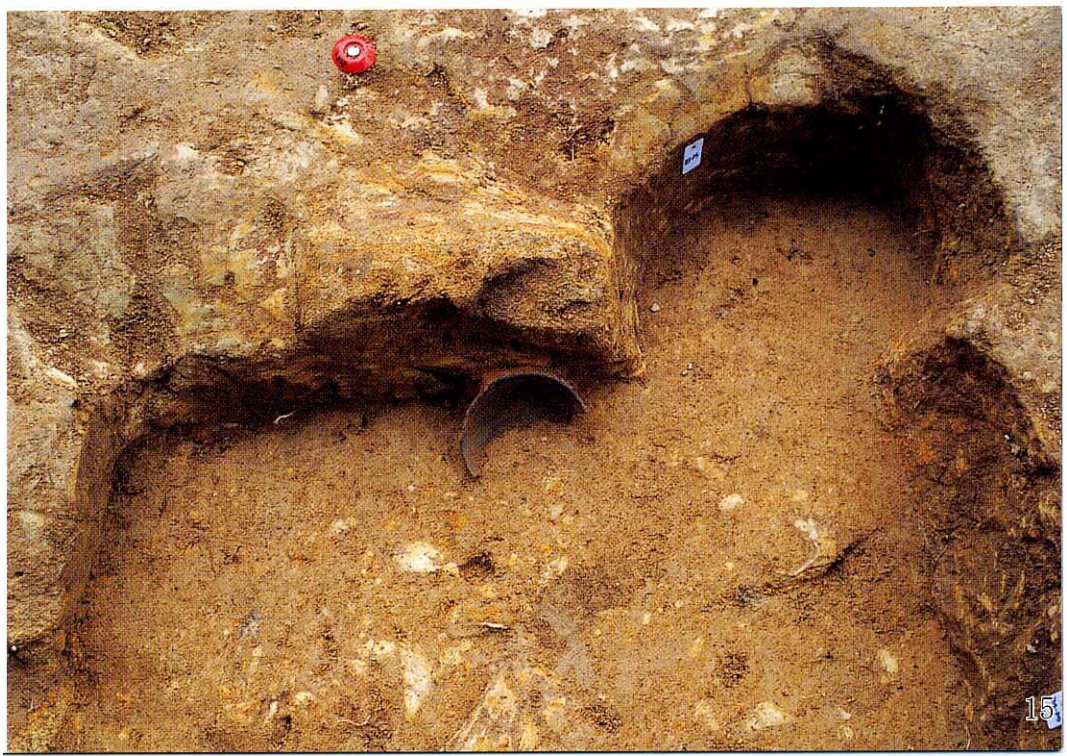
- 13 SB2726B2727 建物跡
全景（北より）
〔フィルム D23580A〕



- 14 SB2727 建物跡
P1 柱穴断面（東より）
〔フィルム D23577A〕



- 15 SD2727 建物跡 P5 柱穴
須恵器坏出土状況
（西より）
〔フィルム D23578A〕



写真図版 6



16 SB201A 南門東棟通り
礎石根石と SA1538 柱列
との関係 (南より)
〔フィルム D23675〕



17 SA1538 柱列と築地塀
積み土の土層断面
(南より)
〔フィルム D23677〕



18 同上
〔フィルム D23684〕

写真図版 7



1
SK2731-1層
細弁蓮花文(311)



2
SK2731-2層
細弁蓮花文(311)



3
SD2728-2層
単弧文軒平瓦(640)



4
崩壊土
単弧文軒平瓦(640)

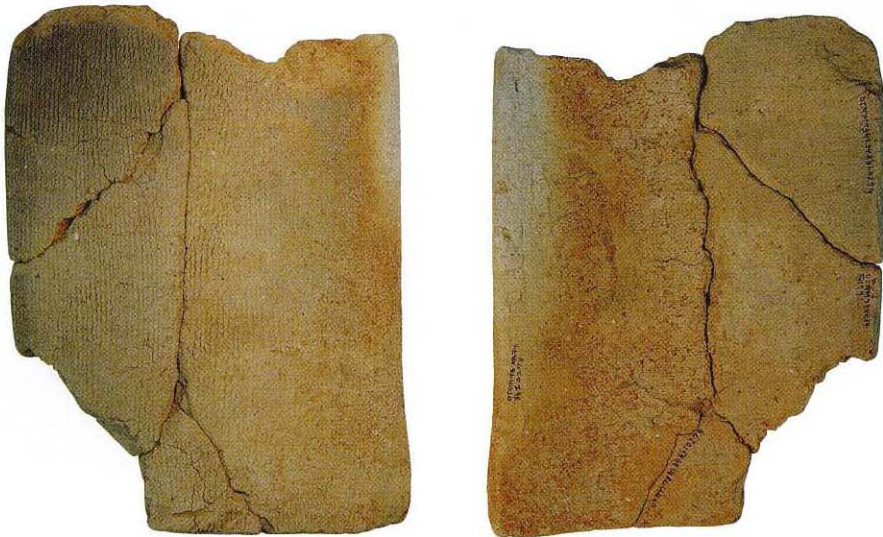


5
SD2739
平瓦ⅡB類(aタイプ)





6
SK2731-2層
平瓦ⅡB類
(aタイプ)



7
崩壊土Ⅰ
平瓦ⅡC類



8
崩壊土Ⅲ
平瓦ⅡC類

写真図版 9



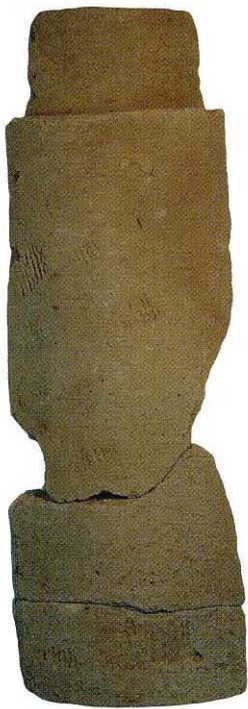
9
SD2728-2層
丸瓦ⅡB類



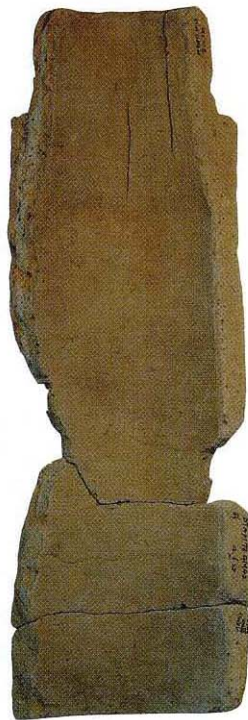
10
SK2731-1層
丸瓦ⅡB類 (刻印「占」)



12
崩壊土
丸瓦ⅡB類



11
崩壊土
丸瓦ⅡB類



13
崩壊土Ⅲ
丸瓦ⅡB類

写真図版 10



14
崩壊土
丸瓦



15
崩壊土
平瓦ⅡB類 (bタイプ)



16
崩壊土Ⅲ
平瓦ⅡC類 (ヘラ書「七」)



17
崩壊土
平瓦ⅡC類 (ヘラ書「井」)



18
崩壊土Ⅲ
丸瓦ⅡB類 (ヘラ書「||」)

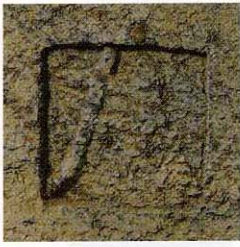


19
表土
丸瓦ⅡC類 (ヘラ書「王」?)



20
表土
丸瓦ⅡB類 (ヘラ書「三」)

写真図版 11



21
SK2724-2層
丸瓦凹面 (刻印「丸」B)



22
表土
平瓦II Ba (刻印「丸」A)



23
表土
平瓦II B (刻印「丸」A)



24
表土
平瓦II Ba (刻印「丸」A)



25
SK2717-2層
丸瓦凹面 (刻印「占」)



26
SD2734-1層
平瓦 (刻印「矢」)



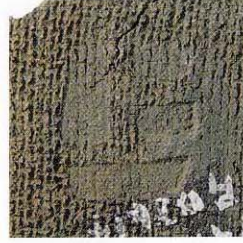
27
崩壊土
丸瓦II B (刻印「伊」)



28
崩壊土
平瓦II Ba (刻印「物」A)



29
崩壊土
平瓦II C (記号「⊕」)



30
表土
平瓦II C (記号「⊕」)



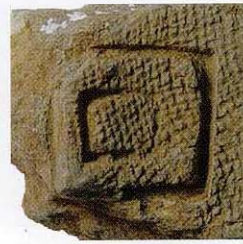
31
崩壊土 I
平瓦II C (記号「⊕」)



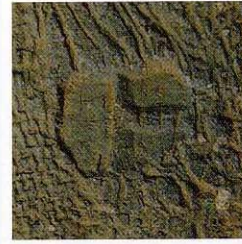
32
表土
丸瓦II (記号「⊕」)



33
表土
平瓦II C (記号「⊕」)



34
表土
丸瓦II (記号「回」)



35
平瓦II C (記号「⊕」)



36
表土
丸瓦II (記号新種)



37
崩壊土II
丸瓦II (記号新種)



38
崩壊土 I
丸瓦II (記号「⊖」)

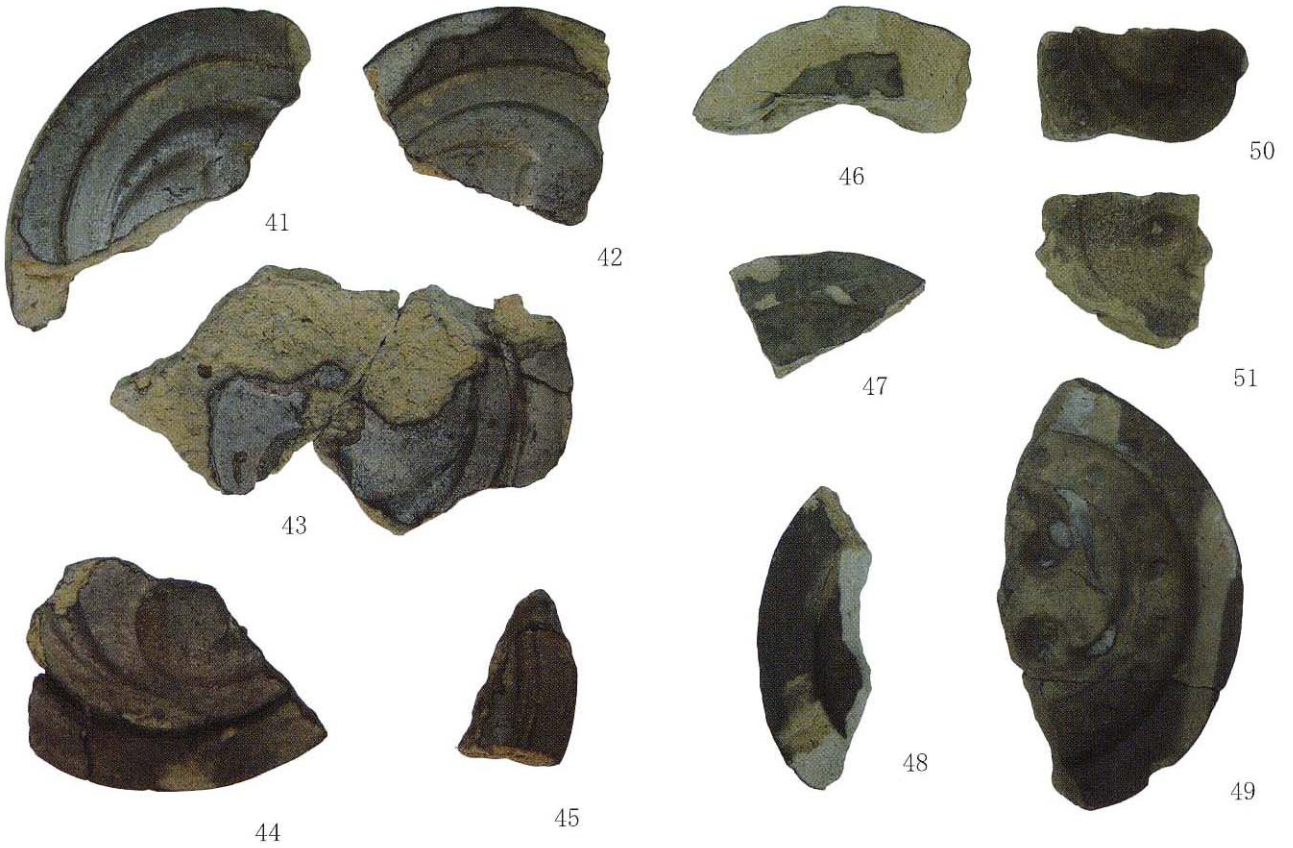


39
表土
丸瓦II (記号「⊖」)



40
表土
平瓦II C (記号「田」)

写真図版 12



巴文 軒丸瓦
 41~45 : 三巴文
 46~51 : 連珠+三巴文



52a

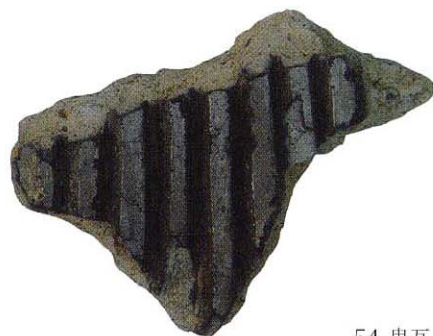


52b

52 鳥衾

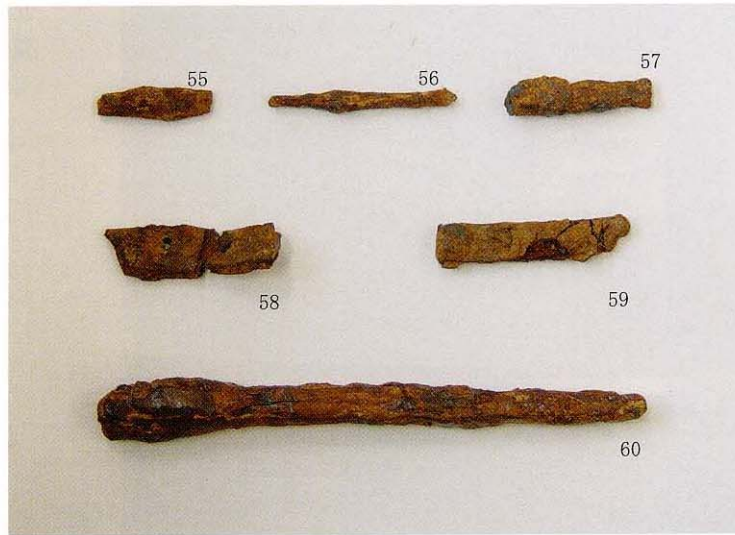


53 鬼瓦 (右耳)



54 鬼瓦 (髭)

写真図版 13



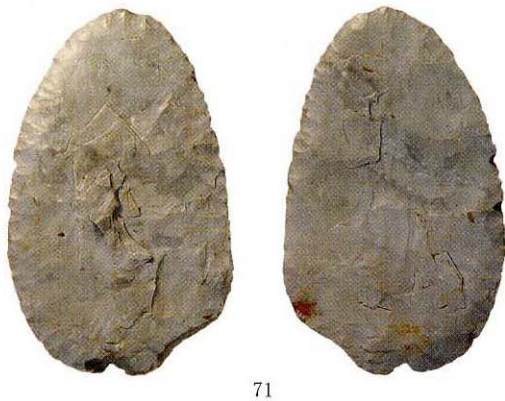
- 55 SD2739 刀子
- 56 崩壊土 鉄鏃
- 57 SD2739 鏝 (のみ)
- 58 カクラン 小札状鉄製品
- 59 表土 鏝 (たがね)
- 60 SD2734 釘



61~63
SF202築地塀
崩壊土 (第2層)
羽口



64~70 SF202築地塀崩壊土 (第2層)
鉄滓



71 表土
両面加工石器



72 崩壊土
縄文土器

写真図版 14

- 1 五万崎地区 佐藤茂雄宅
調査区全景（南より）
〔フィルムD22432〕



- 2 後山地区 佐藤みつ子宅
調査区西半部（東より）
〔フィルムD22929〕



- 3 坂下地区 千葉重機
西調査区
〔フィルムD22427〕



- 4 千葉重機 東調査区
（北より）
〔フィルムD22430〕

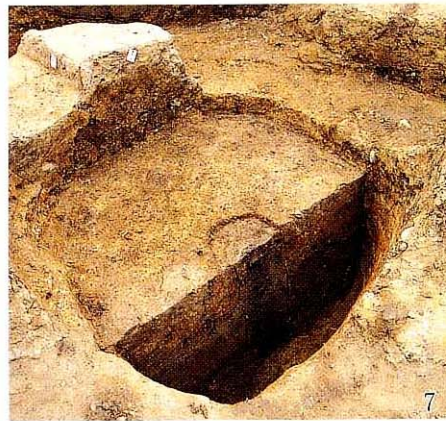




5 城前地区 菊池つめ宅
北調査区 (南より)
〔フィルムD23351〕



6 城前地区 菊池つめ宅
北調査区 (東より)
〔フィルムD23352〕



7 菊池つめ宅 SX2693
柱穴 (西より)
〔フィルムD23371〕

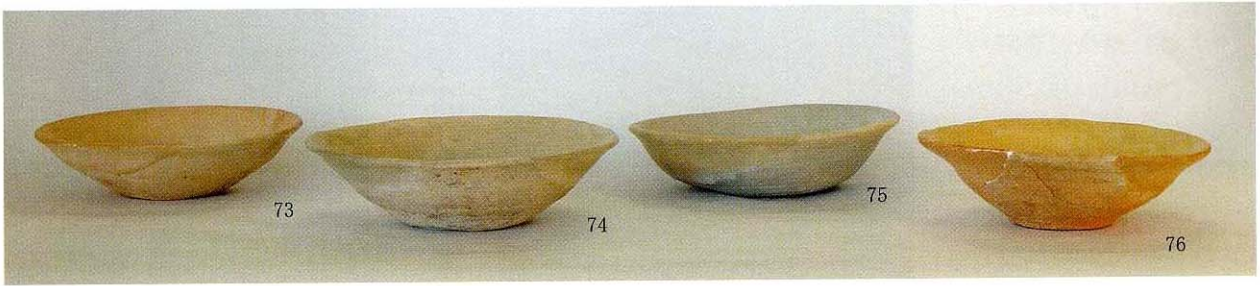


8 菊池つめ宅 SK2704・SK2706
土坑 (北西より)
〔フィルムD23358〕



9 五万崎地区 菊池良子宅調査区 (東より)
〔フィルムD23350〕

写真図版 16



SK2706-1層
須恵系土器 坏



77
SX2705-1層
須恵器 壺



78
SX2705-1層
緑釉 碗



79
SK2706-1層
緑釉 皿



80
SX2705-1層
円面碗



81
表土 埴



82
SD2694-1層
漆こし布



縮尺不同

報告書抄録

ふりがな	みやぎけんたがじょうあとちょうさけんきゅうしょねんぼう 2002							
書名	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2002							
副書名	多賀城跡一第73次調査一							
巻次	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2002							
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所年報							
シリーズ番号	2002							
編著者名	古川 一明・吾妻 俊典・白崎 恵介・山家 由子							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1丁目22-1 TEL 022-368-0102 FAX 022-368-0104							
発行年月日	西暦 2003年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 たがじょうあと 多賀城跡 第73次調査	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市	04209	004	38度	140度	2002.5.13	1,800 m ²	調査計画に 基づく学術 調査
	いちかわうきしま 市川・浮島			18分 14秒	59分 30秒	2002.10.31		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
特別史跡 多賀城跡	国府・ 城柵遺跡	奈良時代 平安時代	築地堀跡 掘立柱建物跡 溝跡 土壌	1条 3棟 16条 5基	○瓦(軒丸瓦・ 軒平瓦・平瓦・丸瓦) ○土師器・須恵器 ○鉄製品	1. 外郭南門東側の築地堀跡の構造と変遷を確認した。 2. 外郭南門南北両側での遺構のあり方と変遷を明らかにした。 3. 調査区東部で掘立柱建物跡を2棟発見した。 4. 通称「鴻の池」の低湿地の南東辺を確認した。		

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2002

多 賀 城 跡

平成15年3月20日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市高崎一丁目 22-1
TEL(022)368-0102
FAX(022)3680104
印刷所 東杜印刷株式会社
